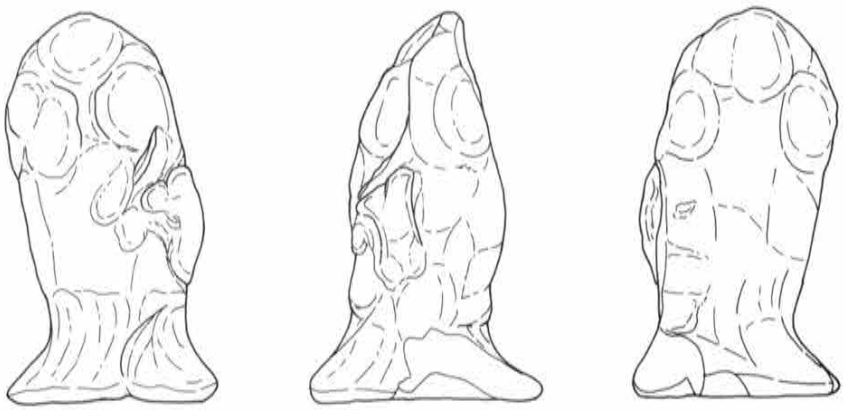
筑後東部地区遺跡群Ⅲ

県営圃場整備事業筑後東部地区所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書第25集



2000

筑後市教育委員会

筑後東部地区遺跡群Ⅲ

鶴田西田遺跡

鶴田西畑遺跡
（A区・B区・C区・D区）

鶴田東大坪遺跡１次調査
（A区・B区）

鶴田野田遺跡

2000

筑後市教育委員会

序

本書に掲載した発掘調査は、筑後東部地区で実施された県営圃場整備事業に伴って平成8年度に行った報告書であります。調査の対象となった遺跡は、同地区内に所在する一部分の埋蔵文化財のうち水路掘削や削土により消滅することになった鶴田西田遺跡、鶴田東大坪遺跡、鶴田西畑遺跡、鶴田野田遺跡の約6000㎡の記録であります。

県営圃場整備事業が実施される筑後東部地区一帯は筑後市内でも遺跡が密集する地域であり、圃場整備事業をはじめ九州縦貫自動車道八女インターチェンジなどの交通や物流に適している立地であるため各種の開発が進められており、当遺跡に所在する文化財の調査並びに保護について、早急な対応が求められています。

今回の調査では、鶴田西畑遺跡（A区）において古墳時代の竪穴住居から蛇紋岩製の勾玉、土製人形、手づくね土器、鉄製品をはじめとした祭祀遺物が多数出土しました。

また、鶴田東大坪遺跡1次調査（A区）から旧石器時代のナイフ形石器が出土し、当地域での先人達の生活を垣間見る事が出来た事で、貴重な成果がありました。

なお、発掘調査を行うにあたり、福岡県筑後川水系農地開発事務所、筑後東部改良区及び、地元の方々には、多大なる御配慮と御協力を賜わりました事に感謝の意を表します。また、今後の文化財愛護思想普及の一助として、学術研究の資料として、本書を広く御活用いただければ幸いです。

おわりに、この報告書の発刊にあたりいろいろと御指導、御協力いただいた関係各位と発掘調査に参加されました皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成12年3月

筑後市教育委員会
教育長　牟田口和良

例言

1.　本書は福岡県筑後川水系農地開発事務所が平成8年度に実施した県営圃場整備事業筑後東部地区の事前調査として筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2.　発掘調査および出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。調査関係者は第1章第1節・調査経過に記したとおりである。なお、出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会において収蔵、保管している。

3.　本書に使用した図面のうち、遺構実測図は、柴田剛が作成し、遺構全体図は、航空写真測量を実施し、写測エンジリアリングに委託した。遺物実測図は、平塚あけみ、江藤玲子、柴田が作成し、遺物の製図は平塚、遺構は柴田が作成した。

4.　本書に使用した遺構写真および遺物写真は、柴田が撮影、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。

5.　鉄製品の保存処理、脱塩処理およびX線透過写真撮影は、太宰府市教育委員会文化財課下川可容子氏にお願いした。

6.　今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第2座標系を基準としている。また、方位はG.N.を基準とする。

7.　遺構全体図で示した破線は撹乱を表す。

8.　本書で使用した遺構の表示は、下記の略号による。

ＳＩ−竪穴住居　ＳＤ−溝　ＳＫ−土壙　ＳＴ−墓　ＳＸ−不明遺構・撹乱　ＳＰ−Ｐｉｔ

9.　報告書に掲載した遺構番号は調査段階での仮番号を生かしている。

遺構の略号（ＳＤ・ＳＸなど）の前に調査次数を冠することで過去および将来の同遺跡の調査における遺構番号の重複を避けた。

（例）第1次調査のＳ−10が竪穴住居であった場合1ＳＩ10となる。

10.　本書に掲載した参考文献および遺物の分類については以下に記載している通りである。

第２章　位置と環境

筑後市教育委員会（1994）　「筑後東部地区遺跡群Ⅰ」　『筑後市文化財調査報告書第11集』

筑後市教育委員会（1995）　「筑後東部地区遺跡群Ⅱ」　『筑後市文化財調査報告書第12集』

筑後市教育委員会（1999）　「徳久中牟田遺跡」　『筑後市文化財調査報告書第19集』

第５章　考察

（1）

筑後市教育委員会（1988）　「田佛遺跡」　『筑後市文化財調査報告書第5集』

筑後市教育委員会（1990）　「蔵数遺跡群」　『筑後市文化財調査報告書第6集』

筑後市教育委員会（1994）　「久富鳥居遺跡」　『筑後市文化財調査報告書第13集』

（2）

前原市立伊都歴史資料館　（1997）　『再現！糸高の博物館ｐａｒｔ１　古墳時代編』

(3)
石野博信（1992）　『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館
考古学を楽しむ会（1997）『土壁　創刊号』
考古学を楽しむ会（1998）『土壁　第2号』
(4)
都出比呂志（1989）『日本農耕社会の成立過程』　岩波新書
石野博信他（1991）「生活と祭祀」『古墳時代の研究3』 雄山閣
近つ飛鳥博物館（1995）『平成7年度春季特別展　祭と政－古墳時代のまつるかたち－』
安土城考古博物館（1997）『平成9年度春季特別展 まつるかたち－古墳・飛鳥の人と神－』
(5)
狭川真一（1993）「墳墓にみる供献形態の変遷とその背景－北部九州を中心として－」
『貿易陶磁研究No.13』
筑後市教育委員会（1990）　「蔵数遺跡群」　『筑後市文化財調査報告書第6集』
筑後市教育委員会（1991）　「高江遺跡」　『筑後市文化財調査報告書第7集』
筑後市史編さん委員会（1997）『筑後市史第1巻』
(6)
筑後市教育委員会（1994）「筑後東部地区遺跡群Ⅰ」『筑後市文化財調査報告書第11集』
筑後市教育委員会（1995）「筑後東部地区遺跡群Ⅱ」『筑後市文化財調査報告書第12集』
福岡県教育委員会（1998）『福岡県埋蔵文化財調査年報　平成7年度』

陶磁器

横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」
『九州歴史資料館研究論集4』

石鍋

森田勉（1983）「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『佛教藝術148号』

11. 表紙は鶴田西畑遺跡（A区）1SI10出土土器実測図（1/1）
12. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。（承認番号平12九複、第61号、62号、63号、64号）
13. 本書の執筆、編集は柴田が担当した。

本文目次

第1章　はじめに…… 1
第1節　調査経過…… 1
第2節　遺構の説明の前に…… 3
第2章　位置と環境…… 4
第3章　調査成果…… 6
第1節　鶴田西田遺跡…… 6
1.はじめに…… 6
2.検出遺構について…… 6
3.小結…… 7
第2節　鶴田西畑遺跡（A区・B区・C区・D区）…… 8
1.はじめに…… 8
2.検出遺構について…… 8
3.出土遺物について…… 14
4.小結…… 30
第3節　鶴田東大坪遺跡1次調査（A区・B区）…… 31
1.はじめに…… 31
2.検出遺構について…… 31
3.出土遺物について…… 38
4.小結…… 43
第4節　鶴田野田遺跡…… 44
1.はじめに…… 44
2.検出遺構について…… 44
3.小結…… 45
第5節　考察…… 47
(1) 鶴田西畑遺跡（A区）1SI10竪穴住居と筑後市内の竪穴住居との比較及び近隣の状況…… 47
(2) 鶴田西畑遺跡（A区）出土遺物と出土状況について…… 49
(3) 鶴田西畑遺跡（A区）1SI10・1SI20竪穴住居及び屋内施設について…… 52
(4) 鶴田西畑遺跡（A区）1SI10竪穴住居の復原と位置付けについて…… 54
(5) 鶴田東大坪遺跡1次調査（A区）1ST35について…… 55
(6) まとめ…… 56

挿図目次

Fig.1 筑後東部地区圃場整備事業における発掘調査地点分布図（1/25.000）…… 2
Fig.2 竪穴住居模式図名称一覧（1/160）・小柱穴（杭痕）計測値一覧…… 3
Fig.3 筑後市周辺遺跡分布図（1/25.000）…… 5
Fig.4 鶴田西田遺跡調査地点位置図（1/2.500）…… 6
Fig.5 鶴田西田遺跡遺構全体図・北壁土層断面実測図（1/80）…… 7
Fig.6 鶴田西畑遺跡（A区・B区・C区・D区）調査地点位置図（1/2.500）…… 8
Fig.7（A区）1SD01・1SD05土層断面実測図（1/40）…… 8
Fig.8 鶴田西畑遺跡（A区）遺構全体図（1/200）…… 9

Ｆｉｇ.9（Ａ区）１ＳＤ05・１ＳＤ15土層断面実測図（1/40）……10
Ｆｉｇ.10 鶴田西畑遺跡（Ｂ区）遺構全体図（1/300）……10
Ｆｉｇ.11（Ａ区）１ＳＩ10・１ＳＩ20遺構実測図（1/80）・土層断面実測図（1/80）・Ｐｉｔ1・Ｐｉｔ2・Ｐｉｔ3
Ｐｉｔ4土層断面実測図（1/40）……11
Ｆｉｇ.12（Ａ区）１ＳＩ10・１ＳＩ20遺物出土状況実測図（1/80）・炉・出入り口・Ｐｉｔ5・Ｐｉｔ6・Ｐｉｔ12
土層断面実測図（1/40）……12
Ｆｉｇ.13 鶴田西畑遺跡（Ｃ区）遺構全体図（1/300）……13
Ｆｉｇ.14 鶴田西畑遺跡（Ｄ区）遺構全体図（1/300）……13
Ｆｉｇ.15（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図①（1/3）……14
Ｆｉｇ.16（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図②（1/3）……15
Ｆｉｇ.17（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図③（1/3）……15
Ｆｉｇ.18（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図④（1/3）……16
Ｆｉｇ.19（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑤（1/3）……16
Ｆｉｇ.20（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑥（1/3）……17
Ｆｉｇ.21（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑦（1/3）……18
Ｆｉｇ.22（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑧（1/3）……19
Ｆｉｇ.23（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑨（1/3）……20
Ｆｉｇ.24（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑩（1/2）……20
Ｆｉｇ.25（Ａ区）１ＳＩ10出土石器・鉄器実測図⑪（1/3）……21
Ｆｉｇ.26（Ａ区）１ＳＩ10床面・１ＳＩ10北拡張部床面出土土器実測図①（1/3）……22
Ｆｉｇ.27（Ａ区）１ＳＩ10床面・１ＳＩ10北拡張部床面出土石器実測図②（1/3・1/2）……23
Ｆｉｇ.28（Ａ区）１ＳＩ10北1層出土土器実測図（1/3）……24
Ｆｉｇ.29（Ａ区）１ＳＩ10北2層出土土器実測図①（1/3）……24
Ｆｉｇ.30（Ａ区）１ＳＩ10北2層出土土器実測図②（1/3）……24
Ｆｉｇ.31（Ａ区）１ＳＩ10北2層出土土器実測図③（1/3）……25
Ｆｉｇ.32（Ａ区）１ＳＩ10北2層出土土器実測図④（1/3）……25
Ｆｉｇ.33（Ａ区）１ＳＩ10北2層出土土器実測図⑤（1/3）……25
Ｆｉｇ.34（Ａ区）１ＳＩ10北3層出土土器実測図①（1/3）……26
Ｆｉｇ.35（Ａ区）１ＳＩ10北3層出土土器実測図②（1/3）……26
Ｆｉｇ.36（Ａ区）１ＳＩ10北3層出土土器実測図③（1/3）……26
Ｆｉｇ.37（Ａ区）１ＳＩ10北3層出土土器実測図④（1/3）……27
Ｆｉｇ.38（Ａ区）１ＳＩ10南2層出土土器実測図（1/3）……27
Ｆｉｇ.39（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部2層出土土器実測図（1/3）……27
Ｆｉｇ.40（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部西3層出土土器実測図（1/3）……28
Ｆｉｇ.41（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部東3層出土土器実測図（1/3）……28
Ｆｉｇ.42（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部東4層出土土器実測図（1/3）……28
Ｆｉｇ.43（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部9層出土石器実測図（1/2）……28
Ｆｉｇ.44（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ5出土土器実測図（1/3）……28
Ｆｉｇ.45（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ6・Ｐｉｔ6・6層出土土器実測図（1/3）……29
Ｆｉｇ.46（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ9・7層出土石器実測図（1/3）……29
Ｆｉｇ.47（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ10・Ｐｉｔ10・5層出土土器実測図（1/3）……29
Ｆｉｇ.48（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ12・1層出土土器実測図（1/3）……29
Ｆｉｇ.49（Ａ区）１ＳＤ01出土石器実測図（1/2）……29
Ｆｉｇ.50 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区・Ｂ区）調査地点位置図（1/2.500）……31
Ｆｉｇ.51（Ａ区）１ＳＤ01土層断面実測図（1/40）……31

Ｆｉｇ.52 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）遺構全体図（1/300）折込み …… 32
Ｆｉｇ.53（Ａ区）１ＳＸ05実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 34
Ｆｉｇ.54（Ａ区）１ＳＫ10実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 34
Ｆｉｇ.55（Ａ区）１ＳＫ14・１ＳＫ15実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 34
Ｆｉｇ.56（Ａ区）１ＳＫ20・１ＳＤ25・１ＳＤ50実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 35
Ｆｉｇ.57（Ａ区）１ＳＫ30実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 35
Ｆｉｇ.58（Ａ区）１ＳＴ35実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 35
Ｆｉｇ.59（Ａ区）１ＳＫ40実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 36
Ｆｉｇ.60（Ａ区）１ＳＫ45実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）…… 36
Ｆｉｇ.61 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ｂ区）遺構全体図（1/200）…… 37
Ｆｉｇ.62（Ａ区）１ＳＤ01出土土器実測図（1/3）…… 38
Ｆｉｇ.63（Ａ区）１ＳＰ07出土土器実測図（1/3）…… 38
Ｆｉｇ.64（Ａ区）１ＳＰ09出土土器実測図（1/3）…… 38
Ｆｉｇ.65（Ａ区）１ＳＫ10出土土器実測図（1/3）…… 38
Ｆｉｇ.66（Ａ区）１ＳＰ12出土土器実測図（1/3）…… 38
Ｆｉｇ.67（Ａ区）１ＳＫ15出土土器実測図①（1/3）…… 38
Ｆｉｇ.68（Ａ区）１ＳＫ15出土石器実測図②（1/2）…… 38
Ｆｉｇ.69（Ａ区）１ＳＰ17出土石器実測図（1/3）…… 39
Ｆｉｇ.70（Ａ区）１ＳＰ18出土土器実測図（1/3）…… 39
Ｆｉｇ.71（Ａ区）１ＳＰ19出土土器実測図（1/3）…… 39
Ｆｉｇ.72（Ａ区）１ＳＰ22出土石器実測図（1/3）…… 39
Ｆｉｇ.73（Ａ区）１ＳＤ25出土石器実測図①（1/3）…… 39
Ｆｉｇ.74（Ａ区）１ＳＤ25出土石器実測図②（1/3）…… 40
Ｆｉｇ.75（Ａ区）１ＳＤ25出土石器実測図③（1/3）…… 40
Ｆｉｇ.76（Ａ区）１ＳＤ25・5層出土土器・石製品実測図①（1/3）…… 40
Ｆｉｇ.77（Ａ区）１ＳＤ25・5層出土石器実測図②（1/2）…… 40
Ｆｉｇ.78（Ａ区）１ＳＫ30出土石器実測図①（1/3）…… 40
Ｆｉｇ.79（Ａ区）１ＳＫ30出土石器実測図②（1/2）…… 40
Ｆｉｇ.80（Ａ区）１ＳＫ30・2層出土石器実測図①（1/2）…… 41
Ｆｉｇ.81（Ａ区）１ＳＫ30・2層出土土器実測図②（1/4）…… 41
Ｆｉｇ.82（Ａ区）１ＳＴ35出土土器実測図（1/3）…… 41
Ｆｉｇ.83（Ａ区）１ＳＫ40出土土器実測図（1/3）…… 41
Ｆｉｇ.84（Ａ区）１ＳＤ50出土石器実測図①（1/4）…… 42
Ｆｉｇ.85（Ａ区）１ＳＤ50出土石器実測図②（1/4）…… 42
Ｆｉｇ.86（Ａ区）１ＳＤ50出土石器実測図③（1/4）…… 42
Ｆｉｇ.87（Ａ区）１ＳＤ50・2層出土土器実測図（1/3）…… 42
Ｆｉｇ.88（Ａ区）１ＳＤ50・4層出土土器実測図（1/3）…… 42
Ｆｉｇ.89（Ｂ区）１ＳＤ55出土土器実測図（1/3）…… 43
Ｆｉｇ.90 鶴田野田遺跡調査地点位置図（1/2.500）…… 44
Ｆｉｇ.91 １ＳＤ05土層断面実測図（1/40）…… 44
Ｆｉｇ.92 １ＳＤ07・１ＳＤ08土層断面実測図（1/40）…… 45
Ｆｉｇ.93 １ＳＤ10・１ＳＤ15土層断面実測図（1/40）…… 45
Ｆｉｇ.94 鶴田野田遺跡遺構全体図（1/300）…… 46
Ｆｉｇ.95 筑後市における5世紀前半頃の竪穴住居分布図（1/100.000）…… 47
Ｆｉｇ.96 筑後市における13世紀頃の墳墓分布図（1/100.000）…… 55

表目次

Ｔａｂ.1 筑後市内の5世紀前半頃の竪穴住居一覧表…… 48
Ｔａｂ.2 福岡県内における竪穴住居出土の方形鋤先一覧表 …… 51

写真図版

巻頭図版1　鶴田西畑遺跡（Ａ区）１ＳＩ10出土遺物・土製人形（表）
　　鶴田西畑遺跡（Ａ区）１ＳＩ10出土遺物・土製人形（裏）
巻頭図版2　鶴田西畑遺跡（Ａ区）１ＳＩ10出土石器・勾玉
　　鶴田西畑遺跡（Ａ区）１ＳＩ10出土鉄器・方形鋤先
　　鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）１ＳＫ30出土石器・ナイフ形石器

Pla.1　鶴田西田遺跡全景（西から）
　　１ＳＤ10・１ＳＤ20完掘状況（南から）
Pla.2　１ＳＤ30完掘状況（南から）
　　鶴田西畑遺跡（Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区）全景（空中写真・北西から）
Pla.3　（Ａ区）全景（空中写真・真上から・上が北）
　　（Ｂ区）全景（空中写真・真上から・上が北）
Pla.4　（Ｃ区）全景（空中写真・真上から・上が東）
　　（Ｄ区）全景（空中写真・真上から・上が東）
Pla.5　（Ａ区）１ＳＤ01・１ＳＤ05土層観察ｎ--ｎ’（北東から）
　　（Ａ区）１ＳＤ05・１ＳＤ15土層観察ｏ--ｏ’（東から）
Pla.6　（Ａ区）１ＳＩ10土層観察ａ---ａ’ライン南半部（東から）
　　（Ａ区）１ＳＩ10土層観察ｂ---ｂ’ライン東半部（南から）
Pla.7　（Ａ区）１ＳＩ10遺物出土状況（南から）
　　（Ａ区）１ＳＩ10遺物出土状況（北から）
Pla.8　（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ13ロームブロック検出状況（南から）
　　（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ13勾玉出土状況（東から）
Pla.9　（Ａ区）１ＳＩ10炉検出状況（南から）
　　（Ａ区）１ＳＩ10間仕切り溝検出状況（西から）
Pla.10　（Ａ区）１ＳＩ10完掘状況（拡張前・空中写真・真上から・上が西）
　　（Ａ区）１ＳＩ10完掘状況（拡張前・北西から）
Pla.11　（Ａ区）調査区北壁土層観察ｋ--ｋ’（南から）
　　（Ａ区）北拡張部検出状況・調査区北壁土層観察近景ｋ--ｋ’
　　（南から）
Pla.12　（Ａ区）北拡張部遺構・遺物検出状況（南西から）
　　（Ａ区）北拡張部土層観察ｌ--ｌ’（東から）
Pla.13　（Ａ区）北拡張部断ち割り状況ｌ--ｌ’（東から）
　　（Ａ区）北拡張部完掘状況（北東から）
Pla.14　（Ａ区）１ＳＩ10・１ＳＩ20完掘状況（拡張後・東から）
　　（Ａ区）１ＳＩ10・１ＳＩ20完掘状況（拡張後・南から）
Pla.15　（Ａ区）出土土器（1）
Pla.16　（Ａ区）出土土器（2）
Pla.17　（Ａ区）出土土器（3）
Pla.18　（Ａ区）出土土器（4）
Pla.19　（Ａ区）出土土器（5）
Pla.20　（Ａ区）出土土器（6）
Pla.21　（Ａ区）出土土器（7）
Pla.22　（Ａ区）出土土器（8）
Pla.23　（Ａ区）出土土器・鉄器（9）
Pla.24　（Ａ区）出土石器・鉄器（10）
Pla.25　鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区・Ｂ区）全景（空中写真・北から）
　　（Ａ区）全景（空中写真・真上から・上が北）
Pla.26　（Ｂ区）全景（空中写真・真上から・上が南）
　　（Ａ区）１ＳＤ01・１ＳＸ05完掘状況（空中写真・真上から・上が北）
Pla.27　（Ａ区）１ＳＤ01土層観察ａ--ａ’（西から）
　　（Ａ区）１ＳＤ01土層観察ｂ--ｂ’（西から）
Pla.28　（Ａ区）１ＳＸ05完掘状況（東から）
　　（Ａ区）１ＳＸ05完掘状況（南西から）
Pla.29　（Ａ区）１ＳＸ05完掘状況（北西から）
　　（Ａ区）１ＳＫ10土層観察ｅ--ｅ’（南から）
Pla.30　（Ａ区）１ＳＫ10完掘状況（南から）
　　（Ａ区）１ＳＫ14・１ＳＫ15検出状況（南東から）
Pla.31　（Ａ区）１ＳＫ14・１ＳＫ15土層観察ｆ--ｆ’（南東から）
　　（Ａ区）１ＳＫ14・１ＳＫ15完掘状況（南東から）
Pla.32　（Ａ区）１ＳＫ20・１ＳＤ25・１ＳＤ50土層観察ｈ--ｈ’（西から）
　　（Ａ区）１ＳＫ20・１ＳＤ25・１ＳＤ50土層観察ｇ--ｇ’（南西から）
Pla.33　（Ａ区）１ＳＫ20・１ＳＤ25・１ＳＤ50土層観察近景（南から）
　　（Ａ区）１ＳＫ20・１ＳＤ25・１ＳＤ50完掘状況（南から）
Pla.34　（Ａ区）１ＳＫ30検出状況（北東から）
　　（Ａ区）１ＳＫ30土層観察ｉ--ｉ’（東から）
Pla.35　（Ａ区）１ＳＫ30完掘状況（南東から）
　　（Ａ区）１ＳＴ35土層観察ｊ--ｊ’（北から）
Pla.36　（Ａ区）１ＳＴ35遺物出土状況（北東から）
　　（Ａ区）１ＳＫ40土層観察ｋ--ｋ’（南から）
Pla.37　（Ａ区）１ＳＫ40完掘状況（南から）
　　（Ａ区）１ＳＫ45完掘状況（北から）
Pla.38　（Ａ区・Ｂ区）出土土器（1）
Pla.39　（Ａ区）出土石器（2）
Pla.40　（Ａ区）出土石器（3）
Pla.41　鶴田野田遺跡全景（空中写真・真上から・上が南）
　　全景（空中写真・北から）
Pla.42　１ＳＤ05土層観察ｂ---ｂ’（西から）
　　１ＳＤ05土層観察ｄ--ｄ’（北東から）
Pla.43　１ＳＤ07・１ＳＤ08土層観察ｅ--ｅ’（北東から）
　　１ＳＤ10・１ＳＤ15土層観察ｆ--ｆ’（西から）

第1章　はじめに　　第1節・調査経過

県営圃場整備事業筑後東部地区は、福岡県南西部、筑後市の南東部に位置する。この地区は、米麦中心の二毛作穀倉地帯として農業経営が行われてきたが、近代農業の改善に伴い施設園芸が導入され、農業経営は多様化している。しかし、耕作は不整形かつ狭小で分散され、道路や用排水路の整備は行われていない状況である。こうした状況の中、耕作の集団化、区画整理、農道の整備、用排水路の分離など営農体系を確立するため、平成3年から圃場整備事業が実施されるようになった。

発掘調査については、平成8年度に筑後市教育委員会から福岡県筑後川水系農地開発事務所へ予定地内に埋蔵文化財が認められた事を事業関係者に回答し協議を行った。協議の結果、「筑後東部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として、掘削の及ぶ支線用排水路工事予定地及び面の削平を受ける箇所を調査対象とすることになった。埋蔵文化財発掘調査の費用については国、県から一部の補助を受け、受益者負担については文化財担当部局で負担し、残る費用については水系事務所が準備することで合意した。

調査は平成8年度に実施し、遺物の整理及び報告書作成については、平成10・11年度に筑後市役所内文化財整理室にて行った。

なお、発掘調査及び整理作業の関係者は次のとおりである。また、平成11年4月から筑後市の機構改革により社会教育係から文化係に所管が変更になった。

1）調査主体　　筑後市教育委員会

2）総括

	平成8年度	平成11年度
教育長	森田基之	牟田口和良
教育部長	津留忠義	下川雅晴
社会教育課長	山口逸郎	庄村國義
社会教育係長	本村正晴	田中僚一（文化係係長）
社会教育係（文化財担当）		文化係　（文化財担当）
（文化財専門職）	永見秀徳	永見秀徳
	小林勇作	小林勇作
	田中　剛	上村英士
（文化財学芸員）		
（嘱託）	**柴田　剛（調査担当）**	**柴田　剛（報告書担当）**
		立石真二（H11.7.1～）

3）発掘調査参加者（順不同、敬称略）

愛川一枝	奥村太郎	小野清次	小野ミノブ	加藤礼子	田島好江	深町美智子	深町順子
平尾仁子	村上幸子	森山美津子	井上雅之	瀬戸八重子	深町スミ子	吉田裕	吉田喜美子
大塚政夫	椛島美恵子	北島清	土井八重子	角里子	近藤都	近藤ヨシ子	鶴芳輝
小野カトリ	牛島蓉子	平井正芳	松木龍幹	井上むつ子	村上美津子	吉開朝子	高山加代子
壇ちゑこ	堤奈留美	徳永征士	馬場孝司	浜田タミ子	室園京子	本村修一	富安英子
江崎貴浩	江崎末廣	蒲池京子	田中ミドリ	平井良治	矢次和枝	渡辺茂喜	渡辺泰子
高野奈緒美	浅山頼子	江崎トシ子	井上正治	東末子	池末桂子	太田黒三枝	古賀明美
城崎マスヨ	古賀妙子						

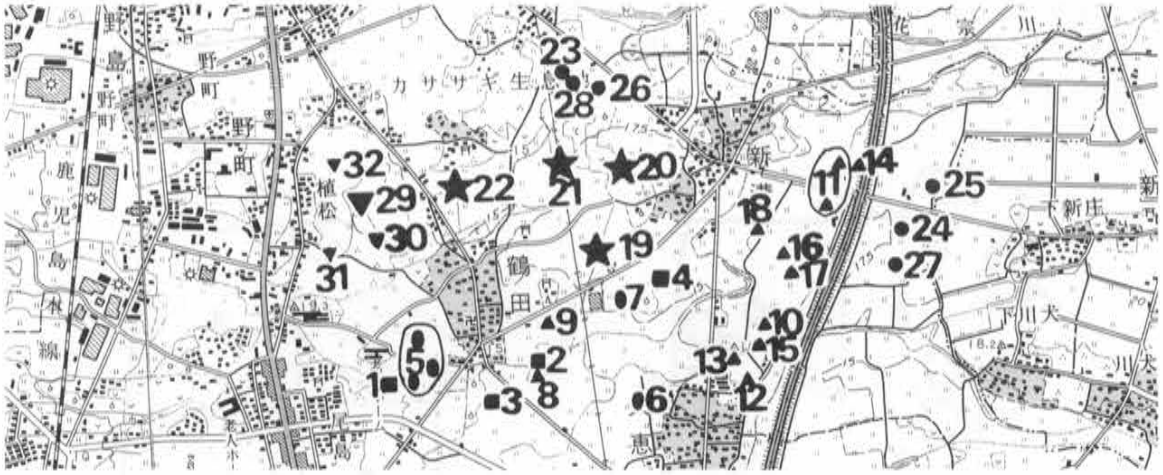
4）整理作業参加者（順不同、敬称略）

調査補助員　平塚あけみ　江藤玲子（～H11.3）

整理作業員　野間口靖子　馬場敦子　湊まど香（～H10.4）　野口晴香　湯川琴美

なお、調査及び整理に際しては、筑後東部土地改良区に御協力を頂き、次の方々に有意義なご指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。また、同僚の上村英士氏、小林勇作氏にはパソコンの操作で協力を得た。

伊藤玄三（法政大学）　新原正典（九州歴史資料館）　小田和利（福岡県教育庁南教育事務所）
城戸康利、山村信榮、高橋学、中島恒次郎、井上信正、宮崎亮一、下川可容子（以上太宰府市教育委員会）　富永直樹、白木守、神保公保、小沢太郎（以上久留米市教育委員会）　赤崎敏男、大塚恵治、中川寿賀子、山田朗子（以上八女市教育委員会）　田中康信（瀬高町教育委員会）　尾崎源太郎（広川町教育委員会）　塚本映子（三潴町教育委員会）　石井扶美子（夜須町教育委員会）　大坪剛（水巻町教育委員会）　中間研二、秦憲二、吉田東明、重藤輝行、岸本圭、水ノ江和同、佐々木隆彦、杉原敏之（以上福岡県教育庁文化課）　古後憲浩（鞍手町歴史資料館）　武田光正（遠賀町教育委員会）
川村博、瓜生秀文、岡部裕俊（以上前原市教育委員会）　山田元樹、坂井義哉（以上大牟田市教育委員会）　濱田学（中間市教育委員会）　平嶋文博（三輪町教育委員会）　宮田浩之、杉本岳史（以上小郡市教育委員会）　酒巻忠史、中能隆（以上千葉県木更津市教育委員会）　橋本輝彦（奈良県桜井市教育委員会）　市村慎太郎（財団法人大阪府文化財調査研究センター）　塩地潤一（大分市教育委員会）
小沢洋、稲葉昭智、甲斐博幸、今坂公一、西原崇浩（以上財団法人君津郡市文化財センター）
狭川真一（財団法人元興寺文化財研究所）



Ｆｉｇ.1 筑後東部地区圃場整備事業における発掘調査地点分布図（1/25.000）

平成5年度～平成10年度まで実施した筑後東部圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡名一覧表
（Ｆｉｇ.1の図面番号と遺跡名一覧表の番号は一致する。）

■平成5年度調査
1. 鶴田岸添遺跡1次調査
2. 鶴田楢原遺跡1次調査（Ａ・Ｂ区）
3. 鶴田前畠遺跡（Ａ・Ｂ・Ｃ区）
4. 鶴田丸田遺跡（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区）

★平成8年度調査
19. 鶴田西田遺跡
20. 鶴田西畑遺跡（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区）
21. 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ・Ｂ区）
22. 鶴田野田遺跡

▼平成10年度調査
29. 鶴田牛ヶ池遺跡1.2.3.4次調査
30. 鶴田東牛ヶ池遺跡1.2次調査
31. 鶴田西牛ヶ池遺跡
32. 鶴田木屋ノ角遺跡

●平成6年度調査
5. 鶴田岸添遺跡2.3.4次調査
6. 久恵野元遺跡1.2次調査
7. 新溝松原遺跡

●平成9年度調査
23. 鶴田東大坪遺跡2次調査
24. 鶴田溝代遺跡
25. 久恵北水原遺跡
26. 久恵今町遺跡
27. 新溝犬丸遺跡
28. 新溝北新替遺跡

▲平成7年度調査
8. 鶴田楢原遺跡2次調査
9. 鶴田武津恵遺跡（Ａ・Ｂ区）
10. 久恵権藤遺跡1.2次調査
11. 久恵内次郎遺跡1.2次調査
12. 久恵岸ノ下遺跡1次調査
13. 久恵岸ノ下遺跡2次調査（Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区）
14. 久恵北草場遺跡
15. 久恵川ノ上遺跡
16. 久恵東岸遺跡
17. 久恵上川原遺跡（Ａ・Ｂ区）
18. 久恵中野遺跡（Ａ・Ｂ区）

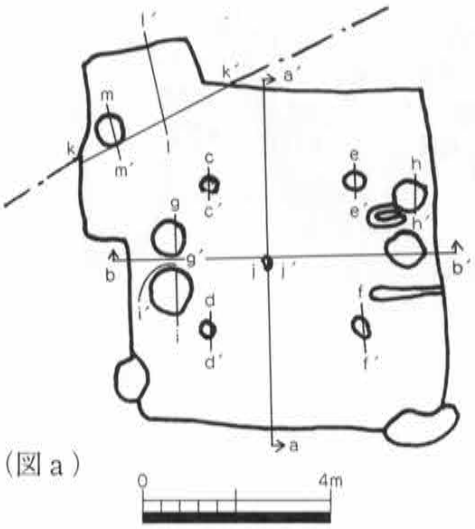
第2節　遺構の説明の前に

鶴田西畑遺跡（Ａ区）の1ＳＩ10竪穴住居の調査途中で担当者が交代したため、遺物出土状況および遺構検出で不明な箇所がある。

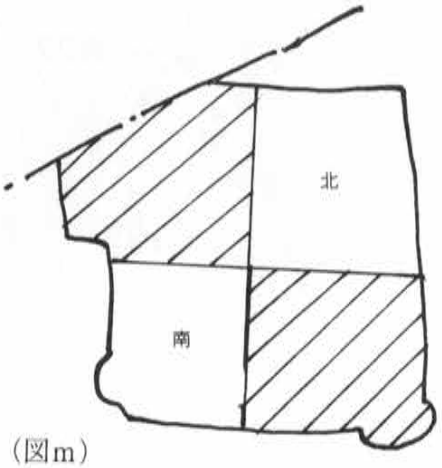
以下、模式図（Ｆｉｇ.2）を用いて土層ポイント（図ａ）、遺物取り上げ、Ｐｉｔ、遺構検出等について説明する。

1ＳＩ10で取り上げた遺物は、斜線で示した部分に当たる（図ｍ）。この部分の遺物は全て覆土中の遺物として取り上げた。残りの部分について上を北（1ＳＩ10北）下を南（1ＳＩ10南）とし、層位ごとに分けて取り上げた（例・1ＳＩ10・北2層、1ＳＩ10・南3層）。

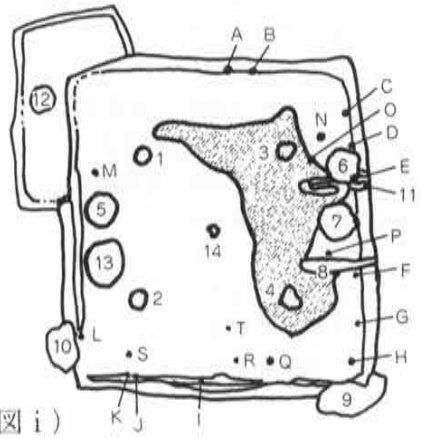
また、竪穴住居の一部に張り出し部があったが、1ＳＩ10としてすでに掘削していた為、詳しい状況がわからなかった。そのため調査区を一部拡張した結果、住居が切り合っていることが確認出来た（1ＳＩ20）。調査区の拡張を行った部分については、土層ベルトを中央に設定し、右を北拡張部東とし、左を北拡張部西とし層位ごとに分けて取り上げた（例・1ＳＩ10北拡張部東2層、1ＳＩ10北拡張部東3層）。ベルト部分の出土遺物について同様に層位ごとに取り上げた（例・1ＳＩ10北拡張部2層）。本来、1ＳＩ20とすべきであるが、仮番号をいかしている。その他、竪穴住居内および拡張部分内で確認した遺構をＰｉｔとし、1～13の番号をつけた（図ｉ）。出土遺物についても層位ごに取り上げた（例・1ＳＩ10Ｐｉｔ5、1ＳＩ10Ｐｉｔ6・6層）。



（図ａ）



（図ｍ）



（図ｉ）

竪穴住居模式図名称一覧（1/160）

1～4（柱穴）	5～7.12（屋内土壙）
8.11（間仕切り溝）	9.10（別遺構・撹乱）
13（出入り口）	14（炉）
スクリントーン（硬化面）	黒丸（小柱穴）

小柱穴（杭痕）計測値一覧

A.9.7cm	B.16.0cm	C.7.3cm	D.10.6cm	E.8.1cm
F.9.2cm	G.4.1cm	H.4.1cm	I.11.9cm	J.21.5cm
K.21.4cm	L.6.8cm	M.5.0cm	N.3.8cm	O.11.3cm
P.5.8cm	Q.5.2cm	R.4.3cm	S.2.6cm	T.6.1cm

Ｆｉｇ.2　竪穴住居模式図名称一覧（1/160）・小柱穴（杭痕）計測値一覧

第2章　位置と環境

本書で報告する筑後東部地区遺跡群は、筑後市の南東部に位置し、鶴田西田遺跡は、筑後市鶴田字西田、鶴田西畑遺跡は同市鶴田字西畑、鶴田東大坪遺跡は同市鶴田字東大坪、鶴田野田遺跡は同市鶴田字野田に所在する。

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野のほぼ中央に位置し、北は久留米市、東は八女市、南は瀬高町、西は大木町に隣接している。JR鹿児島本線と国道209号線が市の中央を南北に貫き、国道442号線が東西に横断する。また、久留米市から南に12km、大牟田市から北に21kmの距離に位置する。地理的に見ると、北に背振山、東に水縄山地、南に筑肥山地を望み、水縄山地から八女市、広川町を経て南西に延びる八女丘陵が、釈迦ヶ岳より流れ出す矢部川の右岸に広がり、筑後市北東部から有明海に延びる。市内には、一級河川の矢部川や水田の潅漑用水として整備された人工河川の山ノ井川、花宗川が市内を西流する。市内は標高5～40m内におさまり、山地から低位湿地に漸移する地域に位置している。

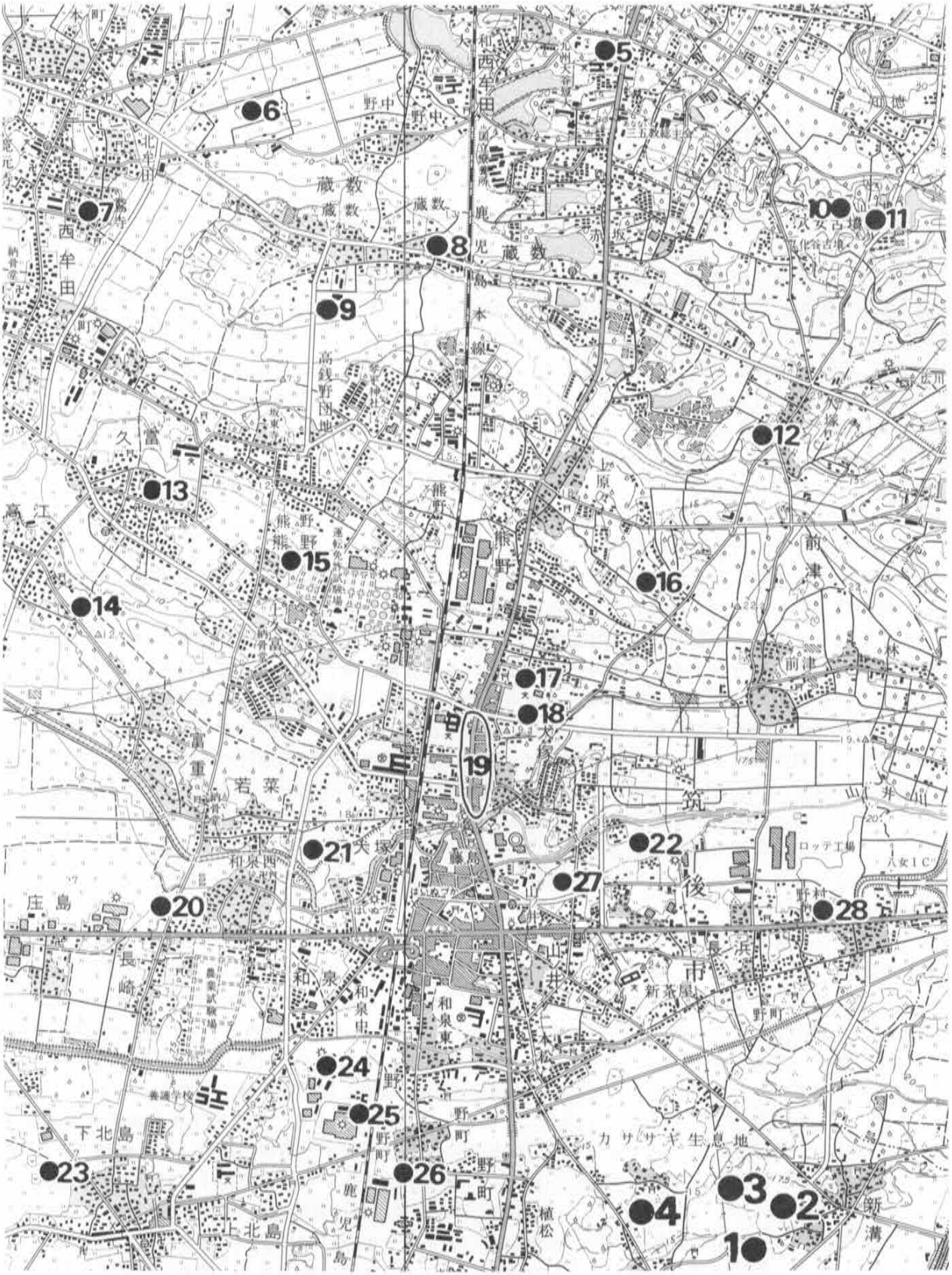
今回報告する筑後東部遺跡群は、筑後市の南東部に位置し標高14～16m程の低位段丘上に立地する。

続いて市内の主な遺跡を時代を追って概観する。

市内から発見された旧石器時代の遺物については、蔵数坂口遺跡から出土した角錐状石器1点が知られている。縄文時代の遺跡は、市内の南東部に集中しており、学史的に有名な早期の押型文土器が多量に出土した裏山遺跡や石組み炉を検出した志前田遺跡等がある。弥生時代の遺跡は、数多くの竪穴住居を検出した蔵数森ノ木遺跡（弥生中期～古墳後期）狐塚遺跡（弥生終末～古墳初頭）、甕棺を検出した蔵数東野屋敷遺跡など市内に分布する。古墳時代になると、八女丘陵一帯に古墳が造営され、広川町と筑後市にまたがる国指定史跡である石人山古墳、八女市の岩戸山古墳、乗場古墳、善蔵塚古墳、鶴見山古墳などの大型前方後円墳が築造される。また、これらの大型古墳とは別に、市指定文化財である欠塚古墳などの中規模の古墳が築造される。集落遺跡では、竪穴住居を検出した田佛遺跡があげられる。奈良時代の遺跡は、500軒以上竪穴住居を検出した若菜森坊遺跡や前津中ノ玉遺跡などがある。鶴田市ノ塚遺跡から古代の官道である西海道が確認された。官道は、市のほぼ中央を縦断する事が推測され、「延喜式」にみえる古代駅家、葛野駅は筑後市前津字車路付近に推定する説がある。近世になると薩摩街道の宿駅として羽犬塚宿が栄えていた。中世では、居館跡とされる長崎坊田遺跡などがあり、近世では、四ヶ所古四ヶ所遺跡が確認されている。

筑後東部地区遺跡群周辺に眼を転じてみると、旧石器時代の遺物に関して、今回報告する鶴田東大坪遺跡1次調査（A区）からナイフ形石器が出土した。筑後市内では2例目の発見となる貴重な資料である。続いて縄文時代になると早期の石組み炉（集石遺構）を検出した久恵中野遺跡や落し穴状遺構を検出した久恵内次郎遺跡などがあげられる。弥生時代になると、平成10年度調査の鶴田牛ヶ池遺跡4次調査で弥生中期頃の甕棺を検出した。また、弥生後期～終末にかけて、竪穴住居を検出した鶴田岸添遺跡や、平成10年度調査の鶴田西牛ヶ池調査からも数多くの竪穴住居並び掘立柱建物を検出した。その多くの竪穴住居で、ベット状遺構（屋内高床部）を確認している。古墳時代になると、竪穴住居を新溝丸田遺跡、久恵中野遺跡などで確認している。奈良、平安時代になると、該当する遺構、遺物は多く確認されていない。中世になると、遺物、遺構も増加傾向にあり、鶴田楢原遺跡から13世紀後半～14世紀前後頃を主体とした遺構が検出されている。近世では、新溝犬丸遺跡や鶴田溝代遺跡などで溝が確認されている。

また、昭和28年の水害時における矢部川復旧のための土取りの際に、多量の土器が出土したと聞いている。筑後東部地区遺跡群は、市内でも有数な遺跡が点在する重要場所であり、継続した調査が望まれる。



1.鶴田西田遺跡	2.鶴田西畑遺跡	3.鶴田東大坪遺跡1次調査	4.鶴田野田遺跡
5.瑞王寺古墳	6.田佛遺跡	7.鷲寺遺跡	8.蔵数東野屋敷遺跡
9.蔵数森ノ木遺跡	10.石人山古墳	11.弘化谷古墳	12.欠塚古墳
13.久富鳥居遺跡	14.高江遺跡	15.久富大門口遺跡	16.前津中ノ玉遺跡
17.羽犬塚中道遺跡	18.羽犬塚射場ノ本遺跡	19.羽犬塚町囲	20.長崎坊田遺跡
21.若菜森坊遺跡	22.徳久中牟田遺跡	23.榎崎遺跡	24.井原口遺跡
25.狐塚遺跡	26.平塚遺跡	27.山ノ井川口遺跡	28.長浜鐙遺跡

Ｆｉｇ.3 筑後市周辺遺跡分布図（1/25.000）

第3章.調査成果

第1節　鶴田西田遺跡

1.はじめに

鶴田西田遺跡は、筑後市大字鶴田字西田1275-1外に所在し、標高約14m程の低地に位置する。試掘結果を基に支線用排水路予定地の約40m²を調査対象とした。検出した遺構は、溝3条を確認した。しかし、出土遺物が皆無なため時期は不明である。調査は、柴田が担当した。調査期間は平成8年7月8日～同年7月12日の間で実施した。以下、検出遺構についてのみ説明する。

Ｆｉｇ.4 鶴田西田遺跡調査地点位置図（1/2.500）

2.検出遺構について

1ＳＤ10（Ｆｉｇ.5）

検出長3.60m、深さ0.10～0.16mを測るが、東肩は調査区と重なるため幅は不明。埋土は、灰色粘土の単一層である。溝の底面は、北と南ではやや深く、中央付近になるとやや浅くなる。

1ＳＤ20（Ｆｉｇ.5）

検出長3.90m、幅0.37～0.51m、深さ0.06～0.12mを測る。埋土は、明灰色粘土の単一層である。溝の底面は、北は深く、中央から南にかけてやや浅くなる。

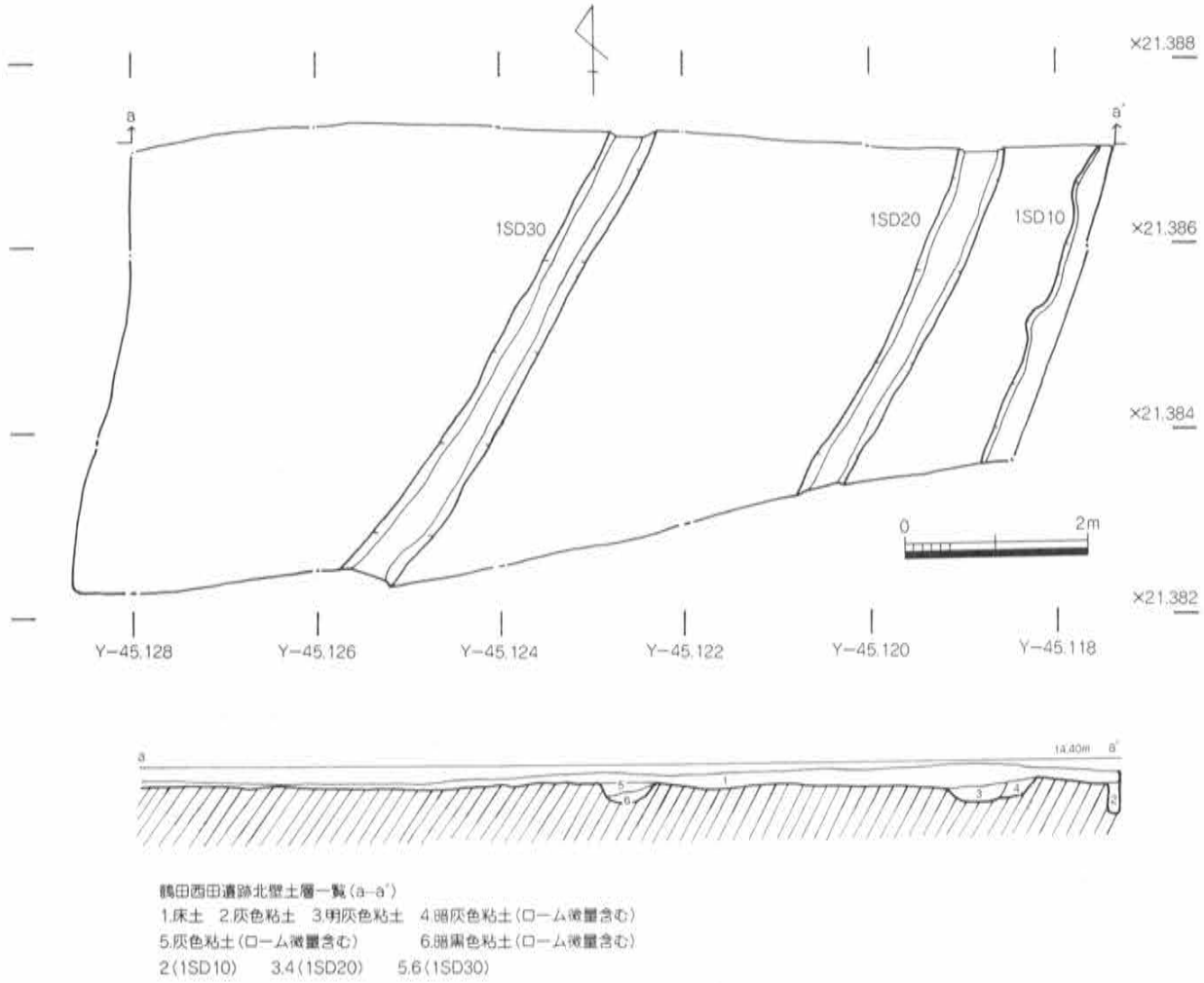
1ＳＤ30（Ｆｉｇ.5）

検出長5.40m、幅0.44～0.68m、深さ0.10～0.30mを測る。埋土は、灰色粘土、暗黒色粘土の2層に分かれる。溝の底面は、北側は浅く、南側は深くなる。

3.小結

調査区は、周囲より一段下がる所に位置し、後世の掘削を受けていると思われる。
また、調査面積の制約から限定された範囲の調査のため、溝の性格は不明である。溝の時期についても、出土遺物が皆無であり、不明である。そのため、周辺の調査の埋土状況から判断すると、1ＳＤ10・1ＳＤ20は中世、1ＳＤ30は弥生ではないかと考えられる。

今後、周辺の調査状況と比較し、再度検討が必要であろう。

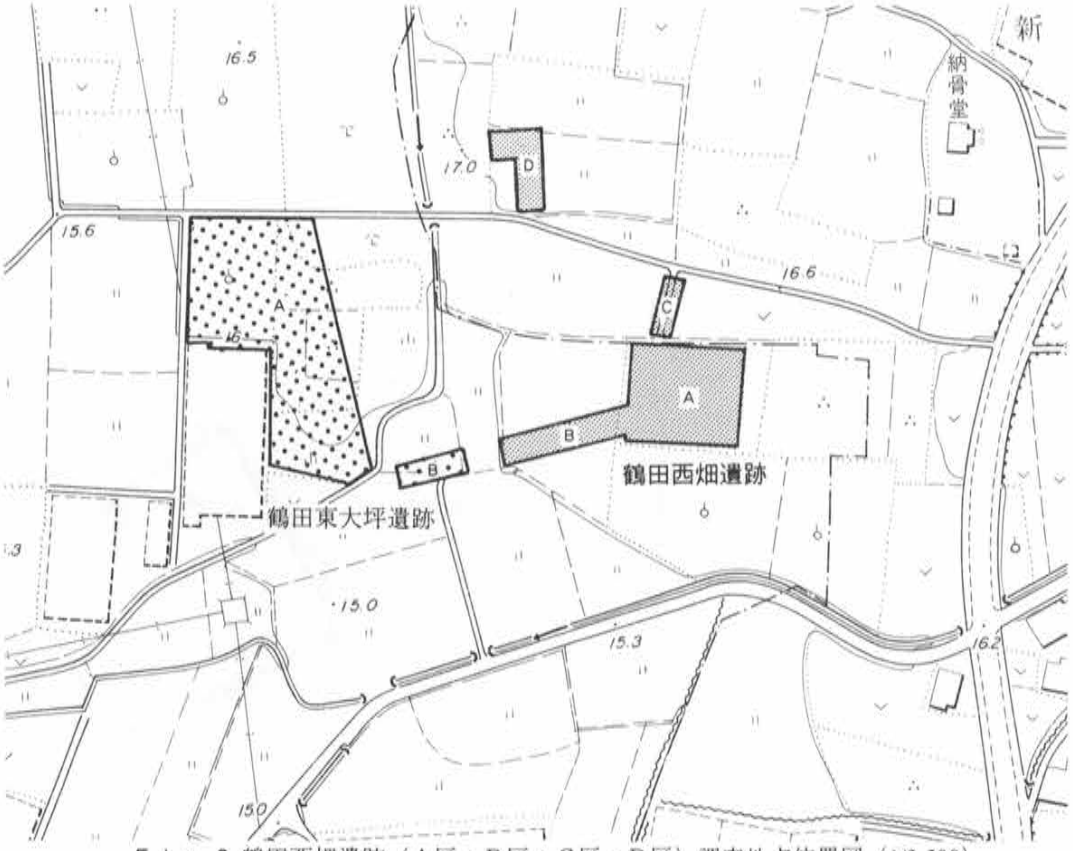


Ｆｉｇ.5 鶴田西田遺跡遺構全体図・北壁土層断面実測図（1/80）

第2節　鶴田西畑遺跡（A区・B区・C区・D区）

1.はじめに

鶴田西畑遺跡は、筑後市大字鶴田字西畑1256外に所在し、標高約15m程の低位段丘に位置する。試掘結果を基に面の削平及び支線用排水路予定地の約2200m²を調査対象とした。検出した遺構は、竪穴住居2軒、溝3条、Ｐｉｔを検出した。しかし、ブドウ畑、茶畑、竹林などの際の耕作の撹乱のため多くの遺構が破壊もしくは損傷されていた。また、調査区が離れていたためA区、B区、C区、D区として調査を行った。A区は途中から柴田が担当し、B区、C区、D区、についても柴田が担当した。調査期間は平成8年9月10日～同年12月6日の間で実施した。以下、検出遺構および出土遺物について説明する。



Ｆｉｇ.6 鶴田西畑遺跡（A区・B区・C区・D区）調査地点位置図（1/2.500）

2.検出遺構について

（A区）

1ＳＤ01（Ｆｉｇ.7）

調査区の南から中央に延び、1ＳＤ05に切られる。検出長約12.0m、幅0.10～0.50m、深さ0.09～0.14mを測り、溝の底面は、ほぼ平らである。出土遺物については破片のため図化出来なかったが、古墳時代の所産であろう。

Ｆｉｇ.7 （A区）1ＳＤ01・1ＳＤ05 土層断面実測図（1/40）

1ＳＤ05（Ｆｉｇ.7・9）

調査区の南から東斜めに延びる溝で1ＳＤ01を切り1ＳＤ15に切られる。検出長約24.0m、幅0.10～0.30m、深さ0.11～0.22mを測り、溝の底面はほぼ平らである。出土遺物については破片のため図化出来なかったが、古墳時代の所産であろう。

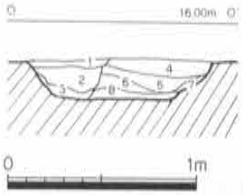
Ｆｉｇ.8 鶴田西畑遺跡（Ａ区）遺構全体図（1/200）

1ＳＩ10（Ｆｉｇ.11・12）

調査区北に位置し、竪穴住居が切り合っていることが調査区を拡張した結果判かった。竪穴住居の内部構造を見ると、4本柱の柱穴で、柱間は東西3.05～3.30m、南北3.05～3.25m、深さ0.50～0.71m、底径0.14～0.15mを測る。また、屋内土壙、間仕切り溝、周溝（周壁溝）や小穴（杭痕跡）と思われるＰｉｔ、部分的ではあるが硬化面、出入り口と推定出来る硬化面、ほぼ中央付近から炉跡と思われる遺構などを検出した。また、埋土中から若干の焼土と炭化物が検出された。遺物は、土師器の甕、高坏、小型丸底壺、台付き鉢、鉢、支脚、手づくね土器（ミニチュア土器）、模造鏡、土製人形、不明土製品等で、石製品は、蛇紋岩製の勾玉や、砥石、鉄製品は、方形鋤先が出土した。時期は、5世紀初頭～5世紀前半頃と考える。詳細は後項で記す。

1ＳＤ15（Ｆｉｇ.9）

調査区のほぼ中央を横断し、西から東にやや蛇行するが直線状に延びる溝で1ＳＤ05を切る。検出長約47.0m、幅0.10～0.40m、深さ0.14～0.27mを測り、溝の底面は、ほぼ平らである。出土遺物については破片のため図化出来なかったが、古墳時代の所産であろう。



1SD05 1SD15土層一覧(o-o')
1.暗黒色土(ローム微量含む)　2.暗灰色土(ローム微量含む)
3.暗灰色土(ローム斑状に多量含む)　4.灰黒色土
5.淡茶灰色土(ローム微量含む)　6.灰色土(ローム微量含む)
7.黄灰色土(ローム多量含む)　8.明灰色土(ローム粒少量含む)
1~3(1SD05)　4~8(1SD15)

Ｆｉｇ.9（Ａ区）1ＳＤ05・1ＳＤ15 土層断面実測図（1/40）

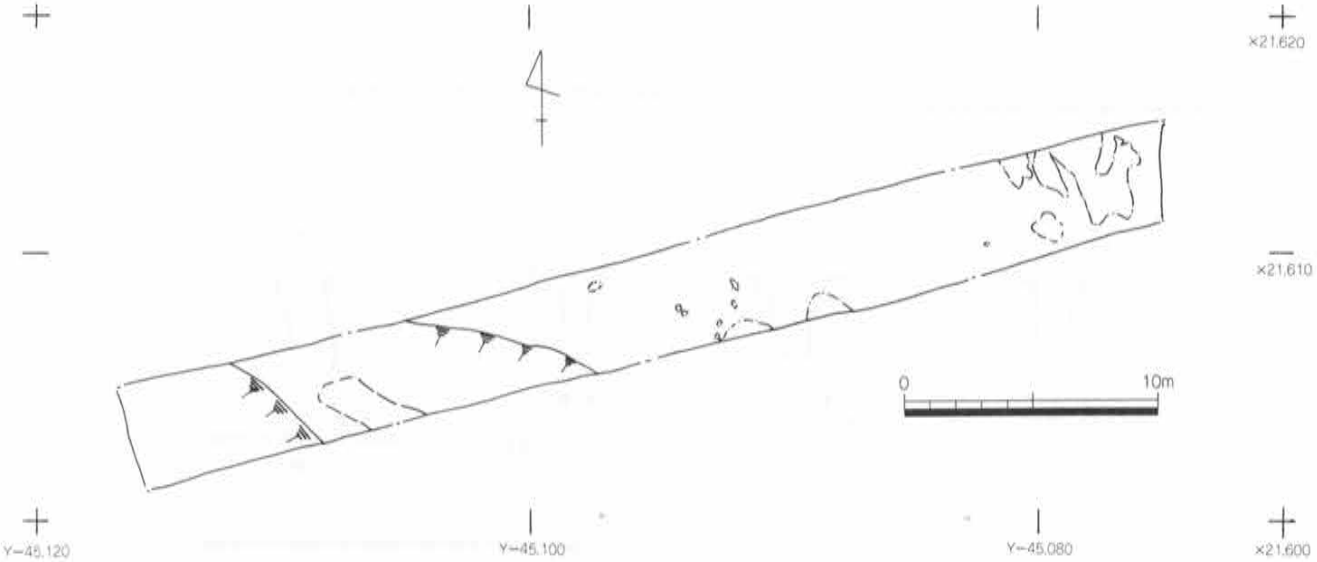
1ＳＩ20（Ｆｉｇ.8）

1ＳＩ10に切られ竪穴住居である。住居形態は長方形プランで、ベッドを付設する。復原ではあるが、長軸（東西壁）3.75～4.10m、短軸（南北壁）2.21～2.65m、壁高0.13～0.24mを測る。屋内土壙、周溝（周壁溝）を検出したが、柱穴は検出出来なかった。詳細は後項で記す。

その他、撹乱から遺物が出土したため番号をつけて取り上げた。
1ＳＸ02は撹乱である。出土遺物については破片のため図化出来なかったが、古墳時代の所産であろう。

（Ｂ区）（Ｆｉｇ.10）

調査区内から検出した遺構は、現代の撹乱である。出土遺物は皆無である。



（Ｂ区）の調査区内は全て撹乱である。

Ｆｉｇ.10 鶴田西畑遺跡（Ｂ区）遺構全体図（1/300）

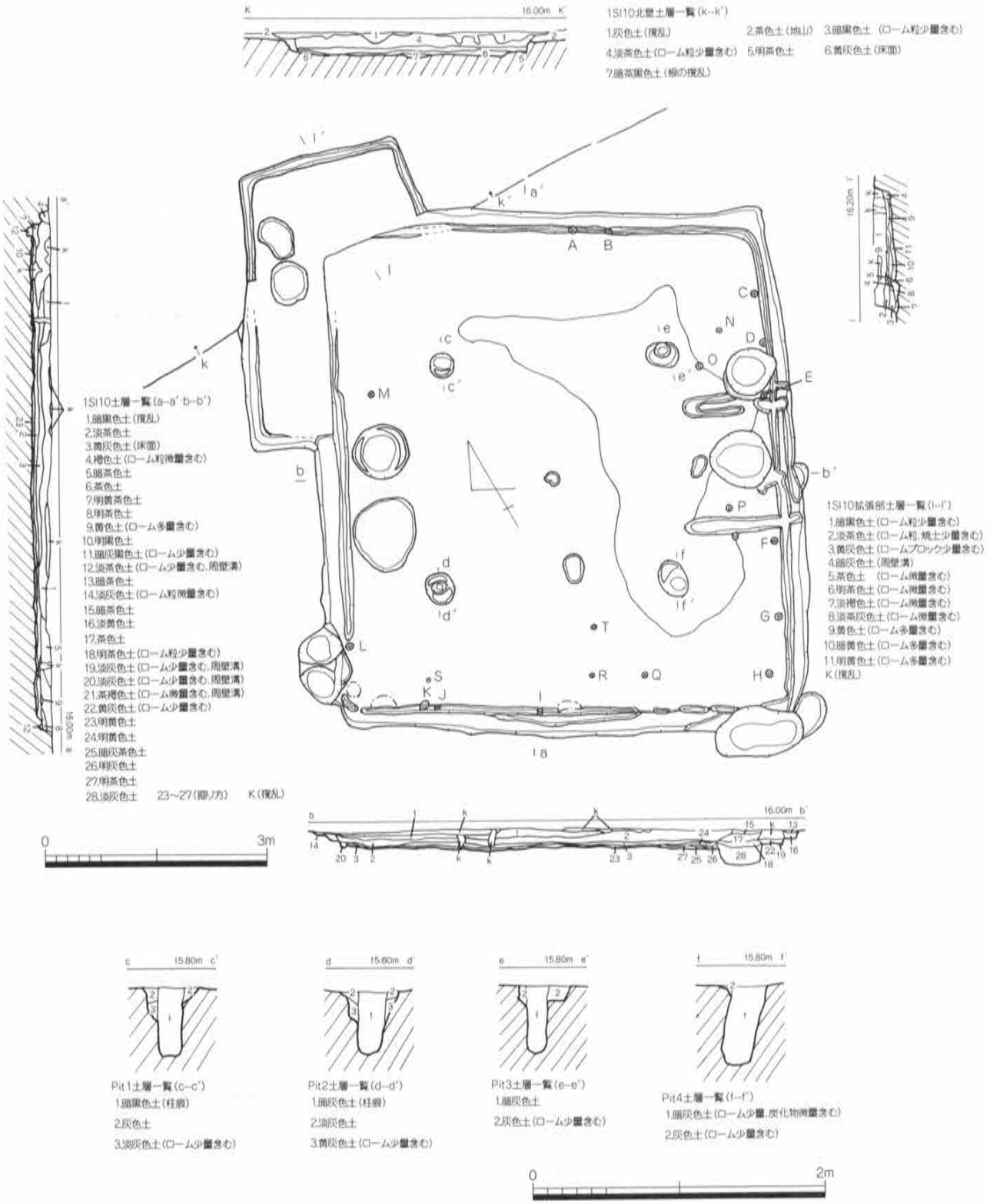
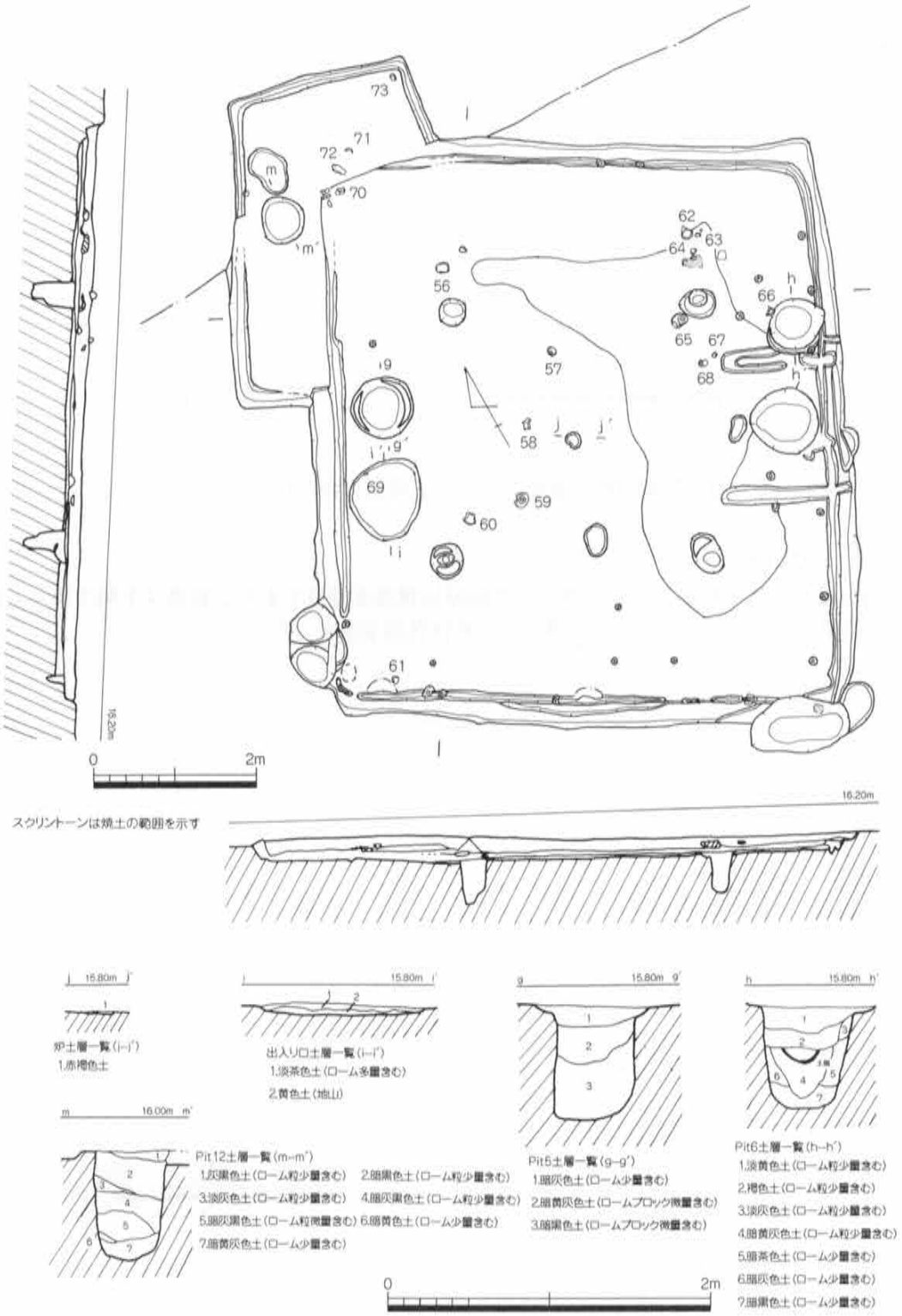


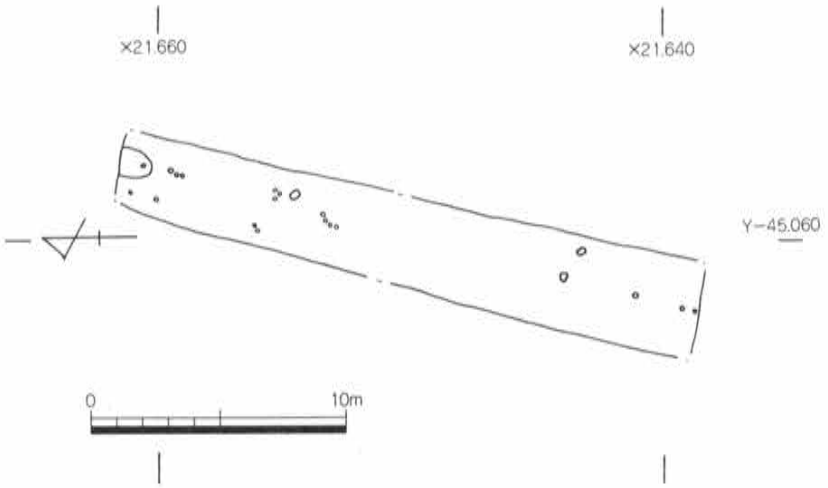
Fig.11 (A区) ISI10・ISI20遺構実測図 (1/80) ・土層断面実測図 (1/80), Pit1・Pit2・Pit3・Pit4土層断面実測図 (1/40)



Ｆｉｇ.12 （A区）ＩＳＩ10・ＩＳＩ20遺物出土状況実測図（1/80）・炉・出入り口・Ｐｉｔ5・Ｐｉｔ6・Ｐｉｔ12土層断面実測図（1/40）

（C区）（Ｆｉｇ.13）

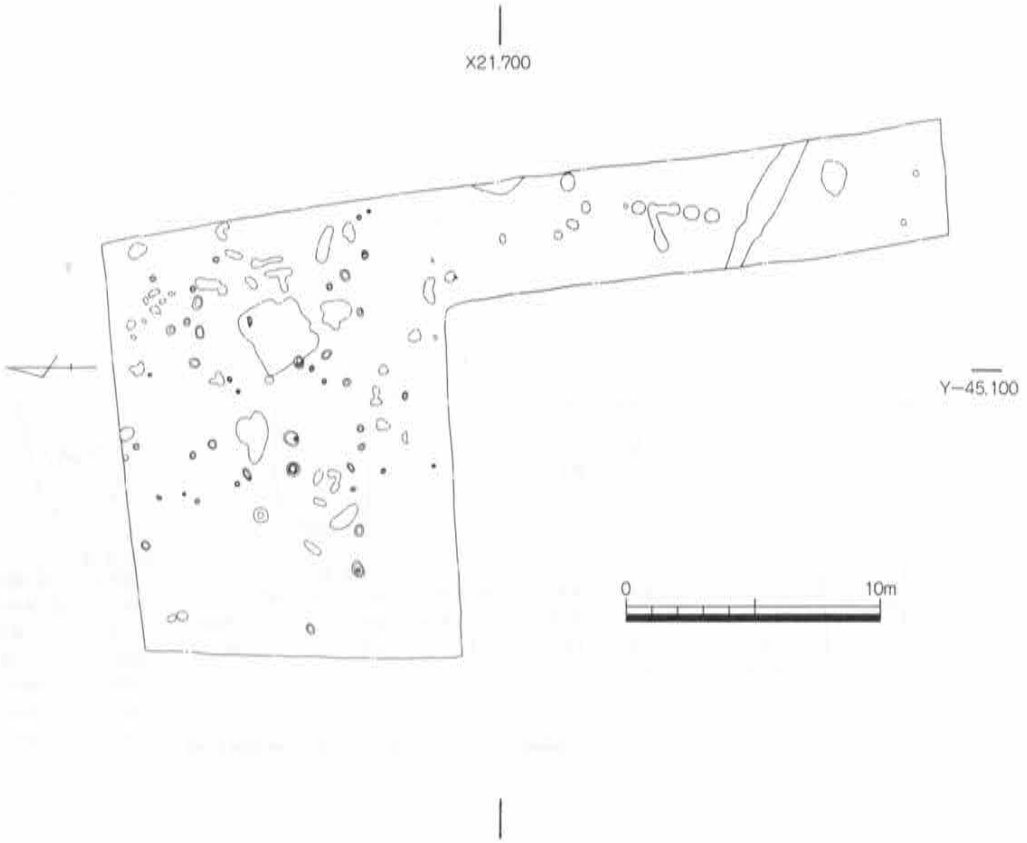
調査区内から検出した遺構は撹乱である。出土遺物は皆無である。



Ｆｉｇ.13 鶴田西畑遺跡（C区）遺構全体図（1/300）

（D区）（Ｆｉｇ.14）

調査区内からＰｉｔを検出した。しかし、大部分は撹乱を受けており、性格は不明である。出土遺物については古墳時代の遺物を認めたが、破片のため図化出来なかった。



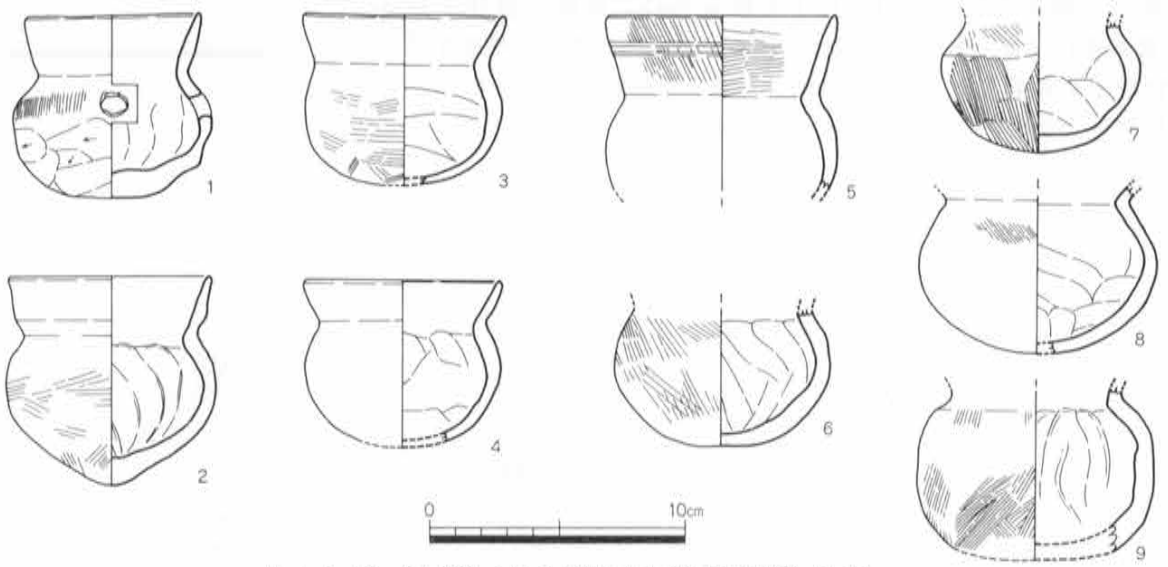
Ｆｉｇ.14 鶴田西畑遺跡（D区）遺構全体図（1/300）

3.（A区）出土遺物について（Ｆｉｇ.15～25）

1ＳＩ10（1～55）全て覆土中から出土した。

土師器

小型丸底壺（1～9）1.復原口径7.0cm、器高7.3cmを測る。口縁部は、やや外反し端部は丸く、横ナデ、体部外面は、刷毛目、手持ちのヘラ削り、体部内面は、強い指頭ナデ調整である。体部内外面は、橙色を呈し、金雲母を微量含む。焼成は良好である。また、体部外面に黒斑、胴部は焼成前に体部外面から円孔を打つ。瓲を模倣したものであろう。2.復原口径8.0cm、器高8.3cmを測る。口縁部は、やや外反し端部は丸く、横ナデ、体部外面は、刷毛目後ナデ、体部内面は、指頭ナデ調整である。底部は尖り気味である。体部内外面は、暗黒色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。焼成は良好である。
1ＳＩ10・2層と接合する。3.口径8.0cm、器高6.8cmを測る。口縁部は、外反し端部は丸く、横ナデ、体部外面は、刷毛目後、横ナデ、体部内面は、ナデ調整である。体部内外面は、淡橙色を呈し、白色粒子を微量含む。焼成は良好である。また、胴部から底部にかけて2次焼成が観察出来る。小動物によるものと思われるキズも観察出来る。4.復原口径7.8cmを測る。口縁部は、外反し端部は丸く、横ナデ、体部外面は、ナデ、体部内面は、ナデ調整である。体部内外面は、橙色を呈し、白色粒子を微量含む。焼成は良好である。5.復原口径9.2cmを測る。口縁部は、やや外反し端部は丸く、体部外面は、刷毛目、ナデ、体部内面は、刷毛目とナデ調整である。体部内外面は、橙色を呈し、金・黒雲母を微量含む。焼成はやや良好である。また、内外面に2次焼成が観察出来る。6.体部外面は、刷毛目、体部内面は、ナデ調整である。体部内外面は、淡橙茶色を呈し、金・黒雲母、白色粒子を少量含む。焼成は良好である。2次焼成も観察出来る。7.体部外面は、刷毛目、体部内面は、指頭ナデ調整である。体部内外面は、暗橙色を呈し、黒・金雲母を微量含む。焼成は良好である。体部外面に2次焼成が観察出来る。8.体部外面は、磨滅のため調整がはっきりしないが、刷毛目、体部内面は、指頭ナデ調整である。体部内外面は、乳橙色を呈し、白色粒子を微量含む。焼成は良好である。体部外面に2次調整が観察出来る。9.体部外面は、横ナデ、刷毛目、体部内面は、指頭ナデ調整である。体部内外面は、淡橙色を呈し、白色粒子を微量含む。焼成は良好である。体部外面に2次焼成が観察出来る。



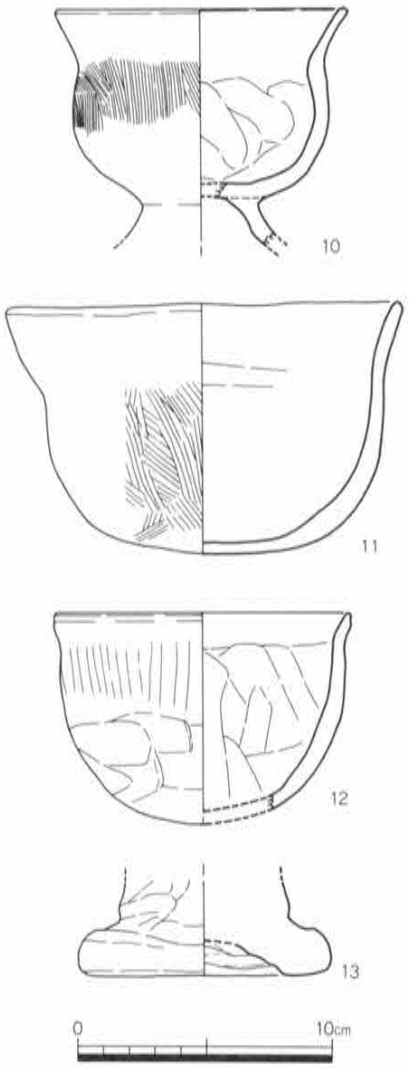
Ｆｉｇ.15（A区）1ＳＩ10出土土器実測図①（1/3）

台付鉢（10）復原口径11.6cmを測る。口縁部は、外反し横ナデ、体部外面は、刷毛目とナデ、体部内面は、ナデ調整である。台付き部分は、横ナデ調整である。体部内外面は、淡乳茶色を呈し、胎土は精製されている。また、体部内外面に化粧土が施される。少動物によるものと思われるキズも観察出来る。焼成は良好である。

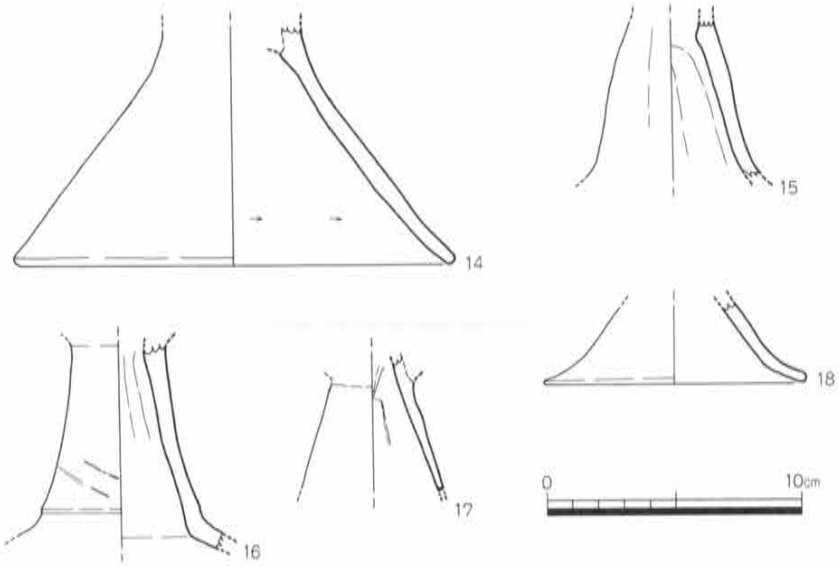
鉢（11.12）11.口径15.7cm、器高9.8～10.0cmを測る。口縁部は、外反気味に立ち上がり、体部外面は、横ナデ、刷毛目、ナデ、体部内面は、削り後ナデ調整である。体部内外面は、乳橙色を呈し、白色粒子を微量含む。また、体部内面に化粧土が施される。焼成は良好である。1ＳＩ10北3層と接合する。12.復原口径11.8cmを測る。口縁部は、外反しながら端部で立ち上がり、横ナデ、刷毛目、ナデ、体部内面は、一部刷毛目で他はナデ調整である。体部外面には、一部黒斑が観察出来る。体部内外面は、淡茶乳色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

支脚（13）体部外面は、指ナデや粗いナデ調整で、藁状圧痕が残る。体部内外面は、乳橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

高坏脚部（14～18）14.脚部径17.4cm、残存器高9.4cmを測る。脚部内外面は、淡橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。脚部は、スカート状に開き、脚部外面は、磨滅しているため調整は不明である。脚部内面は、横方向の削り調整と一部黒斑が観察出来る。焼成は良好である。15.脚部内外面は、磨滅しているがナデ調整と思われる。内外面は、橙色を呈し、白色粒子を微量含む。また、脚部外面に2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。1ＳＩ10北3層と1ＳＩ10北拡張部東3層と接合する。16.脚部外面は、横方向の削り、裾部は、横ナデ調整である。脚部はやや強く屈曲する。脚部内外面は、淡橙色を呈し、白色粒子を少量含む。また、脚部外面の一部に黒斑が観察出来る。焼成は良好である。17.脚部外面は、ナデ、脚部内面は、横方向の削り調整である。また、坏部と脚部との接合部は、剥離している。脚部内外面は、橙色を呈し、白色粒子を微量含む。焼成は良好である。18.脚部径10.4cm、残存器高3.2cmを測る。脚部内外面は、橙色を呈し、白色粒子を微量含む。脚部内外面は、横ナデ調整である。また、内外面に化粧土が施されている。焼成は良好である。



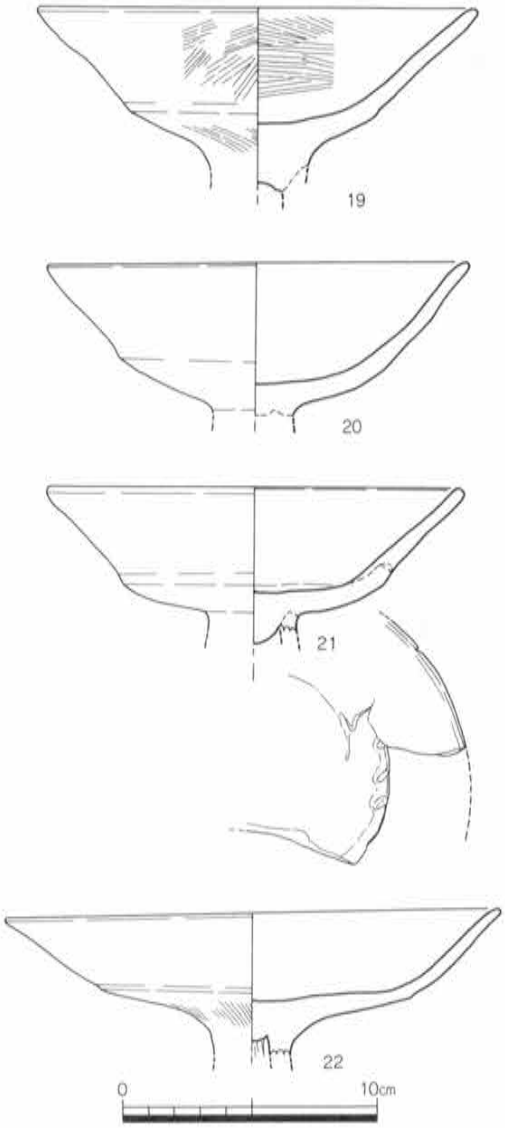
Ｆｉｇ.16（A区）1ＳＩ10出土土器実測図②（1/3）



Ｆｉｇ.17（A区）1ＳＩ10出土土器実測図③（1/3）

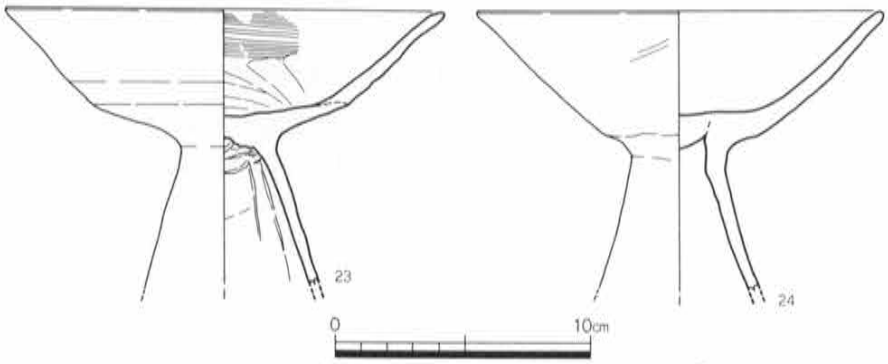
高坏坏部（19～22）19.復原口径17.4cmを測る。口縁部は、直線的に外反し、横ナデ、刷毛目、坏部外面は、粗い刷毛目、横ナデ、坏部内面は、粗い刷毛目、ナデ調整である。坏部内面は、茶色、坏部外面は、淡茶橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。焼成は良好である。脚部との接合部分を中心に2次焼成が観察出来る。また、少動物によるものと思われるキズも観察出来る。20.復原口径16.7cmを測る。口縁部は、外反し横ナデ調整である。体部内面は、磨滅が著しいため調整不明である。坏部内外面は、橙色を呈し、金雲母、白色粒子を多量含む。焼成は良好である。また、坏部の内外面に化粧土が施されている。21.復原口径16.3cmを測る。口縁部は、直線的に外反し端部は丸く仕上げる。坏部内外面は、橙色を呈し、白色粒子を微量含む。坏部内面は、横ナデ、ナデ、坏部外面は、横ナデ調整である。また、坏底部の擬口縁に刻みをいれ、坏部の内外面には、化粧土が施されている。焼成は良好である。少動物によるものと思われるキズも観察出来る。

22.口径19.6cmを測る。口縁部は、外反し横ナデ、坏部には段が付く。坏部内外面は、明橙色を呈し、金雲母、白色粒子を少量含む。坏部内面は、横ナデ、ナデ、坏部外面は、刷毛目調整である。また、坏部外面に2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。



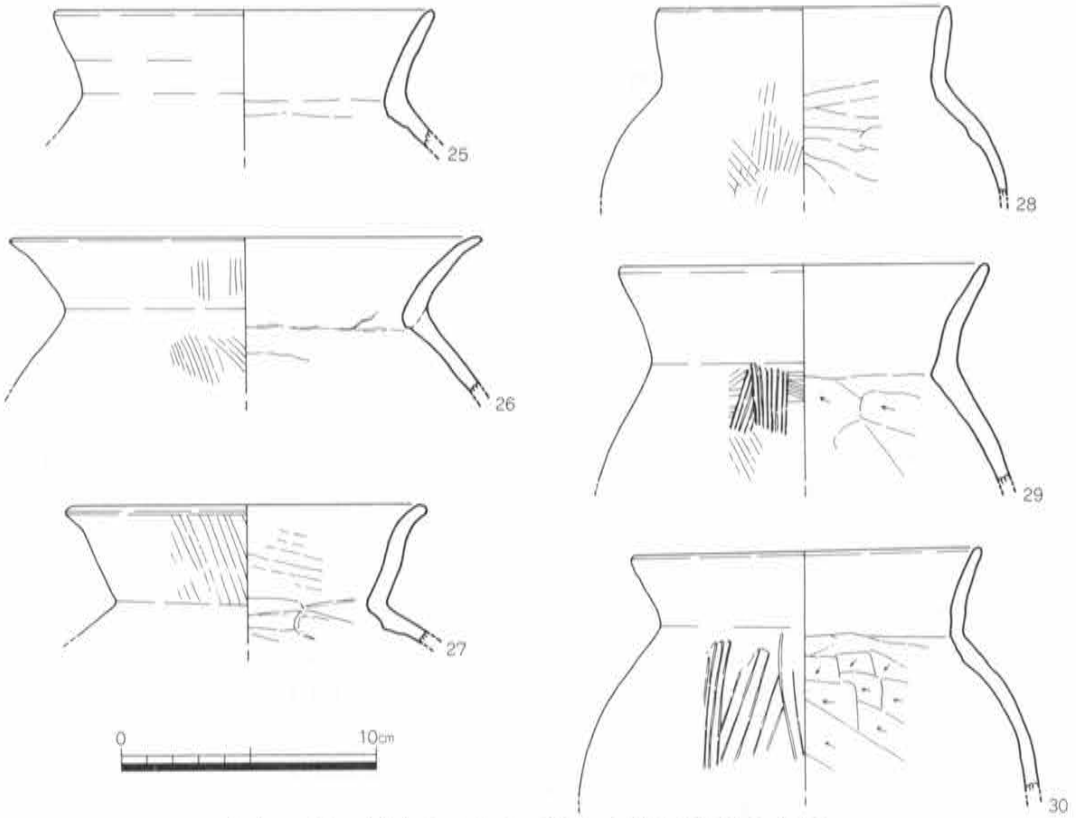
Ｆｉｇ.18（A区）1ＳＩ10出土土器実測図④（1/3）

高坏（23.24）23.口径17.3cmを測る。口縁部は、外反し横ナデ調整である。坏部内面は、刷毛目、ナデ、坏部と脚部の接合部分はナデ、脚部外面ナデ、脚部内面は、削り調整である。また、坏部と脚部の接合部を棒状の工具でつついた跡が確認出来る。全体の色調は、淡橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。坏部内外面に化粧土が施されており、坏部外面の一部に黒斑も観察出来る。焼成は良好である。少動物によるものと思われるキズも観察出来る。1ＳＩ10北2層、1ＳＩ10北3層、1ＳＩ10Ｐｉｔ6と接合する。24.口径16.1cmを測る。磨滅が著しいため調整不明な部分もあるが、坏部と脚部の接合部分は、ナデ、坏部内面は、ナデ、脚部内面は、ヘラ削り調整である。全体の色調は、橙色を呈し、黒雲母、白色粒子を多量含む。坏部内外面、脚部外面にかけて2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。1ＳＩ10南1層と接合する。



Ｆｉｇ.19（A区）1ＳＩ10出土土器実測図⑤（1/3）

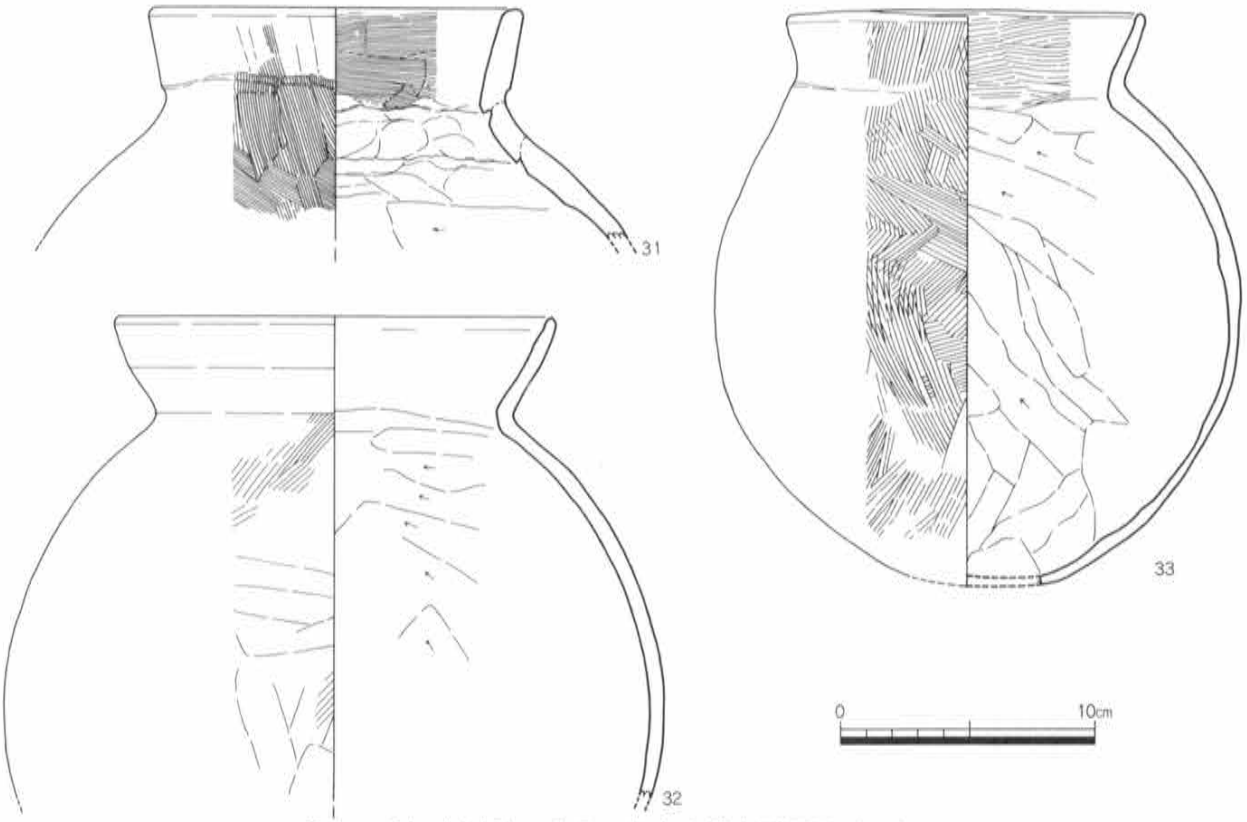
甕（25～38）25.復原口径15.0cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、黒雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、くの字状に外反し、横ナデ、体部外面は、横ナデ、体部内面は、削り調整である。外面に化粧土が施されている。焼成はやや良好である。26.復原口径11.5cmを測る。体部内外面は、明橙色を呈し、白色粒子を微量含む。口縁部は、直線的に立ち上がる。体部外面は、横ナデ、刷毛目、体部内面は、削り、横ナデ調整である。また、内外面に2次焼成も観察出来る。焼成は良好である。27.復原口径14.2cmを測る。体部内外面は、淡乳茶色を呈し、黒雲母、白色粒子を多量含む。口縁部は、やや外反し端部で更に外反する。体部外面は、横ナデ、刷毛目、体部内面は、刷毛目、削り調整である。28.復原口径14.6cmを測る。口縁部は、やや外反気味に立ち上がり、横ナデ調整である。体部内外面は、淡茶色を呈し、黒・金雲母を多量含む。体部外面は、刷毛目、体部内面は、削り調整である。また、体部外面の口縁部にかけて、煤が付着し、胴部に黒斑が観察出来る。焼成は良好である。29.復原口径18.6cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、白色粒子を多量含む。口縁部は、やや強く外反する。体部外面は、刷毛目、体部内面は、削り調整である。体部外面に2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。体部外面の一部に煤が付着し、胴部には黒斑が観察出来る。焼成は良好である。30.復原口径13.9cmを測る。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、横ナデ調整である。体部内外面は、淡橙黒色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を多量含む。体部外面は、粗い刷毛目、横ナデ、体部内面はナデ、削り調整である。体部内外面に化粧土が施され、体部外面には、黒斑が観察出来る。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.20（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑥（1/3）

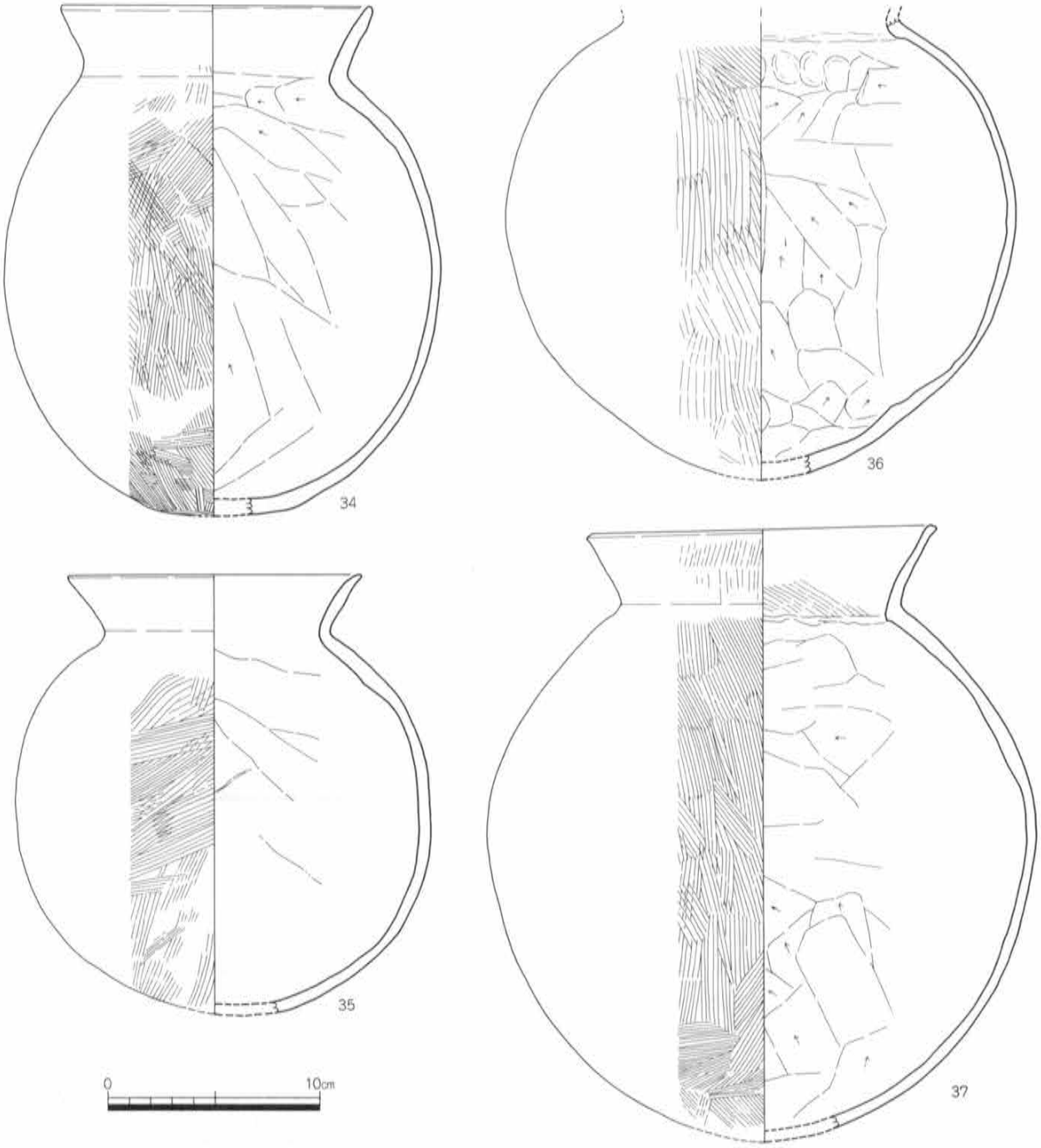
31.復原口径14.8cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を多量含む。口縁部は、直立気味に立ち上がり、横ナデ調整である。体部外面は、刷毛目、体部内面は、刷毛目、ナデ、削り調整である。体部内面は、粘土接合痕が観察出来る。また、体部内外面の一部に化粧土が施される。焼成は良好である。ここでは甕と報告するが、壺としても良いかもしれない。32.復原口径17.4cmを測る。体部内外面は、橙乳色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し端部はやや内湾気味に立ち上がり、横ナデ調整である。体部外面は、刷毛目、ヘラ削り、体部内面もヘラ削り調整である。焼成は良好である。

33.復原口径14.2cmを測る。体部内外面は、淡黒色を呈す。口縁部は、直立気味に立ち上がり、刷毛目調整である。体部外面は、不定方向の刷毛目、体部内面は、口縁部から胴部にかけて刷毛目、胴部から底部にかけて、不定方向のナデ、削り調整である。また、全体に厚く煤が付着する。焼成は良好である。1ＳＩ10・2層、1ＳＩ10・4層、1ＳＩ10Ｐｉｔ6と接合する。



Ｆｉｇ.21 （Ａ区）1ＳＩ10出土土器実測図⑦（1/3）

34.復原口径14.8cmを測る。体部外面は、淡乳橙色～暗黒色、体部内面は、淡黒色を呈し、黒雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、外反し横ナデ調整である。体部外面は、不定方向の刷毛目、体部内面は、ヘラ削り調整である。また、口縁部から胴部にかけて黒斑、胴部は厚く煤が付着する。焼成は良好である。35.復原口径14.0cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を多量含む。口縁部は外反し、横ナデ調整である。体部外面は、不定方向の刷毛目、体部内面は、ヘラ削り調整である。また、口縁部と胴部の一部に煤が付着し、体部外面に2次焼成が観察出来る。焼成はやや良好である。
36.口径16.6cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を多量含む。口縁部は外反し、横ナデ調整である。体部外面は、縦刷毛、体部内面は、ヘラ削りにより薄く仕上げられる。また、胴部に黒斑、口縁部内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。37.復原口径14.4cmを測る。体部内外面は、淡乳白色～暗黒色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、垂直気味に立ち上がり、横ナデ調整である。体部外面は、縦刷毛目後、不定方向の刷毛目、体部内面は、ヘラ削り、指頭痕調整である。また、胴部を中心に黒斑が観察出来、一部化粧土が施され、煤は胴部下半に付着している。焼成は良好である。38.体部内外面は、淡茶乳色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を多量含む。体部外面は、縦刷毛目、一部横刷毛目、体部内面は、ヘラ削り、一部指押さえによるナデ調整である。また、体部外面全体に煤が付着する。焼成は良好である。1ＳＩ10北拡張部西3層と接合する。



Ｆｉｇ.22 （Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑧（1/3）

土製品

手づくね土器（39～52）39.口径4.5cm、器高3.3～3.7cmを測り、底部は、やや尖る。内面は、明橙色、外面は、明橙色～淡茶灰色を呈し、胎土は精選されている。内外面は、指頭ナデである。焼成は良好である。椀の模倣であろう。40.器高3.3～3.5cm、上端部3.6cm、下端部4.0cmを測る。体部外面は、暗灰色を呈し、胎土は精選されている。また、丁寧な作りで、焼成は良好である。器台の模倣であろう。41.現存器高3.0cmを測る。体部外面は、橙色を呈し、胎土は精選されている。また、ナデ調整であるが、粗い作りである。焼成は良好である。器台の模倣であろう。42.現存器高2.2cmを測る。体部外面は、乳橙色を呈し、胎土は精選されている。また、ナデ調整であるが、粗い作りである。焼成は良好である。器台の模倣であろう。43.現存器高1.7cmを測る。体部外面は、乳橙色を呈し、胎土は精選されている。また、ナデ調整で丁寧に作られている。焼成は良好である。器台の模倣であろう。

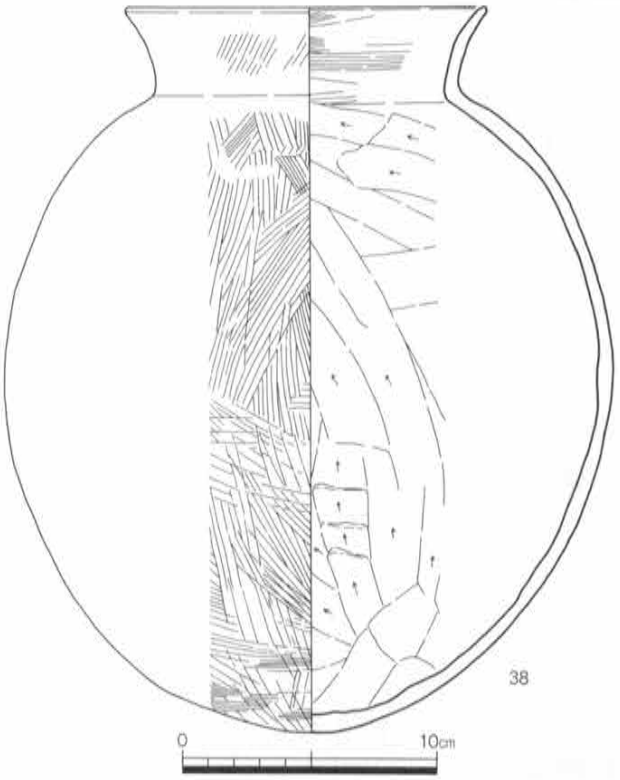
鶴田西畑遺跡（A区）1SI10出土石器・勾玉

鶴田西畑遺跡（A区）1SI10出土鉄器・方形鋤先

鶴田東大坪遺跡1次調査（A区）1SK30出土石器・ナイフ形石器

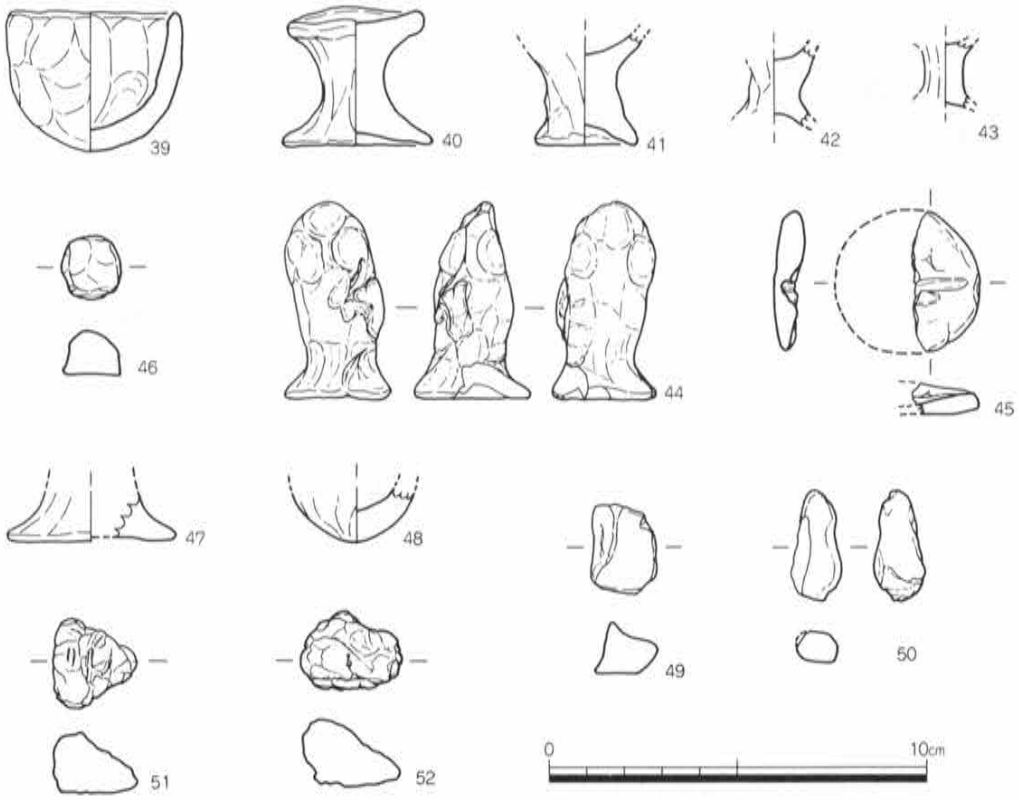
鶴田西畑遺跡（A区）1SI10出土遺物・土製人形（表）

鶴田西畑遺跡（A区）1SI10出土遺物・土製人形（裏）



Ｆｉｇ.23（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑨（1/3）

44.器高5.15cmを測る。体部外面は、乳橙色を呈し、胎土は、精選されているが、白色粒子を多量含む。明瞭に目、口、鼻に当たる部分は表現されていないが、指押さえにより鼻らしく表現されている様に作られている。また、手に当たる部分も表現されている様に作られているが、脚部（足）は表現されていない。胴下部から裾広がりな作りで、安定した作りであるためこの部分を脚部（足）に当たると思われる。焼成は良好である。ここでは、土製人形として報告する。45.体部内外面は、淡灰色を呈し、胎土は精選されている。紐に当たる部分はないが、棒状工具によると思われる穿孔が中心部に見られる。模造鏡であろう。46.器高1.1cmを測る。体部外面は、橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。また、丁寧に作られている。不明土製品とするが、祭祀関連に伴う遺物であるため、お供え物である可能性も指摘出来る遺物である。47.現存器高1.3cmを測る。体部外面は、淡灰橙色を呈し、胎土は精製されている。ナデ調整で丁寧に作られている。焼成は良好である。器台の模倣であろう。48.現存器高1.2cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、胎土は精選されている。また、ナデ調整で丁寧に作られる。焼成は良好である。椀の模倣であろう。49.体部外面は、橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。また、丁寧に作られている。不明土製品であるが、お供え物である可能性も指摘出来る遺物である。50.体部外面は、淡灰色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。不明土製品であるが、土器作りの削りかすの様でもあるし、柄杓を模倣した様な遺物である。



Ｆｉｇ.24（Ａ区）１ＳＩ10出土土器実測図⑩（1/2）

51.体部外面は、橙乳色を呈し、白色粒子を少量含む。また、藁状圧痕が表面に残っており、焼成は良好である。不明土製品。52.体部外面は、淡乳橙色を呈し、胎土は精選されている。また、藁状圧痕が表面に残っており、焼成は良好である。不明土製品。

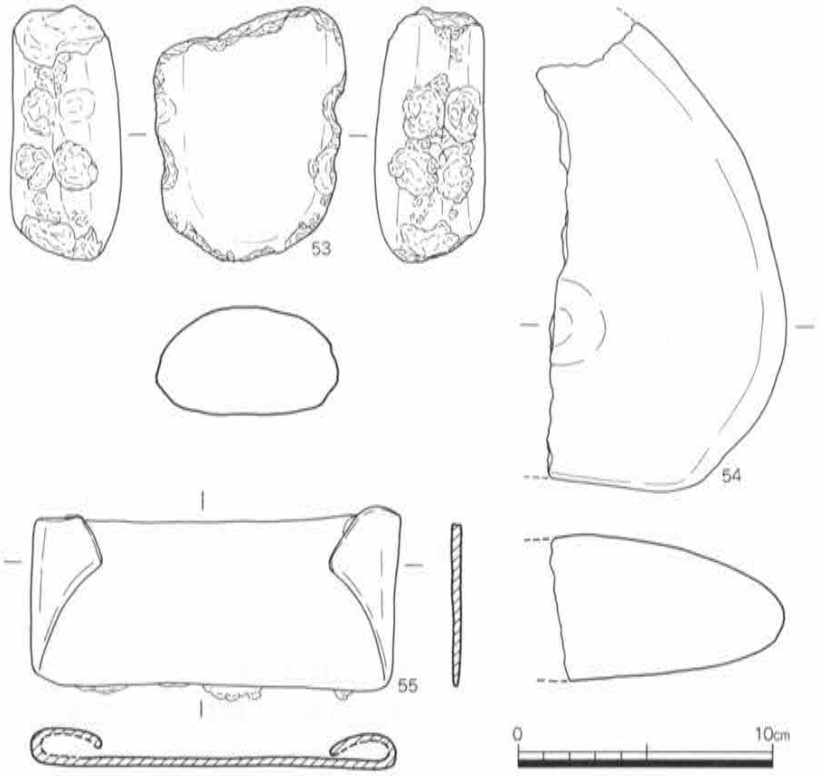
石器

石錘（53）安山岩製の石錘である。両側面2か所から打ち欠いて抉りを作っている。現存長10.2cm、幅7.3cm、厚さ5.7cm、重さ440ｇを測る。

磨石（54）安山岩製の磨石である。一面を磨石として使用している。また、中央付近がやや窪んでいるため、窪み石として使用していた可能性も考えられる。焼成を受けている部分も一部観察出来る。現存長18.5cm、最大幅8.9cm、厚さ5.7cm、重さ1.31kgを測る。

鉄製品

方形鋤先（55）板状の素材の両端を内側に折り返した袋部を有するもので、長方形を呈する大型品の鋤先であり、完形品である。全長6.4cm、幅14.6cm、厚さ0.4cm、重さ175ｇを測る。木質の遺存は見られないが、表面に錆が至ところに付着している。また、刃部が直線的で幅も広く、折り返しの下部が非常に強く折り返しているのが特徴として挙げられる。



Ｆｉｇ.25（A区）1ＳＩ10出土石器・鉄器実測図⑪（1/3）

1ＳＩ10床面出土遺物（Ｆｉｇ.26）

土師器・石器（Ｆｉｇ.12）の遺物番号と（Ｆｉｇ26・27）の遺物番号は一致する。

高坏（57）現存器高10.3cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。坏部内面は、ナデ、脚部外面は、刷毛目、脚部内面は、削り調整である。坏部内外面から脚部外面にかけて化粧土が施される。焼成は良好である。1ＳＩ10北1層、1ＳＩ10北2層と接合する。

高坏（58）現存器高8.5cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、黒雲母、白色粒子を微量含む。磨滅のため調整が不明であるが、脚部内面は、ヘラ削り調整である。また、脚部の一部に化粧土が施される。焼成はやや良好である。

高坏坏部（59）口径17.5cmを測る。坏部内外面は、淡橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、外反し端部で更に外反する。坏部内外面は、横ナデ、体部外面に明瞭な段が見らる。また、少動物によると思われるキズも観察出来る。焼成は良好である。

高坏（60）復原口径16.0cm、器高12.8cmを測る。体部内外面は、明橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し端部丸くなる。坏部外面は、横ナデ、刷毛目、坏部内面は、ナデ調整である。脚部は、裾部で屈曲し、脚部外面は、刷毛目をナデ消す。脚部内面は、ヘラ削り調整である。また、坏部内外面から脚部外面にかけて2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。1ＳＩ10南1層、1ＳＩ10北拡張部東3層、1ＳＩ10北拡張部西3層と接合する。

小型丸底壺（61）口径7.4cm、器高7.1cmを測る。体部内外面は、茶橙色を呈し、金雲母、白色粒子を

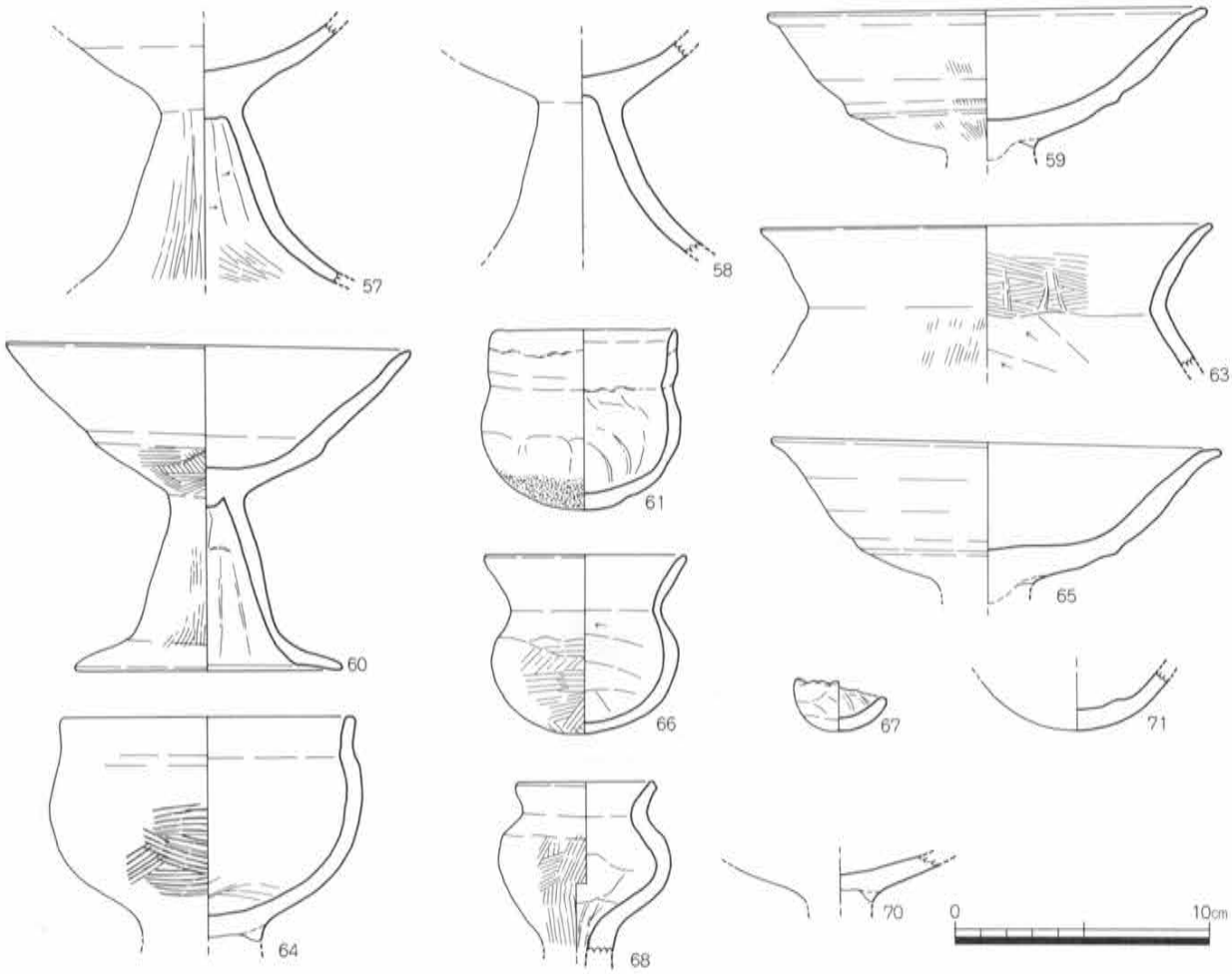
微量含む。口縁部は、直立気味に立ち上がる。体部外面は、ナデ、手持ちのヘラ削り、体部内面は、横ナデ、ナデ調整である。また、体部外面の底部全面に煤が付着し、一部に黒斑が観察出来、化粧土も施される。体部内面には粘土の接合痕と少動物によるものと思われるキズも観察出来る。焼成は良好である。

甕（63）復原口径18.0cmを測る。体部内外面は、淡茶色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部はくの字に外反し横ナデ、刷毛目、体部内面は、刷毛目、ヘラ削り調整である。体部外面に煤が付着する。焼成は良好である。

台付鉢（64）口径11.7cm、現存器高8.8cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、直立気味に立ち上がる。外面は、横ナデ、やや強い刷毛目、横ナデ、内面は、横ナデ、削り調整である。体部外面の一部に黒斑が観察出来、化粧土が施される。焼成は良好である。1ＳＩ10北2層、1ＳＩ10北3層、1ＳＩ10Ｐｉｔ10と接合する。

高坏坏部（65）復原口径17.8cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し端部で強く外反する。体部外面は、強い横ナデ、内面は、横ナデ、ナデ調整で一部ヘラ当て痕跡がある。また、体部外面に明瞭な段が有り、一部黒斑が観察出来、化粧土が施されている。また、少動物によるもの思われるキズも観察出来る。焼成は良好である。

小型丸底壺（66）復原口径8.0cm、器高7.1cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、やや外反し横ナデ、刷毛目、手持ちのヘラ削り、内面は、ヘラナデ調整である。体部外面に化粧土が施されている。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.26（Ａ区）1ＳＩ10床面・1ＳＩ10北拡張部床面出土土器実測図①（1/3）

手づくね土器（67）口径3.8cm、器高2.0cmを測る。体部内外面は、乳橙色を呈し、胎土は精選されている。体部内外面は、ナデ調整である。焼成は良好である。

小型台付壺（68）口径5.6cm、現存器高6.8cmを測る。体部内外面は、乳橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、やや外反気味に立ち上がり、横ナデ、刷毛目調整、内面は、ナデ調整である。体部外面の一部に黒斑が観察出来る。焼成は良好である。1ＳＩ10北2層と接合する。

1ＳＩ10北拡張部床面出土遺物（Ｆｉｇ.26）

土師器

高坏（70）体部内外面は、淡橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。体部外面は、横ナデ、内面は、ナデ調整である。また、体部内面に化粧土が施されている。焼成は良好である。

底部（71）体部内外面は、橙乳色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。内外面は、ナデ調整である。焼成は良好である。

1ＳＩ10床面出土遺物（Ｆｉｇ.27）

石器

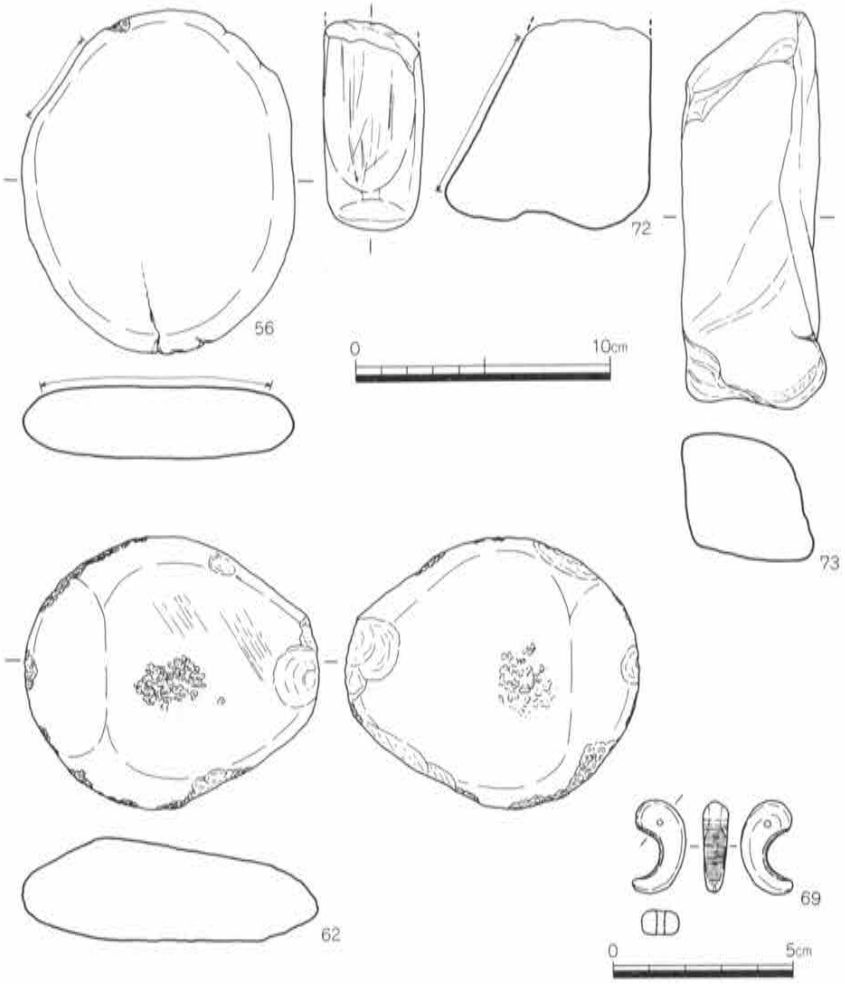
石器（56.62.69）56.安山岩製の磨石である。平らな両面は磨石として使用し、側面は敲打により剥離の可能性が考えられる。現存長13.6cm、幅10.8cm、厚さ2.9cm、重さ635ｇを測る。62.砂岩製の敲石後、磨石に転用している。全体が風化しているため平らな両面については、磨石として使用したと考えられる。また、側面は敲打の痕跡があるように思える。現存長10.6cm、幅10.6cm、厚さ4.0cm、重さ680ｇを測る。

69.蛇紋岩製の勾玉で、全長2.5cm、厚さ0.7cm、重さ2.8ｇを測る。また、孔径1.6cm×1.5cmで両面から穿孔している。色調は、濃紺黒色で黒が強く、全体に丸みを帯びているものの、稜が見られる。また、内側には顕著な削りが残る。完形品の勾玉である。

1ＳＩ10北拡張部床面出土遺物（Ｆｉｇ.27）

石器

石器（72.73）72.砂岩製の砥石である。研面は1面のみ使用している。現存長8.2cm、幅4.0cm、厚さ1.9cm、重さ330ｇを測る。73.変磨岩で一部焼成を受けている。現存長15.7cm、幅5.3cm、厚さ4.8cm、重さ625ｇを測る。用途不明であるため、参考資料として掲示している。

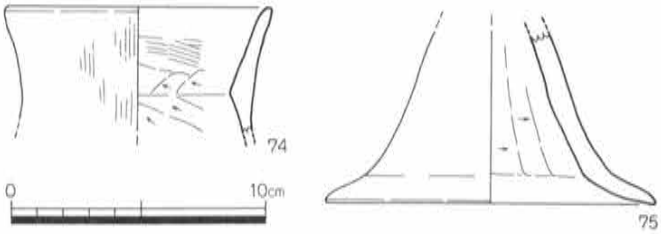


Ｆｉｇ.27（A区）1ＳＩ10床面・1ＳＩ10北拡張部床面出土石器実測図②（1/3・1/2）

1ＳＩ10北1層出土遺物（Ｆｉｇ.28）

土師器

甕（74）復原口径10.6cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、外反気味に立ち上がり、体部外面は、刷毛目後ナデ、体部内面は、刷毛目、ヘラ削り調整である。また、体部外面に黒斑が観察出来、体部内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。



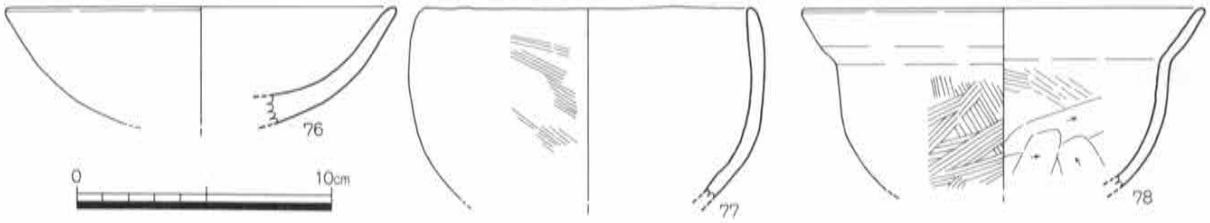
Ｆｉｇ.28（Ａ区）1ＳＩ10北1層出土土器実測図（1/3）

高坏脚部（75）脚部径13.2cmを測る。体部内外面は、淡乳色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。脚部外面は、磨滅のため調整が不明な部分もあるが、一部横ナデ調整が残る。脚部は、裾部でやや屈曲し、脚部内面は、ヘラ削り、横ナデ調整である。また、脚部内面に黒斑が観察出来る。焼成は良好である。

1ＳＩ10北2層出土遺物（Ｆｉｇ.29～33）

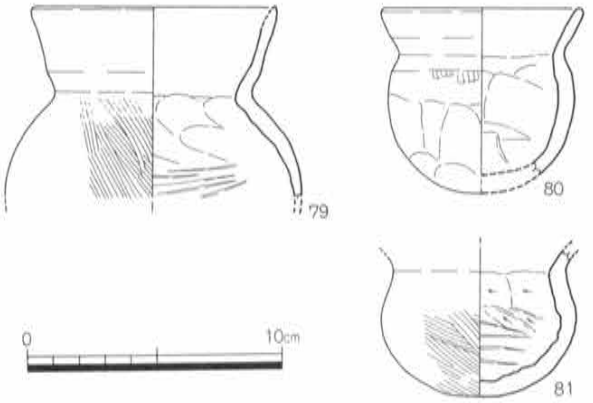
土師器

鉢（76～78）76.復原口径15.4cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、やや外反気味で横ナデ、体部内面は、磨滅のため調整不明である。体部内外面に化粧土が施されている。焼成は良好である。77.復原口径13.0cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、内湾気味に立ち上がり、刷毛目後ナデ、体部内面は、ナデ調整である。体部内外面に化粧土が施されている。焼成は良好である。78.復原口径16.0cmを測る。体部外面は、橙色、体部内面は、淡灰色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。体部外面は、横ナデ、刷毛目、体部内面は、横ナデ、刷毛目、ヘラ削り調整である。また、口縁部の内面に一部煤が付着し、体部外面には化粧土が施されている。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.29（Ａ区）1ＳＩ10北2層出土土器実測図①（1/3）

小型丸底壺（79～81）79.復原口径9.8cmを測る。体部外面は、明橙色、体部内面は、淡橙色を呈し、金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、やや外反気味に立ち上がり、横ナデ、刷毛目、体部内面は、横ナデ、ナデ、ヘラ削り調整である。体部外面に化粧土が施される。焼成は良好である。80.復原口径8.0cmを測る。体部内外面は、乳茶色を呈し、胎土は精選されている。口縁部は、やや外反し横ナデ、ナデ、一部刷毛目、体部内面は、横ナデ、指頭ナデ調整である。焼成は良好である。81.現存器高6.0cmを測る。体部内外面は、淡灰茶色を呈し、白色粒子を微量含む。体部外面は、横ナデ、ナデ、体部内面は、ナデ、ヘラ削り調整である。また、体部外面に2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.30（Ａ区）1ＳＩ10北2層出土土器実測図②（1/3）

手づくね土器（82.83）82.口径4.5cm、器高4.0cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、黒・金雲母を微量含む。体部内外面は、指頭ナデ調整である。体部外面に一部黒斑が観察出来、化粧土が施されている。椀を模倣したものであろう。焼成は良好である。83.口径4.0cm、器高4.0cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、胎土は精選されている。体部内外面は、指頭ナデ調整である。体部内外面に化粧土が施されている。椀を模倣したものであろう。焼成は良好である。

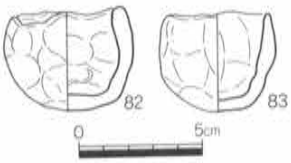


Fig.31（A区）1SI10北2層出土土器実測図③（1/3）

甕（84）復原口径14.6cmを測る。体部内外面は、茶橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し端部は丸くなる。体部外面は、横ナデ、刷毛目、体部内面は、横ナデ、ヘラ削り後ナデ調整である。体部内外面に黒斑が観察出来る。焼成は良好である。

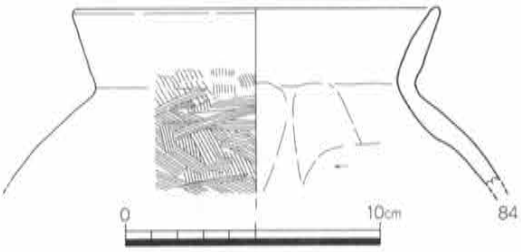


Fig.32（A区）1SI10北2層出土土器実測図④（1/3）

高坏坏部（85～89）85.復原口径17.4cmを測る。坏部外面は、淡橙色、坏部内面は、淡灰色を呈し、金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し端部で更に外反する。体部外面は、横ナデ、体部内面は、横ナデ、ナデ調整である。また、体部外面には段が付き、体部内外面に黒斑、2次焼成が観察出来、化粧土も施される。焼成は良好である。1SI10北3層と接合する。86.復原口径14.6cmを測る。体部内外面は、橙茶色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、直線的に外反し、体部外面に明瞭な段が付く。体部外面は、横ナデ、ナデ、体部内面は、横ナデ、ナデ調整である。体部外面の一部に黒斑が観察出来る。焼成は良好である。87.復原口径16.0cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、胎土は精選されている。口縁部は、直線的に外反し、体部外面に明瞭な段が付く。体部外面は、横ナデ、ナデ、体部内面は、横ナデ調整である。焼成は良好である。88.復原口径19.0cmを測る。体部外面は、淡灰橙色、体部内面は、明橙色を呈し、胎土は精選されている。口縁部は、直線的に外反し端部は丸くなる。磨滅のため調整が不明な部分もあるが、体部外面は、横ナデ調整である。また、坏部外面に黒斑も観察出来る。焼成は良好である。89.復原口径18.5cmを測る。体部内外面は、茶橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、端部でやや外反し、体部外面は、段が付く。体部外面は、刷毛目後、横ナデ、体部内面は、横ナデ、刷毛目調整である。また、坏部外面に黒斑も観察出来る。焼成は良好である。

高坏脚部（90）脚部径10.8cmを測る。体部外面は、淡乳色を呈し、白色粒子を微量含む。脚部は裾部で屈曲する。体部外面は、ナデ、横ナデ、一部刷毛目、脚部内面は、ヘラ削り調整である。焼成は良好である。1SI10北1層、1SI10北3層と接合する。

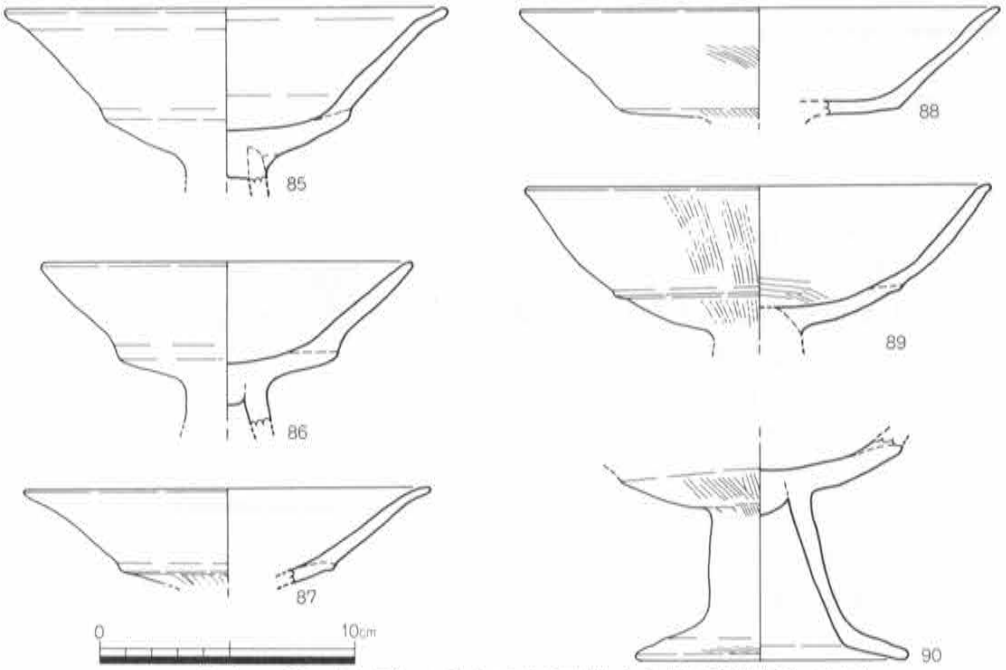
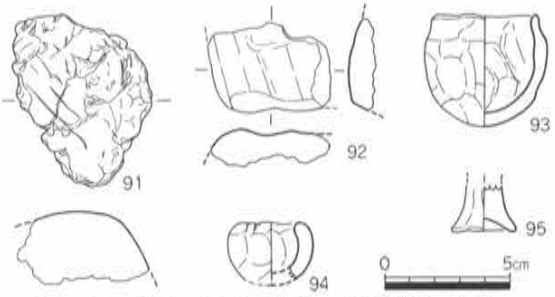


Fig.33（A区）1SI10北2層出土土器実測図⑤（1/3）

1ＳＩ10北3層出土遺物（Ｆｉｇ.34～37）

土製品

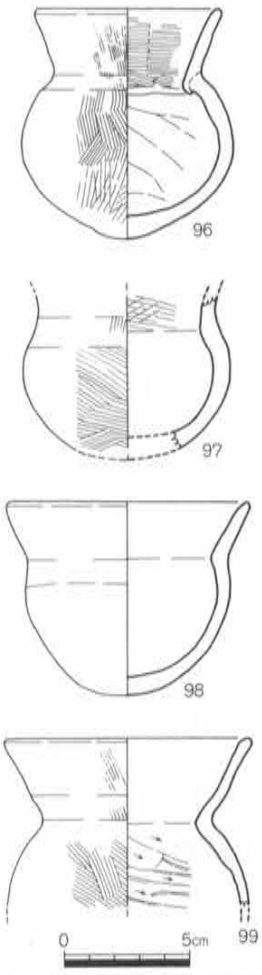
手づくね土器（91～95）91.淡橙色を呈し、白色粒子を微量含む。.藁状圧痕が残り、焼成は良好である。また、全体に2次焼成を受けている。不明土製品。92.淡茶橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。また、全体に2次焼成を受けている。不明土製品。



Ｆｉｇ.34（A区）1ＳＩ10北3層出土土器実測図①（1/3）

93.復原口径4.2cm、器高4.5cmを測る。体部内外面は、淡橙茶色を呈し、胎土は精選されている。内外面は、ナデ調整である。焼成は良好である。椀の模倣であろう。94.復原口径2.7cm、器高2.5cmを測る。体部内外面は、淡茶橙色を呈し、胎土は精選されている。内外面は、ナデ調整である。焼成は良好である。椀の模倣であろう。95.復原底径2.6cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、胎土は精選されている。調整は不明であるが、焼成は良好である。高坏の脚部の模倣であろう。

小型丸底壺（96～99）96.復原口径7.4cm、器高9.1cmを測る。体部外面は、橙色、体部内面は、淡灰色を呈し、白色粒子を微量含む。口縁部は、やや外反しながら立ち上がる。体部外面は、横ナデ、刷毛目、体部内面は、刷毛目、横ナデ、ナデ調整で口縁部と体部の接合痕が残る。また、体部外面に黒斑が観察出来、化粧土も施される。焼成は良好である。1ＳＩ10北2層、1ＳＩ10北3層と接合する。97.現存器高6.2cmを測る。体部内外面は、淡乳橙色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を微量含む。体部外面は、刷毛目後横ナデ、体部内面は、刷毛目、ナデ調整である。また、底部付近に黒斑が観察出来、体部内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。1ＳＩ10北2層と接合する。98.復原口径9.6cm、器高7.7cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、胎土は精選されている。口縁部は、やや外反し横ナデ、ナデ、体部内面は、横ナデ、横方向と不定方向のナデ調整である。内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。99.復原口径9.8cmを測る。体部内外面は、淡茶橙色を呈し、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し刷毛目後、横ナデをナデ消し、胴部は、刷毛目、体部内面は、横ナデ、ナデ、ヘラ削り調整である。体部外面は、化粧土が施される。焼成は良好である。1ＳＩ10北3層と接合する。

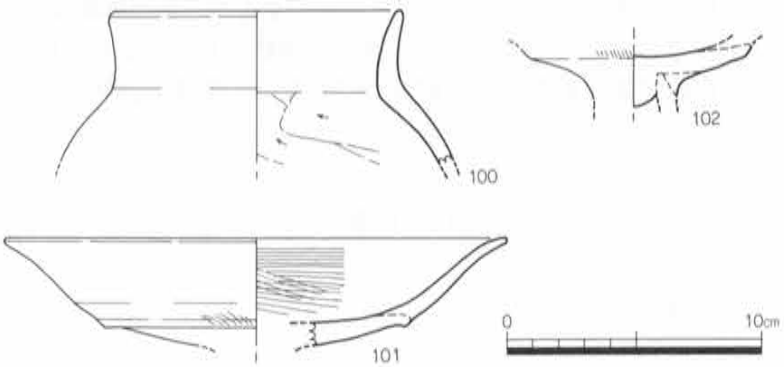


Ｆｉｇ.35（A区）1ＳＩ10北3層出土土器実測図②（1/3）

甕（100）復原口径11.6cmを測る。体部内外面は、淡乳色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、直立気味に立ち上がる。体部内外面は、横ナデ、ヘラ削り調整である。焼成は良好である。

高坏坏部（101）復原口径20.0cmを測る。体部内外面は、明橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、外反し端部で更に外反する。体部外面は、刷毛目、ナデ、体部内面は、刷毛目、ナデ調整である。また、体部外面に明瞭な段が付く。焼成は良好である。

高坏（102）体部内外面は、茶橙色を呈し、胎土は精選されている。体部外面は、刷毛目、ナデ、体部内面は、刷毛目、ナデ調整である。また、坏部と脚部の接合面が剥離している。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.36（A区）1ＳＩ10北3層出土土器実測図③（1/3）

鉢（103）体部内外面は、淡灰茶色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、やや外反し、横ナデ、刷毛目、体部内面は、ナデ調整である。体部内外面に煤が付着する。焼成は良好である。

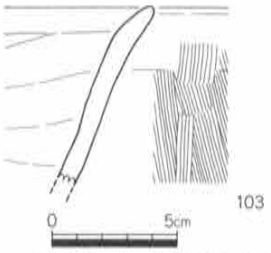


Fig.37（A区）1SI10北3層出土土器実測図④（1/3）

1SI10南2層出土遺物（Fig.38）

土師器

高坏坏部（104.105）104.復原口径16.5cmを測る。体部内外面は、淡橙茶色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、やや外反し横ナデ、刷毛目、体部内面は、横ナデ、ヘラナデ調整である。体部外面には、黒斑が観察出来る。焼成は良好である。

105.体部内外面は、淡橙乳色を呈し、黒雲母、白色粒子を微量含む。体部外面は、刷毛目を横ナデでナデ消し、体部内面は、横ナデ調整である。また、擬口縁が剥離しいる部分や体部内外面に化粧土が施される。少動物によると思われるキズも観察出来る。焼成は良好である。

甕（106）復原口径12.6cmを測る。体部内外面は、灰茶色を呈し、白色粒子を多量含む。口縁部は、やや外反気味に立ち上がり、横ナデ、刷毛目、体部内面は、磨滅が著しいが、横ナデ調整である。体部外面に2次焼成が観察出来る。焼成は良好である。

小型丸底壺（107）体部内外面は、橙乳色を呈し、白色粒子を微量含む。体部外面は、刷毛目、体部内面は、指ナデ調整である。体部内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。1SI10南1層と接合する。

手づくね土器（108）体部内外面は、淡乳橙色を呈し、胎土は精選されている。藁状圧痕が観察出来る。焼成は良好である。不明土製品。

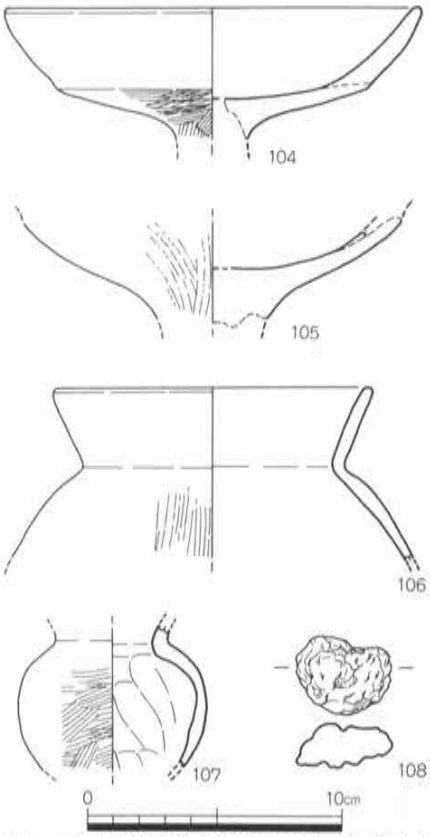


Fig.38（A区）1SI10南2層出土土器実測図（1/3）

1SI10北拡張部2層出土遺物（Fig.39）

土師器

高坏坏部（109.110）109.復原口径16.8cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、直線的に外反し、横ナデ、一部刷毛目、坏部内面は、横ナデ、ナデ調整である。体部外面に化粧土が施される。焼成は良好である。110.復原口径18.8cmを測る。体部内外面は、乳橙色を呈し、金雲母を微量含む。口縁部は、直線的に外反し、磨滅のため調整不明な部分もあるが、体部外面は、刷毛目後、ナデ、坏部内面は、横ナデ調整である。また、体部外面に黒斑が観察出来、明瞭な段もある。焼成は良好である。1SI10北3層と接合する。

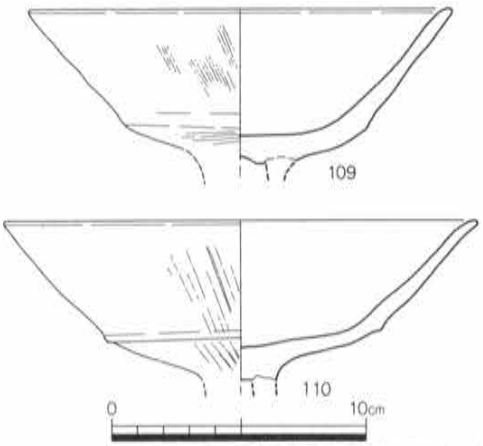


Fig.39（A区）1SI10北拡張部2層土器実測図（1/3）

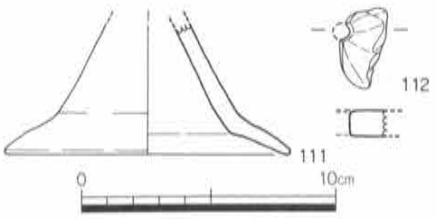
1SI10北拡張部西3層出土遺物（Fig.40）

土師器

高坏脚部（111）脚部径11.4cmを測る。体部内外面は、明橙色を呈し、白色粒子を微量含む。脚部は、裾部でやや屈曲

する。脚部外面は、ナデ、横ナデ、脚部内面は、削り調整である。体部内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。

手づくね土器（112）現存長3.2cmを測る。体部内外面は、淡橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。中心部付近に穿孔と放射状のナデが観察出来る。不明土製品。



Ｆｉｇ.40（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部西3層出土土器実測図（1/3）

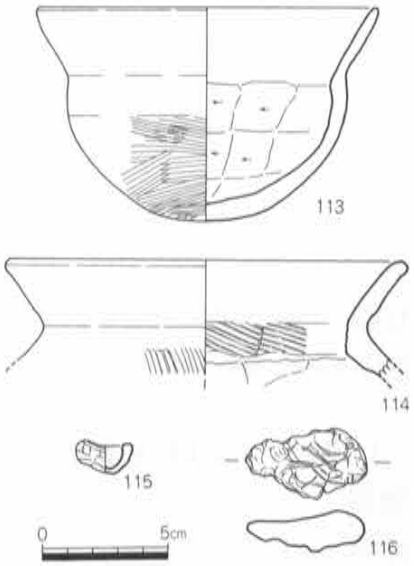
１ＳＩ10北拡張部東3層出土遺物（Ｆｉｇ.41）

土師器

鉢（113）復原口径13.6cm、器高8.5cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、金雲母、白色粒子を多量含む。口縁部は、外反し横ナデ、刷毛目、体部内面は、横ナデ、ヘラ削り調整である。体部内外面に黒斑、2次焼成も観察出来る。焼成は良好である。

甕（114）復原口径16.0cmを測る。体部内外面は、茶灰色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を少量含む。口縁部は、外反し横ナデ、刷毛目、体部内面は、横ナデ、刷毛目調整である。体部外面に煤が付着する。焼成は良好である。

手づくね土器（115.116）115.口径2.2cm、器高1.4cmを測る。体部内外面は、茶橙色を呈し、金雲母を微量含み、胎土は精選されている。焼成は良好である。椀を模倣したものであろう。
116.淡橙色を呈し、白色粒子を微量含み、藁状圧痕が残る。焼成は良好である。また、2次焼成が一部観察出来る。不明土製品。

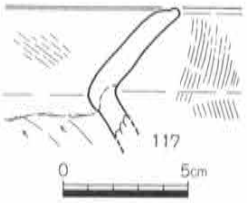


Ｆｉｇ.41（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部東3層出土土器実測図（1/3）

１ＳＩ10北拡張部東4層出土遺物（Ｆｉｇ.42）

土師器

甕（117）体部内外面は、淡橙乳色を呈し、白色粒子を微量含む。口縁部は、外反し、端部内面に段が付く。体部外面は、刷毛目後横ナデ、体部内面は、横ナデ調整である。体部外面に煤が全面に付着する。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.42（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部東4層出土土器実測図（1/3）

１ＳＩ10北拡張部9層出土遺物（Ｆｉｇ.43）

石器

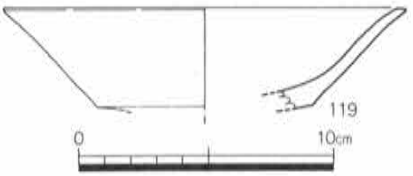
石器（118）砂岩製の砥石で1面のみ使用している。手持ち用か？現存長6.9cm、幅1.5cm、厚さ2.3cm、重さ35ｇを測る。

Ｆｉｇ.43（Ａ区）１ＳＩ10北拡張部9層出土石器実測図（1/2）

１ＳＩ10Ｐｉｔ5出土遺物（Ｆｉｇ.44）

土師器

高坏坏部（119）復原口径16.0cmを測る。体部内外面は、橙色を呈し、金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、直線的に外反し、端部は、面取りし横ナデ、体部内面は、横ナデ、ナデ調整である。体部内外面に化粧土が施される。焼成は良好である。

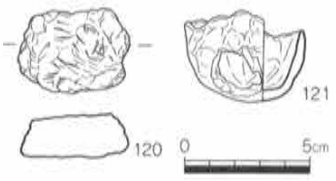


Ｆｉｇ.44（Ａ区）１ＳＩ10Ｐｉｔ5出土土器実測図（1/3）

1ＳＩ10Ｐｉｔ6出土遺物（Ｆｉｇ.45）

土師器

手づくね土器（120）淡橙色を呈し、胎土は精選されている。藁状圧痕、もみがら痕が残る。焼成は良好である。不明土製品。



Ｆｉｇ.45（A区）1ＳＩ10Ｐｉｔ6・Ｐｉｔ6・6層出土土器実測図（1/3）

1ＳＩ10Ｐｉｔ6・6層出土遺物（Ｆｉｇ.45）

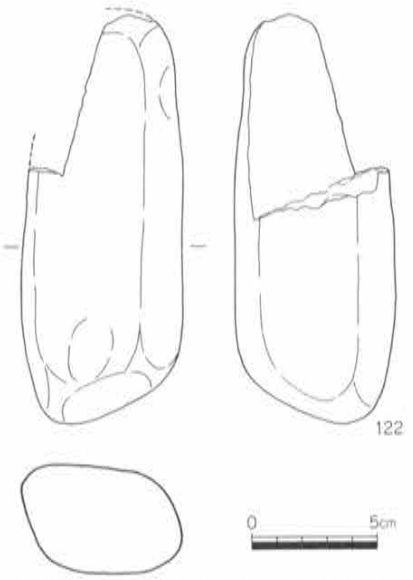
土師器

手づくね土器（121）口径4.8cm、器高3.6cmを測る。内外面は、淡灰茶色を呈し、胎土は精選されている。内外面は、指頭ナデ調整である。焼成後、胴部から穿孔する。椀を模倣したものであろう。焼成は良好である。

1ＳＩ10Ｐｉｔ9・7層出土遺物（Ｆｉｇ.46）

石器

石器（122）外面に焼成を受けているのが観察出来る。現在長16.2cm、幅6.4cm、厚さ4.4cm、重さ540ｇを測る。



Ｆｉｇ.46（A区）1ＳＩ10Ｐｉｔ9・7層出土石器実測図（1/3）

1ＳＩ10Ｐｉｔ10出土遺物（Ｆｉｇ.47）

土師器

底部（123）体部内外面は、乳橙色を呈し、白色粒子を微量含む。外面は、刷毛目、内面は、ナデ調整である。焼成は良好である。

1ＳＩ10Ｐｉｔ10・5層出土遺物（Ｆｉｇ.47）

土師器

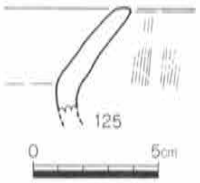
支脚（124）体部内外面は、淡灰茶色を呈し、白色粒子を微量含む。調整は、ナデと思われる。また、外面に藁状圧痕が残る。焼成は良好である。

Ｆｉｇ.47（A区）1ＳＩ10Ｐｉｔ10・Ｐｉｔ10・5層出土土器実測図（1/3）

1ＳＩ10北拡張部Ｐｉｔ12・1層出土遺物（Ｆｉｇ.48）

土師器

甕（125）体部内外面は、乳茶色を呈し、黒・金雲母、白色粒子を微量含む。口縁部は、やや外反し端部は面とりする。体部外面は、刷毛目を横ナデで消し、体部内面は、横ナデ調整である。焼成は良好である。

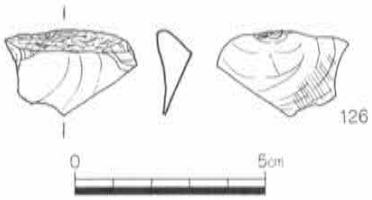


Ｆｉｇ.48（A区）1ＳＩ10Ｐｉｔ12・1層出土土器実測図（1/3）

1ＳＤ01出土遺物（Ｆｉｇ.49）

石器

石器（126）黒曜石で微細剥離を有する剥片である。現存長3.5cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm、重さ5ｇを測る。



Ｆｉｇ.49（A区）1ＳＤ01出土石器実測図（1/2）

4.小結

Ａ区は周辺より若干高い微高地上に立地するのに対し、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区はやや低い所に立地する。そのため遺構は、確認出来なかったというよりも、ブドウ畑、茶畑、竹林などの後世の撹乱を著しく受けているために、遺構が破壊されているか、もしくは、消滅している可能性が高いと考えられる。

今後、試掘調査などの継続的な調査を行い、確認する必要があるだろう。しかし、遺構の残り状況も悪いと思われる。

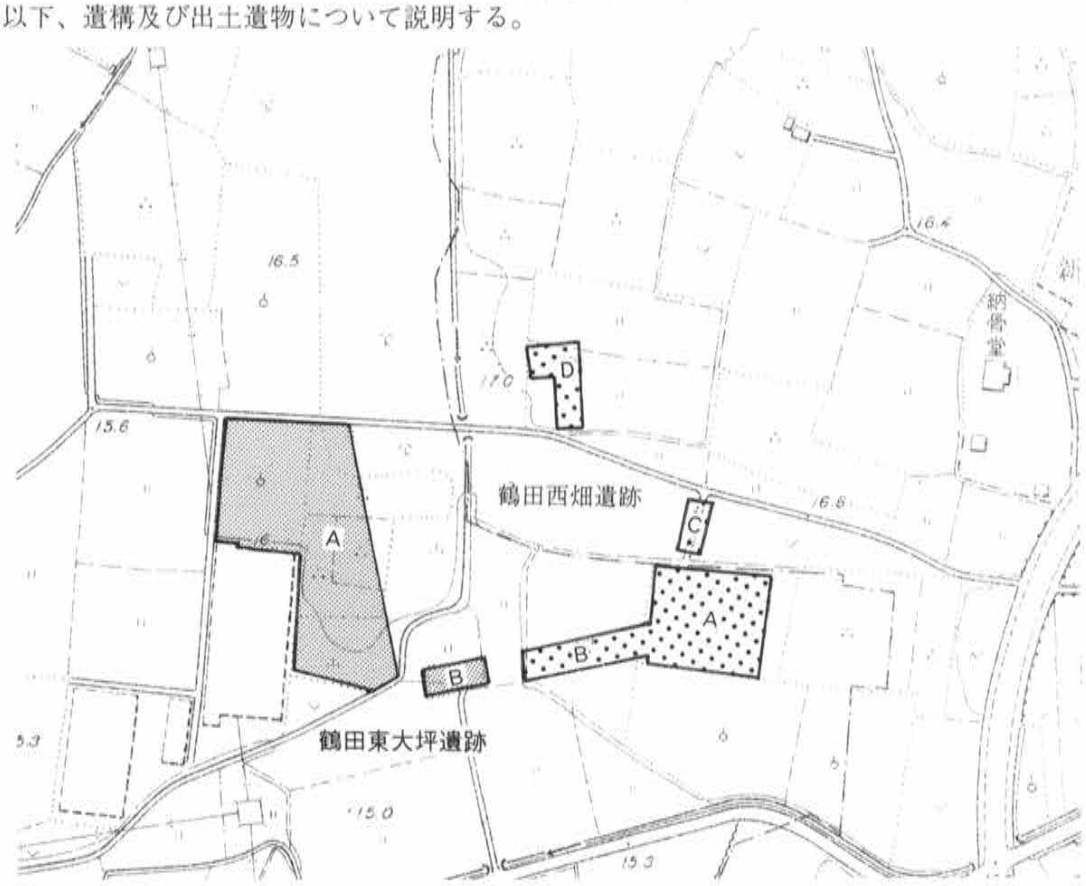
次に、１ＳＩ１０竪穴住居に伴い3条の溝について、出土遺物から古墳時代と考えれる。溝は、切り合いから1ＳＤ15→1ＳＤ05→1ＳＤ01の順番である（新→古）。そこで、竪穴住居との関係が問題になる。1ＳＤ15は、ほぼ直線状に延びている点や、多少削平を受けているが溝の幅、深さを考えると、区画溝と考えるより排水路としての機能ではないかと考える。そのため、1ＳＤ15同様に1ＳＤ01、1ＳＤ05についても排水路として機能していたものではないかと考えられる。また、1ＳＤ15を直線的に西に延ばすと、鶴田東大坪遺跡1次調査（Ｂ区）で確認した1ＳＤ55（自然流路）につながる。この溝の下層は、古墳時代と考えられる。このため、1ＳＤ01、1ＳＤ05、1ＳＤ15、１ＳＤ55は関連する遺構ではないかと考える。

最後に、1ＳＩ10、1ＳＩ20に関して周辺の発掘調査結果を合わせても、同時期の竪穴住居が確認されていない。恐らく、集落は北から東にかけて存在したと考えられ、現在の新溝付近に広がると思われる。周辺の表採遺物として、カメ棺と思われる土器片を確認している。しかし、遺構が検出される可能性は、低いと思われる。1ＳＩ10、1ＳＩ20に関しての詳細は、別項で記す。

第3節　鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区・Ｂ区）

1.はじめに

鶴田東大坪遺跡は、筑後市大字鶴田字東大坪1251-1外に所在し、標高約15ｍの低位段丘に位置する。試掘結果を基に面の削平及び支線用排水路予定地の約2400㎡を調査対象とした。検出した遺構は、溝4条、土壙6基、土壙墓1基（木蓋土壙墓）、不明遺構1基、Ｐｉｔを検出した。しかし、ブドウ畑や竹林などの際の耕作の撹乱のため多くの遺構が破壊もしくは破損されている。調査区が分かれていたためＡ区、Ｂ区として調査を行った。調査は、柴田が担当した。調査期間は平成8年9月17日～同年12月6日の間で実施した。以下、遺構及び出土遺物について説明する。



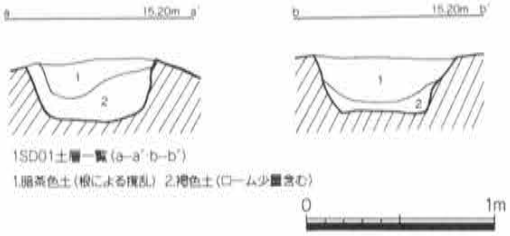
Ｆｉｇ.50 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区・Ｂ区）調査地点位置図（1/2.500）

2.検出遺構について

（Ａ区）

１ＳＤ01（Ｆｉｇ.51）

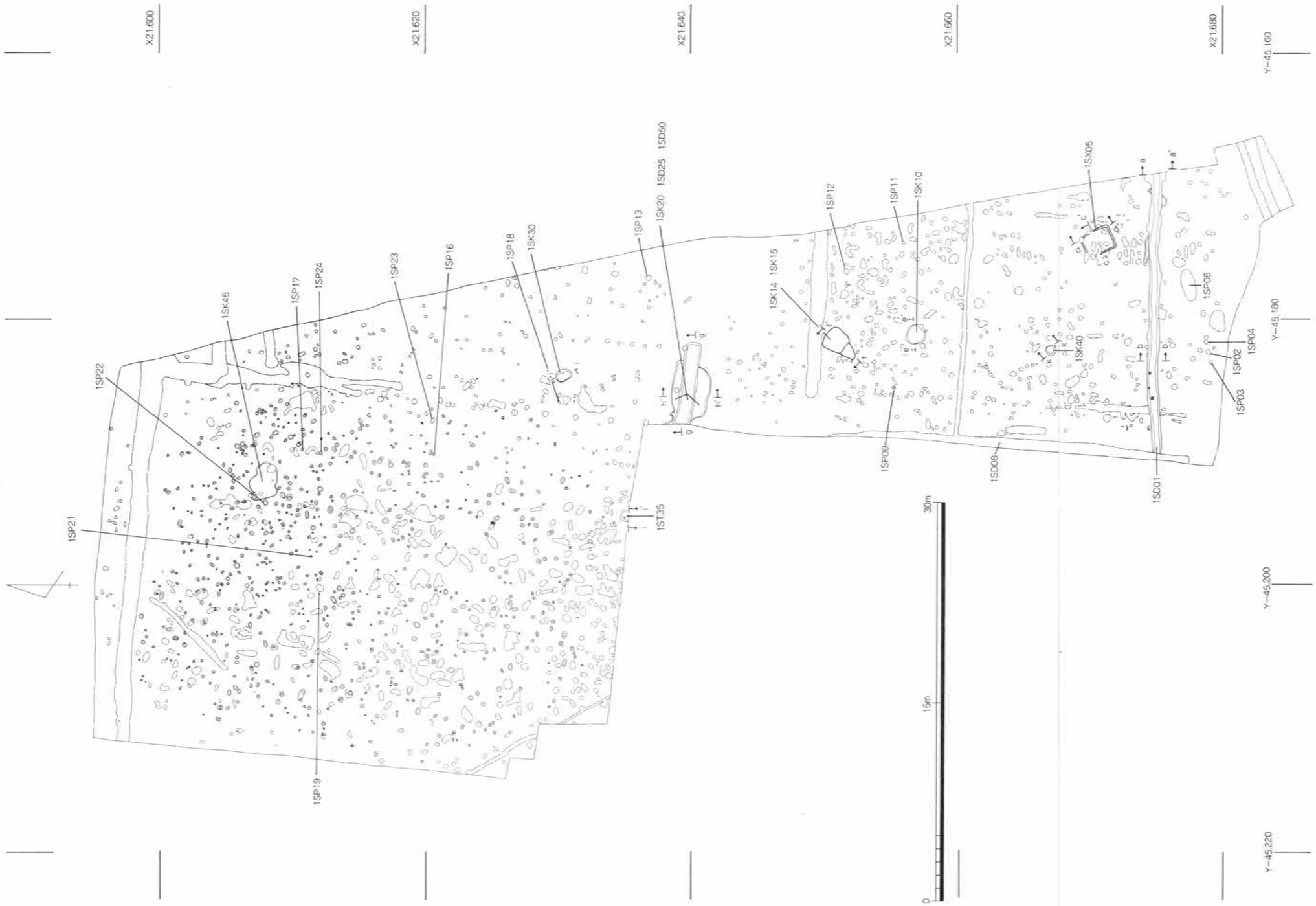
調査区の南に位置し、東西に延びる溝である。検出長約21.0ｍ、幅0.61～1.60ｍ、深さ0.38ｍを測る。埋土は暗茶色土（撹乱）、褐色土の2層に分かれる。溝の底面は、ほぼ平らである。出土遺物は須恵器の坏片が1点のみである。時期は8世紀中頃～9世紀前半頃であろう。



Ｆｉｇ.51（Ａ区）１ＳＤ01土層断面実測図（1/40）

１ＳＸ05（Ｆｉｇ.53）

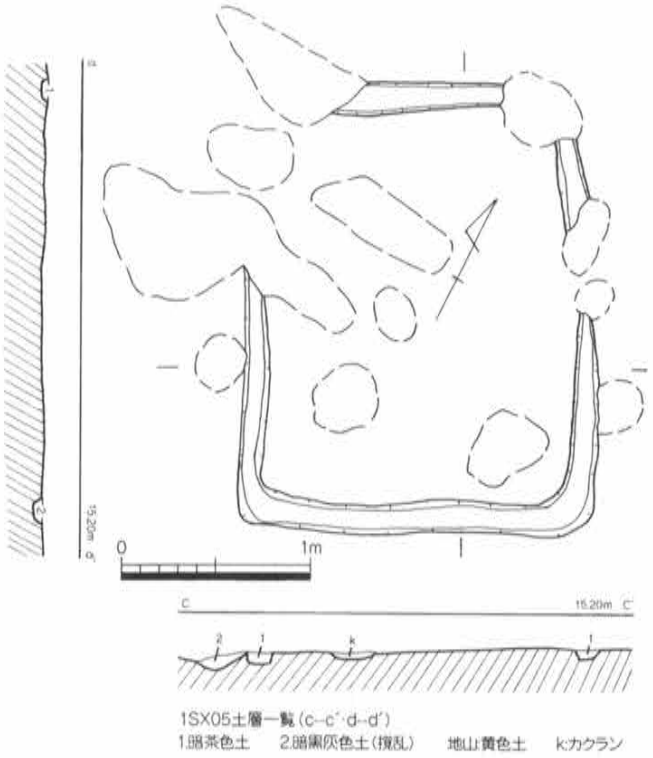
調査区の南に位置し、１ＳＤ01の北側に位置する。周囲には撹乱が多く点在し、溝は全周しないものの、周溝状に巡る溝を検出した。長軸2.36ｍ、短軸1.87ｍ、深さ0.04～0.05ｍと極めて浅い。埋土は、暗茶色土の1層である。溝の底面は、ほぼ平らである。出土遺物が皆無なため時期は不明である。



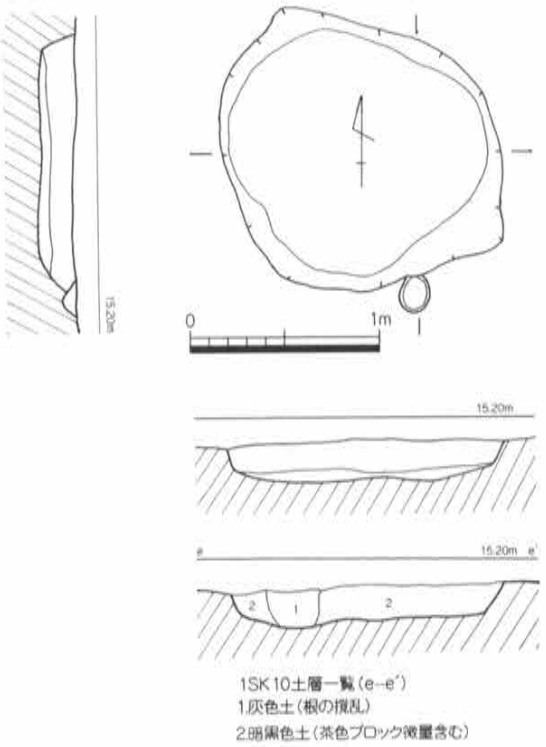
Ｆｉｇ.52 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）遺構全体図（1/300）

１ＳＫ10（Ｆｉｇ.54）

調査区のやや南に位置し楕円形を呈する。2.96m×2.74m、深さ0.23mを測る。埋土は、暗黒色土の1層である。出土遺物は土師器の甕の口縁部である。古墳時代の所産であろう。



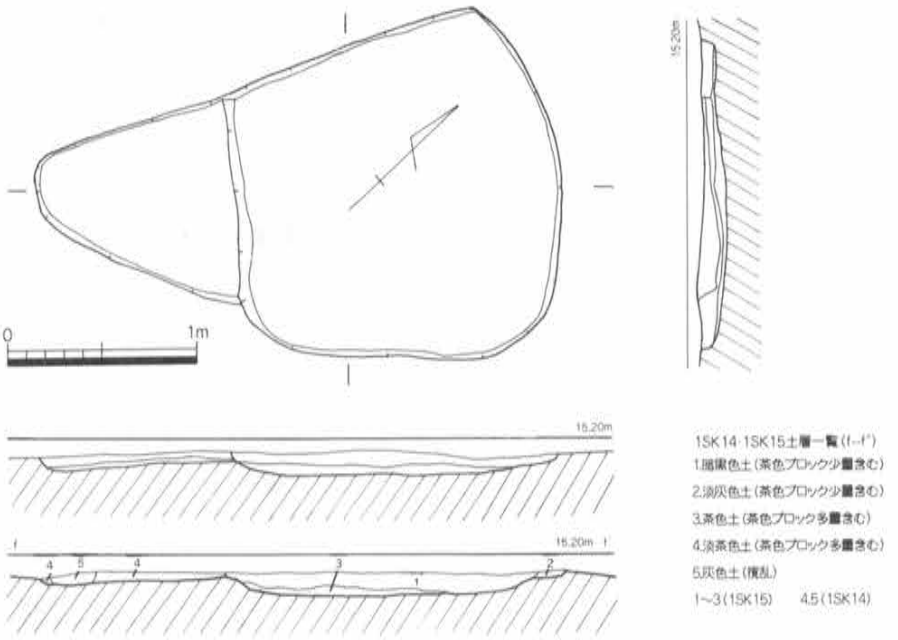
Ｆｉｇ.53（A区）１ＳＸ05実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）



Ｆｉｇ.54（A区）１ＳＫ10実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）

１ＳＫ14・１ＳＫ15（Ｆｉｇ.55）

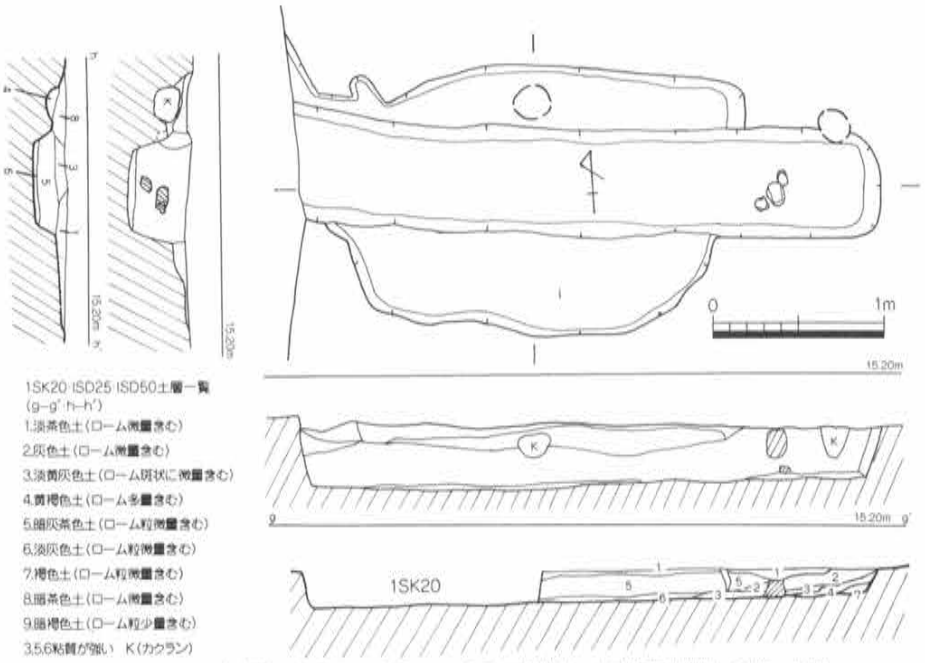
調査区の中央よりの南に位置する。遺構検出時および土層観察の結果、１ＳＫ15が切っている。出土遺物は1ＳＫ14は皆無、１ＳＫ15からは黒曜石、サヌカイト、突帯文系土器の甕片、軽石片が出土した。



Ｆｉｇ.55（A区）１ＳＫ14・１ＳＫ15実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）

１ＳＫ20・１ＳＤ25
１ＳＤ50（Ｆｉｇ.56）

調査区のほぼ中央付近に位置し、遺構検出時および土層観察の結果、１ＳＤ25が切っているのを確認した。遺構は溝状を呈し、検出長3.08ｍ、深さ0.40ｍ前後を測る。出土遺物は１ＳＫ20は皆無、１ＳＤ25から瓦質土器の土鍋、滑石製石鍋、敲石、磨石が出土した。１ＳＤ25の埋没過程で掘り直しがあり、１ＳＤ50として遺物を取り上げた。出土遺物は、土師器坏、土師器椀が出土した。溝の最終埋没は14世紀～15世紀頃であろう。



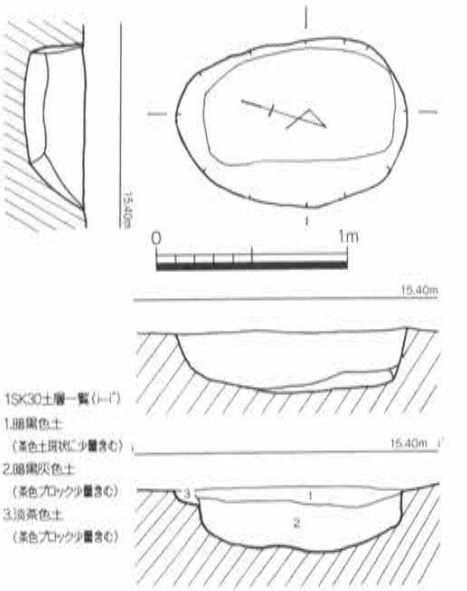
Ｆｉｇ.56（Ａ区）１ＳＫ20・１ＳＤ25・１ＳＤ50実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）

１ＳＫ30（Ｆｉｇ.57）

調査区のほぼ中央に位置し、長軸1.22ｍ、短軸0.88ｍ、深さ0.38ｍを測る。埋土は、暗黒色土、暗黒灰色土の2層に分かれる。出土遺物は、弥生土器片、黒曜石、サヌカイト、敲石が出土した。

１ＳＴ35（Ｆｉｇ.58）

調査区のほぼ中央に位置する。南が調査区のため全容は不明である。検出長0.60ｍ、深さ0.24ｍを測る。周辺にはブドウ畑の基礎などの撹乱を受けているため、遺構検出時（埋土は灰黒色土）は撹乱と思って掘り下げた。しかし、遺物が出土し、土層観察を行った結果、土壙墓（木蓋土壙墓）であることがわかった。出土遺物は土師器の小皿糸切り3点、坏1点が出土した。時期は、13世紀前半頃と思われる。



Ｆｉｇ.57（Ａ区）１ＳＫ30実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）

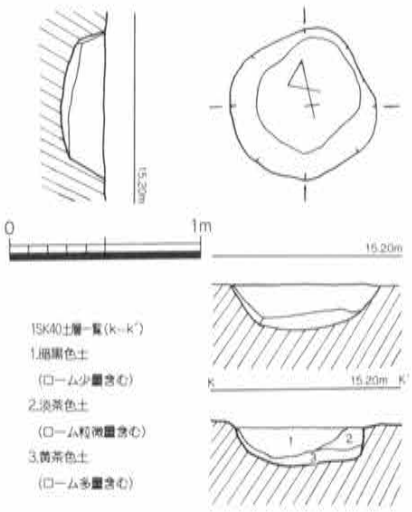
１ＳＫ40（Ｆｉｇ.59）

調査区の南で、１ＳＤ01の北に位置し、円形状を呈する遺構である。0.79ｍ×0.78ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は、暗黒土、淡茶色土黄茶色土の3層に分かれる。出土遺物は、不明土製品が出土した。

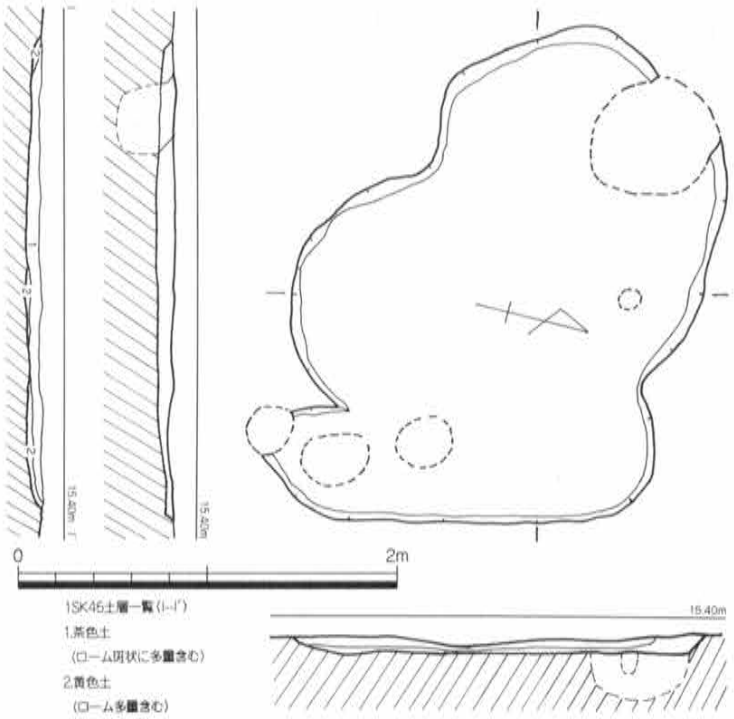
１ＳＫ45（Ｆｉｇ.60）

調査区の北に位置し、不定形な形を呈する遺構である。埋土は、茶色土、黄色土の2層に分かれる。出土遺物は、弥生土器片、土師器片が出土したが、破片のため図化出来なかった。

Ｆｉｇ.58（Ａ区）１ＳＴ35実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）



Ｆｉｇ.59 （Ａ区）ｉＳＫ40実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）



Ｆｉｇ.60 （Ａ区）ｉＳＫ45実測図・土層断面実測図（1/40・1/40）

その他の遺構と遺物について

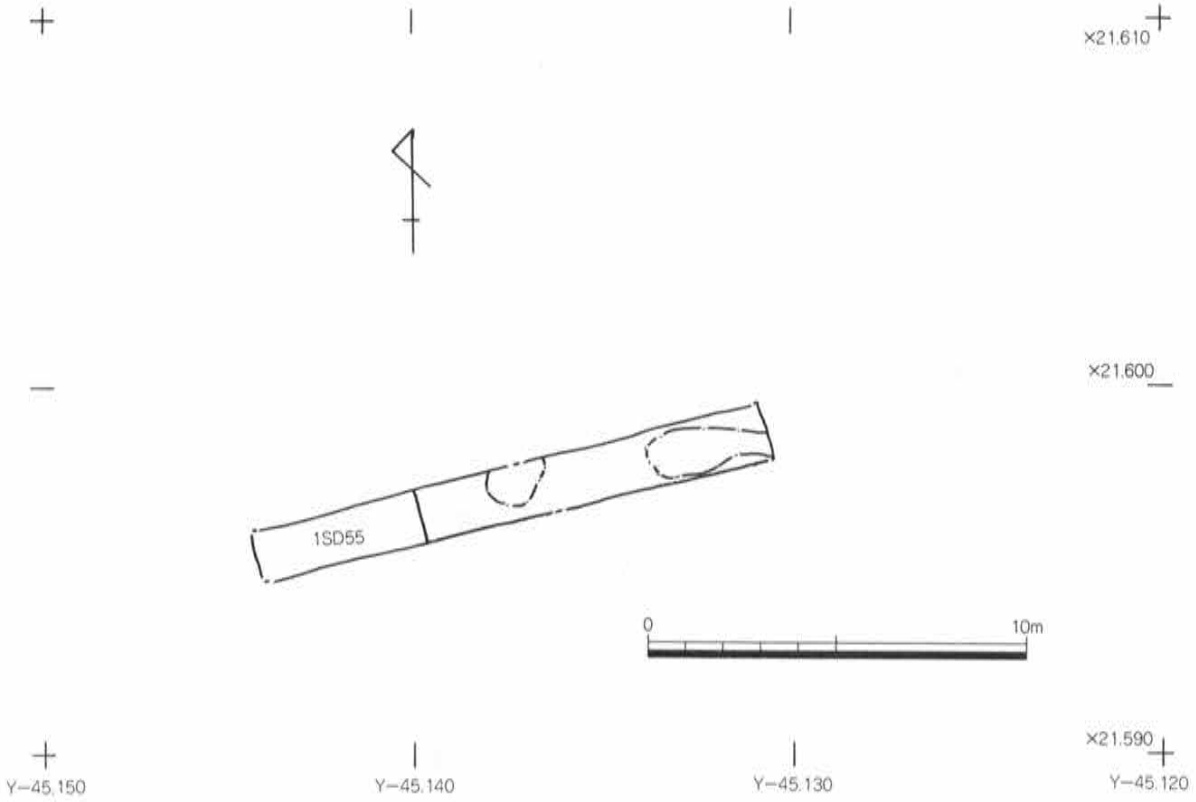
Ｐｉｔや撹乱から遺物が出土したため番号をつけて取り上げた。破片資料であるため、図化出来なかった遺物もある。その他、表採遺物として中世と思われる土器片が出土している。

１ＳＰ02（Ｆｉｇ.52）撹乱のＰｉｔである。出土遺物は、近世陶器である。
１ＳＰ03（Ｆｉｇ.52）撹乱のＰｉｔである。出土遺物は、土師器土鍋である。
１ＳＰ04（Ｆｉｇ.52）撹乱のＰｉｔである。出土遺物は、土師器である。
１ＳＰ06（Ｆｉｇ.52）たまり状になる撹乱である。出土遺物は、土師器である。
１ＳＰ07（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器火鉢である。
１ＳＤ08（Ｆｉｇ.52）撹乱の溝である。出土遺物は、近世陶器や土師器である。
１ＳＰ09（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、瓦質土器擂鉢である。
１ＳＰ11（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器、黒曜石剥片である。
１ＳＰ12（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器小皿糸切りである。
１ＳＰ13（Ｆｉｇ.52）撹乱のＰｉｔである。出土遺物は、土師器である。
１ＳＰ16（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器である。
１ＳＰ17（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、砥石である。
１ＳＰ18（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器小皿糸切りである。
１ＳＰ19（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、弥生土器、土師器小皿糸切りである。
１ＳＰ21（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器、黒曜石剥片である。
１ＳＰ22（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、磨石、土師器である。
１ＳＰ23（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、瓦器である。
１ＳＰ24（Ｆｉｇ.52）Ｐｉｔである。出土遺物は、土師器である。

（Ｂ区）

１ＳＤ55（Ｆｉｇ.61）

Ａ区の南側に位置する。調査区から自然流路と思われる溝を1条検出した（１ＳＤ55）。しかし、調査区の幅が狭く、周辺より低地に位置していたため、雨が降るたび冠水を繰り返した。その結果、土砂の崩落やひび割れなどのため、調査が困難であると判断し、一部分のみを完掘した。
調査の結果、上層～中層は現代の水路として使われていた事が確認出来た。下層は古墳時代に相当する土師器の高坏の脚部が出土した。



Ｆｉｇ.61 鶴田東大坪遺跡1次調査（Ｂ区）遺構全体図（1/200）

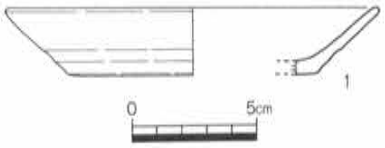
3.出土遺物について

Ａ区（1～32）

1ＳＤ01（Ｆｉｇ.62）

須恵器

坏（1）復原口径15.0cm、器高2.7cm、復原底径10.0cmを測る。内外面は、灰色を呈し、白色粒子、黒色粒子を少量含む。内外面は、ヨコナデ、底部は、回転ヘラ切り調整である。焼成は良好である。平安前期の所産であろう。

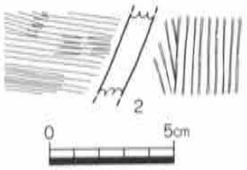


Ｆｉｇ.62（Ａ区）１ＳＤ01出土土器実測図（1/3）

1ＳＰ07（Ｆｉｇ.63）

土師器

火鉢（2）外面は、縦刷毛目、内面は、斜め方向の横刷毛目調整が残る。また、内外面は、淡乳白色を呈し、黒・金雲母を少量含む。焼成は良好である。

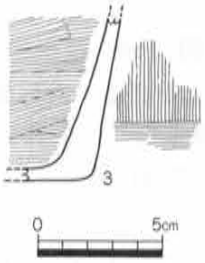


Ｆｉｇ.63（Ａ区）１ＳＰ07出土土器実測図（1/3）

1ＳＰ09（Ｆｉｇ.64）

瓦質土器

鉢（3）内外面に刷毛目調整が残る。内面は、暗黒灰色、外面は、淡灰色を呈し、金雲母、白色粒子2～3mm程度を少量含む。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.64（Ａ区）１ＳＰ09出土土器実測図（1/3）

1ＳＫ10（Ｆｉｇ.65）

土師器

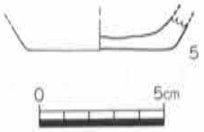
甕（4）復原口径16.0cmを測る。口縁部の一部で、磨滅が著しいため調整不明。内外面は、淡橙色を呈し、白色粒子を少量含む。焼成は良好である。

Ｆｉｇ.65（Ａ区）１ＳＫ10出土土器実測図（1/3）

1ＳＰ12（Ｆｉｇ.66）

土師器

小皿（5）復原底径5.8cmを測る。内外面は、赤橙色を呈し、黒雲母を微量含む。磨滅のた調整不明であるが、底部は糸切り調整である。焼成は良好である。



Ｆｉｇ.66（Ａ区）１ＳＰ12出土土器実測図（1/3）

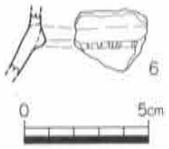
1ＳＫ15（Ｆｉｇ.67・68）

弥生土器

甕（6）突帯文系の甕であり、胴部外面に刻み目突帯を貼り付ける。内外面は、淡茶色を呈し、白色粒子を少量含む。焼成は良好である。

石器

軽石（7）平面は楕円形で、調整は確認出来ない。現存長3.0cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重さ1.6ｇを測る。



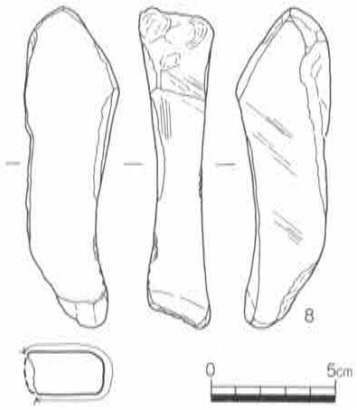
Ｆｉｇ.67（Ａ区）１ＳＫ15出土土器実測図①（1/3）

Ｆｉｇ.68（Ａ区）１ＳＫ15出土石器実測図②（1/2）

１ＳＰ17（Ｆｉｇ.69）

石器

砥石（8）砂岩製の砥石で焼成を受けている。研ぎ面は4面を使用している。現存長12.7cm、幅1.9cm、厚さ3.1cm、重さ145ｇを測る。

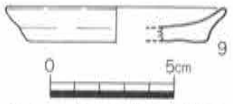


Ｆｉｇ.69（Ａ区）１ＳＰ17出土石器実測図（1/3）

１ＳＰ18（Ｆｉｇ.70）

土師器

小皿（9）復原口径8.8cm、器高1.4cm、復原底径7.2cmを測る。内外面は、淡乳色を呈し、金雲母を微量含む。磨滅のため調整不明であるが、底部は糸切り調整である。焼成はやや不良である。

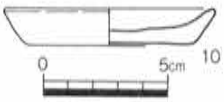


Ｆｉｇ.70（Ａ区）１ＳＰ18出土土器実測図（1/3）

１ＳＰ19（Ｆｉｇ.71）

土師器

小皿（10）復原口径8.4cm、器高1.5cm、復原底径6.7cmを測る。内外面は、淡乳色を呈し、白色粒子を微量含む。底部は糸切り調整後、板状圧痕が残る。焼成は良好である。

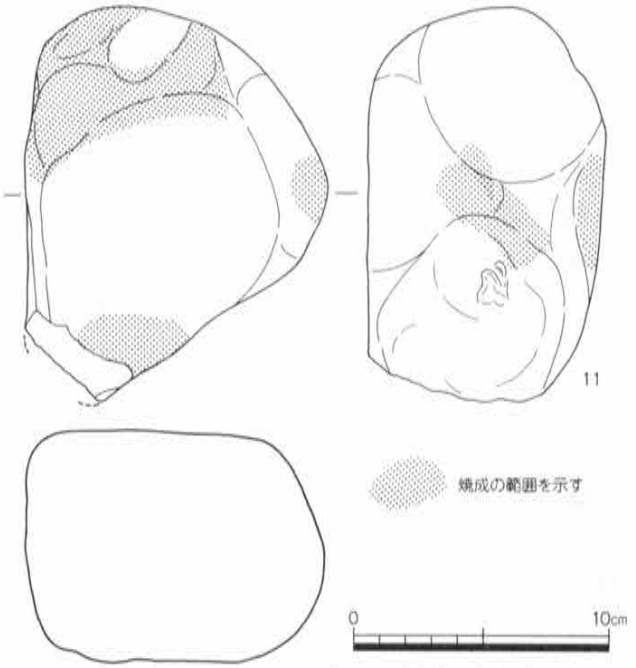


Ｆｉｇ.71（Ａ区）１ＳＰ19出土土器実測図（1/3）

１ＳＰ22（Ｆｉｇ.72）

石器

砥石（11）安山岩製の石で外面に焼成を受けいるが、一面研ぎ面として使用されている。現存長15.6cm、幅11.8cm、厚さ9.1cm重さ2.60ｋｇを測る。



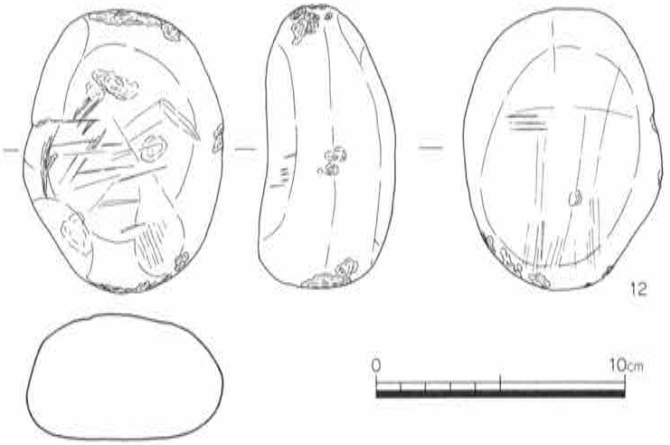
Ｆｉｇ.72（Ａ区）１ＳＰ22出土石器実測図（1/3）

１ＳＤ25（Ｆｉｇ.73～75）

石器

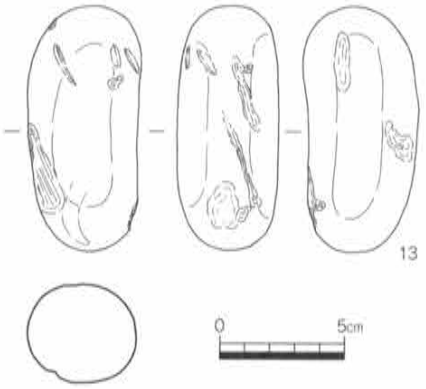
磨石（12）安山岩製の磨石である。風化が著しいため全面に使用痕は判らないが、確実に一面すっている可能性がある。もう一つは、両側面に線刻が観察される。現存長11.2cm、幅5.1cm、厚さ5.0cm、重さ665ｇを測る。

敲石（13）安山岩製の敲石である。風化が著しいため上下両端部に見える加工について、はっきり判らないが若干凹凸が認められるため、敲石として使用した可能性がある。現存長9.7cm、幅4.0cm、厚さ3.9cm、重さ265ｇを測る。

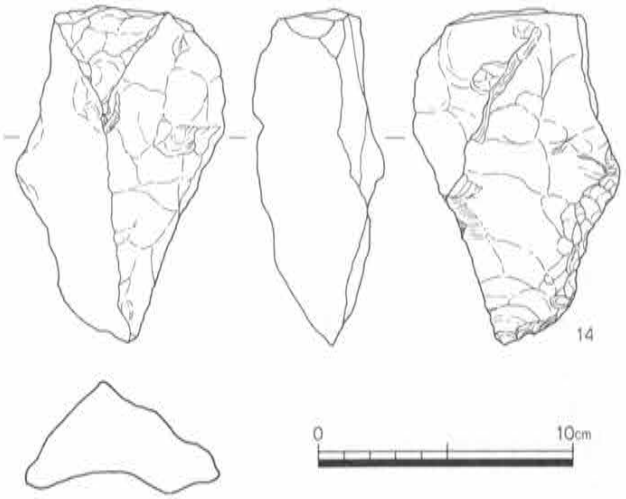


Ｆｉｇ.73（Ａ区）１ＳＤ25出土石器実測図①（1/3）

石器（14）全体が自然面と考えられるが、周りに比べて稜も剥離面もシャープであり先端部は加工されているようである。礫石器と思われるが、自然石である可能性もあるため参考資料として提示している。現存長13.2cm、幅7.3cm、厚さ3.7cm、重さ390ｇを測る。



Ｆｉｇ.74（Ａ区）ＩＳＤ25出土石器実測図②（1/3）



Ｆｉｇ.75（Ａ区）ＩＳＤ25出土石器実測図③（1/3）

１ＳＤ25・5層（Ｆｉｇ.76・77）

石製品

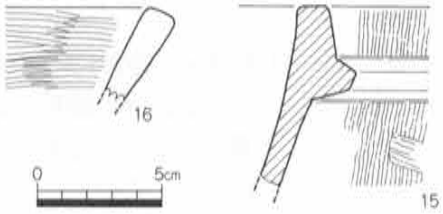
滑石製石鍋（15）器壁が厚く鍔上面の削り出しが明瞭である。森田分類Ｃ群の範疇に入るものである。

瓦質土器

土鍋（16）内外面は、暗灰色を呈し、白色粒子を少量含む。外面全体に煤が付着し、内面には、刷毛目調整が残る。焼成は良好である。

石器

敲石（17）安山岩製の敲石の可能性がある。敲打痕は風化が著しいためはっきり判らない。参考資料として提示した。現存長3.9cm、幅3.2cm、厚さ2.2cm、重さ30ｇを測る。

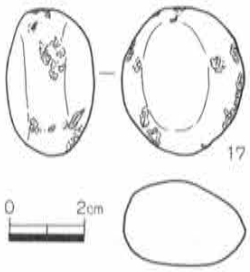


Ｆｉｇ.76（Ａ区）ＩＳＤ25・5層出土土器・石製品実測図①（1/3）

１ＳＫ30（Ｆｉｇ.78・79）

石器

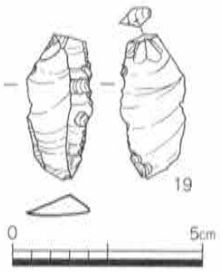
石錘（18）安山岩製の石器で石錘として使用している。扁平な礫を加工して上下端に抉りをいれている。下端部については敲打痕が行われており敲石として使用した可能性もある。
現存長7.5cm、幅5.1cm、厚さ2.6cm、重さ120ｇを測る。



Ｆｉｇ.77（Ａ区）ＩＳＤ25・5層出土石器実測図②（1/2）

Ｆｉｇ.78（Ａ区）ＩＳｋ30出土石器実測図①（1/3）

ナイフ形石器（19）不定形剥片を素材として一部自然面を残す。上下両面部を中心に向う剥離を行い刃部を使用したと思われる。端部について細かな加工が行われている。また、良質の黒曜石を使用している。
現存長3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ3.0ｇを測る。

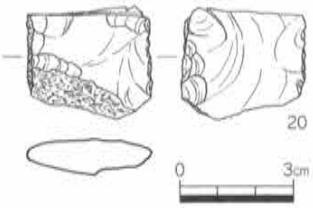


Ｆｉｇ.79（Ａ区）ＩＳＫ30出土石器実測図②（1/2）

１ＳＫ30・2層（Ｆｉｇ.80・81）

石器

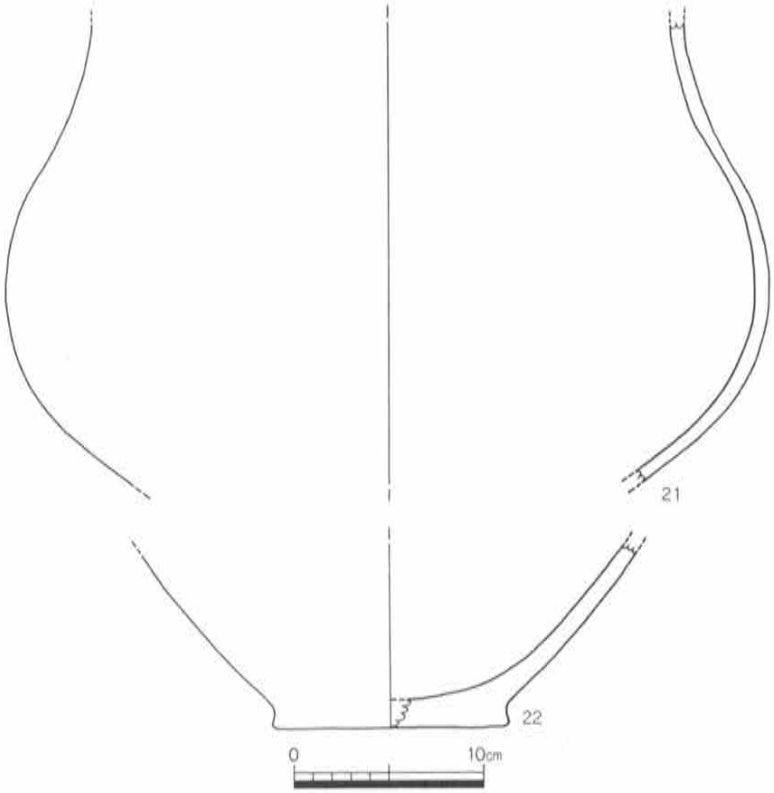
スクレイパー（20）サヌカイト製のスクレイパーである。剥離した無調整な面を加打し、小型の石刃を素材としている。両側基部縁に刃潰し加工を行っている。また、両側縁端部から胴部にかけて刃こぼれが認められる。現存長2.9cm、幅3.7cm、厚さ0.9cm、重さ11.4ｇを測る。



Ｆｉｇ.80（A区）１ＳＫ30・2層出土石器実測図①（1/2）

弥生土器

壺（21）胴部の一部で内外面磨滅が著しいため調整不明である。内外面は、橙茶色を呈し、白色粒子を多量含む。焼成はやや良好である。**甕**（22）復原底径11.6cmを測る。調整は磨滅が著しいため不明である。内外面は、淡橙色を呈し、白色粒子を多量含む。焼成はやや良好である。

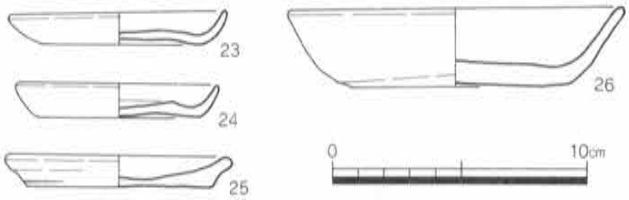


Ｆｉｇ.81（A区）１ＳＫ30・2層出土土器実測図②（1/4）

１ＳＴ35（Ｆｉｇ.82）

土師器

小皿（23）口径8.7cm、器高1.3cm、底径6.3cmを測り、底部は糸切り調整である。内外面は、淡橙色を呈し、金雲母を微量含む。また、内面に小動物によるものと思われる細かなキズが観察出来る。焼成は良好である。**小皿**（24）口径8.1cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測り、底部は糸切り調整である。内外面は、淡茶色を呈し、金雲母を微量含む。また、内外面に小動物によるものと思われる細かいキズが多く確認出来る。焼成は良好である。**小皿**（25）口径9.0cm、器高1.3cm、底径7.4cmを測り、底部は糸切り調整後、板状圧痕が残る。内外面は、淡橙色を呈し、金雲母を微量含む。また、内面に小動物によるものと思われる細かいキズが確認出来る。焼成は良好である。**坏**（26）口径13.4cm、器高3.2cm、底径8.7cmを測り、底部は糸切り調整後、板状圧痕が残る。内外面は、淡乳色を呈し、金・黒雲母を微量含む。また、内外面に小動物によるものと思われる細かいキズが多く確認出来る。焼成は良好である。

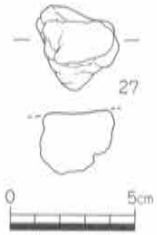


Ｆｉｇ.82（A区）１ＳＴ35出土土器実測図（1/3）

１ＳＫ40（Ｆｉｇ.83）

土師器

手づくね土器（27）胎土は赤色粒子を多量含む。焼成は良好で堅固である。不明土製品。



Ｆｉｇ.83（A区）１ＳＫ40出土土器実測図（1/3）

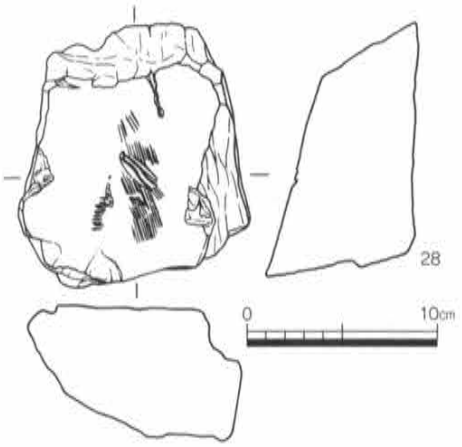
１ＳＤ50（Ｆｉｇ.84～86）

石器

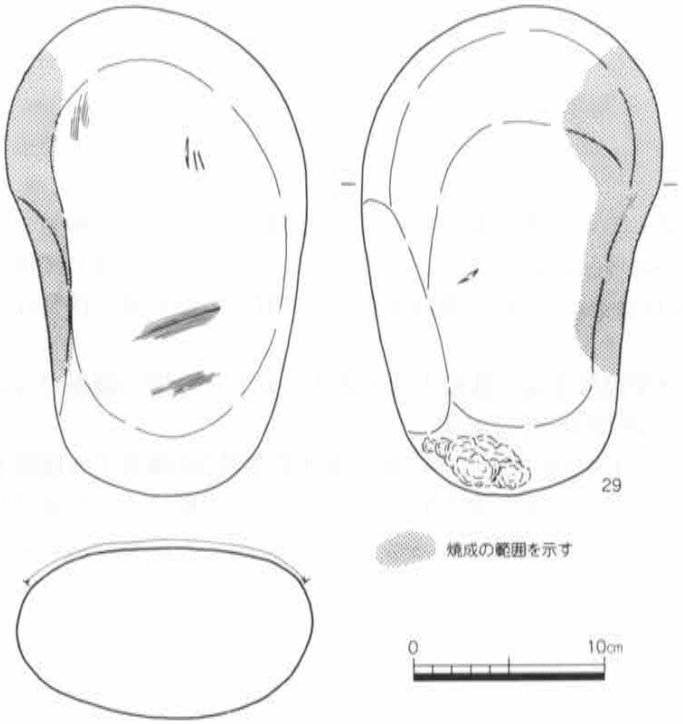
砥石（28）変磨岩製の砥石である。1面のみ使用痕が認められる。現存長13.3cm、幅11.2cm、厚さ6.7cm、重さ1.46kgを測る。

磨石（29）安山岩製の磨石である。2箇所に磨面があり、火を受けて石変した部分がある。現存長25.5cm、幅15.6cm、厚さ8.9cm、重さ5.60kgを測る。

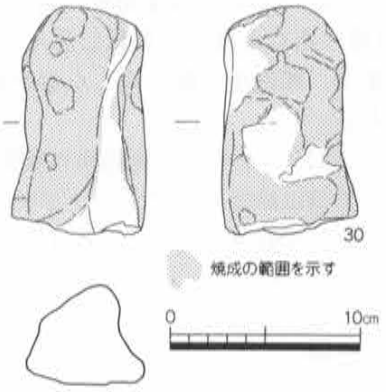
石器（30）安山岩製の石で全面焼成を受けいる。参考資料として提示した。現存長7.8cm、幅5.1cm、厚さ2.6cm、重さ1.00kgを測る。



Ｆｉｇ.84（Ａ区）ＩＳＤ50出土石器実測図①（1/4）



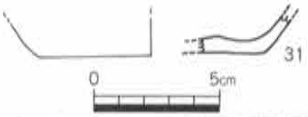
Ｆｉｇ.85（Ａ区）ＩＳＤ50出土石器実測図②（1/4）



Ｆｉｇ.86（Ａ区）ＩＳＤ50出土石器実測図③（1/4）

１ＳＤ50・2層（Ｆｉｇ.87）

土師器



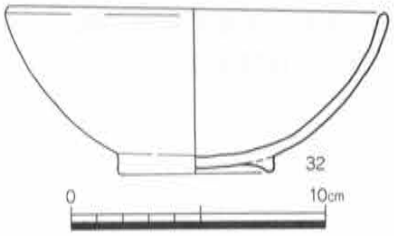
Ｆｉｇ.87（Ａ区）ＩＳＤ50・2層出土土器実測図（1/3）

坏（31）復原底径9.0cmを測る。内外面は、淡乳色を呈し、白色粒子を微量含む。磨滅のため調整が不明な所があるが、底部は糸切り調整である。焼成は良好である。

１ＳＤ50・4層（Ｆｉｇ.88）

土師器

椀（32）復原口径15.2cm、器高6.0cm、復原底径6.0cmを測る。内外面の調整は磨滅が著しため調整不明。内外面は、淡茶褐色を呈し、砂粒を多量含む。焼成は不良である。また、器形は瓦器椀と似通っており、模倣品ではないかと思われる。



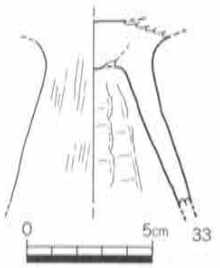
Ｆｉｇ.88（Ａ区）ＩＳＤ50・4層出土土器実測図（1/3）

B区（33）

1ＳＤ55（Ｆｉｇ.89）

土師器

高坏（33）高坏の脚部の一部で、外面は、縦刷毛目、内面は、削りからナデ調整である。内外面は、乳白色を呈し、黒・金雲母を微量含む。焼成は良好である。古墳時代の所産であろう。



Ｆｉｇ.89（A区）1ＳＤ55出土土器実測図（1/3）

4.小結

調査区内は後世の撹乱等のためかなり破壊を受けいたが、主に弥生～中世にかけての遺構が認められた。

検出遺構について

1ＳＸ05は、後世の削平、撹乱等で溝が全周してないが、溝が巡ることを考慮すれば、竪穴住居の壁溝と考えることも可能であろう。また、板材を用いた簡単な仮小屋か納屋的な構造物も想定出来るだろう。しかし、溝に囲まれた空間に柱は確認されておらず、周辺のＰｉｔもすべて撹乱であった。出土遺物も皆無であり、時期決定に至らなかった。

1ＳＫ20、1ＳＤ25は遺構検出時に1ＳＫ20が切っている事が確認出来た。土層断面実測図から検討すると、1層に当たる部分は皿状に窪んで堆積している（1ＳＫ20）。また、長軸方向に土層ベルトに残して調査した結果、埋没中に掘り直した事が判った（1ＳＤ25→1ＳＤ50）。溝は調査区外に延びるため溝の性格は不明である。

1ＳＴ35について出土遺物から検討すると、13世紀前半頃に該当すると考えられる。今回の調査では同時期の墓壙は確認されておらず単独で存在する。詳細は後述に記す。

（B区）で検出した1ＳＤ55は自然流路であり、平成9年度に行った鶴田東大坪遺跡2次調査でも確認されている。2次調査では、上層～中層にかけては近世～中世の遺物が含まれている。下層は、土師器が出土している。磨滅が著しいため、時期決定に至っていないが、恐らく、1次調査と同じく古墳時代に相当する遺物であると思われる。

出土遺物について

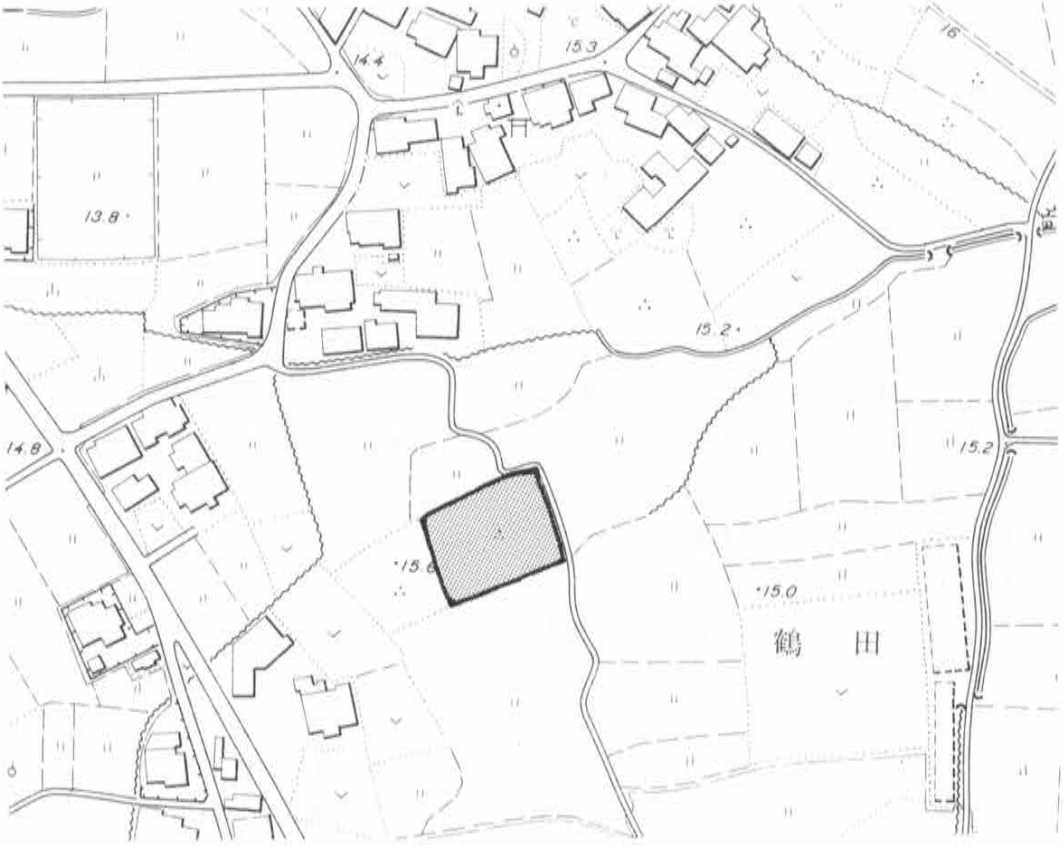
1ＳＫ15から1点ではあるが、突帯文系土器の甕片が出土している。周辺の遺跡から僅かに確認されている出土遺物であり、今後資料の増加を待って検討したい。また、1ＳＫ15から軽石、1ＳＫ30から石錘が出土している。軽石は浮子の可能性も考えられる。とすれば、縄文時代の主要な生産活動の一つである漁業等の存在も考えられる。周辺の調査から縄文時代の落とし穴状遺構や石組み炉（集石遺構）が確認されている事を考えると縄文時代の集落の存在も示唆出来るだろう。

次に、石器類の中に焼成を受けているものが多く出土している。用途は不明であるがＰｉｔなどから出土したものは根石等に使われたものであろうか？また、1ＳＤ25から出土した石器の中で礫石器と思われる石が1点出土している。立花町に所在する白木西原遺跡Ⅱで詳しく述べられているためここでは触れないが、共通する点のみ述べたい。まず、年代的な位置付けの問題と生活遺構が見られない事が挙げられる。今後、資料の増加を待って検討される遺物である。遺跡は周辺に展開すると思われるため、今後の調査状況を含めて検討を行いたい。

第4節　鶴田野田遺跡

1.はじめに

鶴田野田遺跡は、筑後市大字鶴田字野田982に所在し、標高約14.5mの低位段丘に位置する。試掘結果を基に面の削平予定地の約1300㎡を調査対象とした。検出した遺構は、溝4条、Ｐｉｔを検出した。しかし、ブドウ畑、茶畑などの際の耕作の撹乱のため多くの遺構が破壊もしくは損傷されていた。調査は、柴田が担当した。なお、出土遺物については、若干出土していたが、粉失したため報告出来なかった事を遺憾に思う。調査期間は平成8年11月25日～同年12月27日の間で実施した。以下、遺構について説明する。

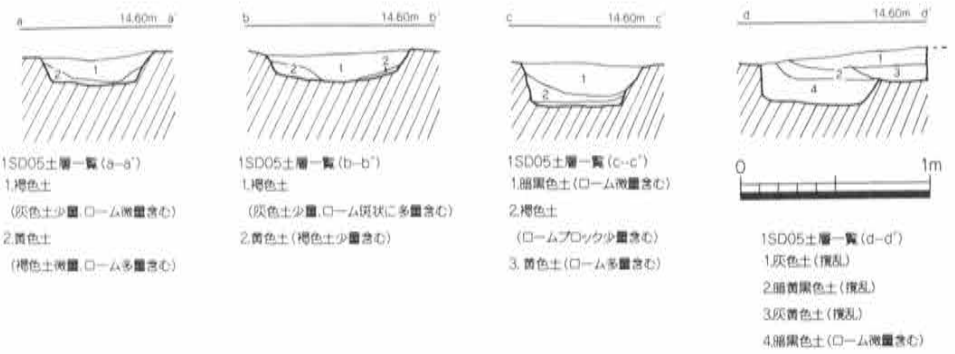


Ｆｉｇ.90 鶴田野田遺跡調査地点位置図（1/2.500）

2.検出遺構について

1ＳＤ05（Ｆｉｇ.91）

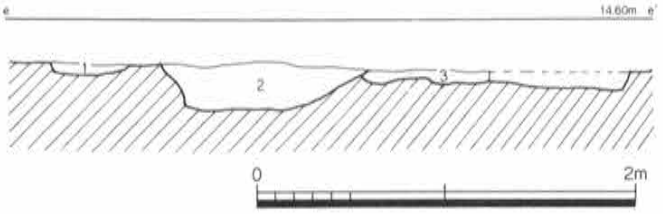
調査区南に位置し東西に延びる溝である。検出長約42.0m、幅0.68～1.05m、深さ0.14～0.37mを測る。埋土は、褐色土、黄色土の2層に分かれる。溝は、西に行くにつれやや深くなる。



Ｆｉｇ.91 1ＳＤ05土層断面実測図（1/40）

1ＳＤ07（Ｆｉｇ.92）

調査区北に位置し、1ＳＤ08の撹乱に切られる。検出長約6.00m、幅0.21～0.90m、深さ0.07～0.10mを測る。埋土は、暗灰色土の単1層である。溝の底面は平らである。

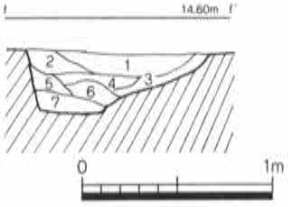


1SD07·1SD08土層一覧（e–e'）
1.明灰色土（1SD07） 2.灰色土（1SD08撹乱） 3.明灰色土（撹乱）

Ｆｉｇ.92 1ＳＤ07・1ＳＤ08土層断面実測図（1/40）

1ＳＤ10・1ＳＤ15（Ｆｉｇ.93）

調査区北北東に位置し、検出長約15.0mを測る。1ＳＤ10は土層断面図1～6層に当たり、幅0.58～1.18m、深さ0.27mを測る。1ＳＤ15は幅0.52～0.88m、深さ0.23～0.41mを測る。溝の底面は若干の凹凸が認めらた。



1SD10·1SD15土層一覧（f–f'）
1.暗黒色土
2.茶色土
3.茶黄色土（ローム多量含む）
4.灰黄色土
5.灰色土
6.黄茶色土（ローム多量含む）
7.暗茶黒色土（ローム微量含む）
1～6（1SD10）
7（1SD15）

Ｆｉｇ.93 1ＳＤ10・1ＳＤ15土層断面実測図（1/40）

その他、Ｐｉｔや撹乱から遺物が出土したため番号をつけて取り上げた。また、遺物が出土しなかったが、番号をつけた遺構もある。

1ＳＤ01（Ｆｉｇ.94） 南北に延びる撹乱の溝である。
1ＳＰ02（Ｆｉｇ.94） Ｐｉｔである。
1ＳＰ03（Ｆｉｇ.94） Ｐｉｔである。
1ＳＰ04（Ｆｉｇ.94） Ｐｉｔである。
1ＳＰ06（Ｆｉｇ.94） Ｐｉｔである。
1ＳＤ08（Ｆｉｇ.94） 撹乱の溝で1ＳＤ07を切る。

3.小結

調査区内の遺構は、以前、茶畑として使用されていたため、削平や撹乱を受けている。そのため、詳しい状況がつかめなかった。調査区内からＰｉｔを検出しているが、遺構として認識出来たものは少ない。また、遺物が粉出したため時期の特定が出来ないが、中世の遺物が出土していたと記憶している。今後、周辺の調査の状況を含めて検討を行いたい。

Ｆｉｇ.94 鶴田野田遺跡遺構全体図（1/300）

第5節　考察

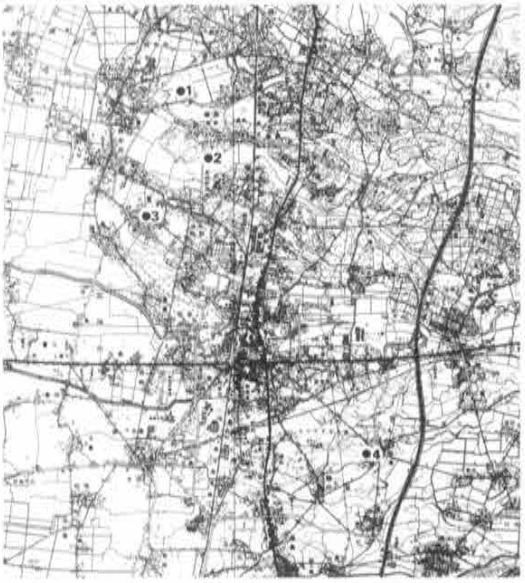
(1) 鶴田西畑遺跡（A区）1SI10竪穴住居と筑後市内の竪穴住居との比較及び近隣の状況

筑後市内における竪穴住居は現在、縄文時代から平安時代初頭頃まで数多く確認されている。今回の調査地点である鶴田西畑遺跡（A区）から古墳時代中期の竪穴住居を検出した。市内における同時期頃（若干前後も含む）と思われる竪穴住居を比較検討してみたい。

まず、240軒以上の竪穴住居を検出した蔵数森ノ木遺跡が挙げられる。該当する竪穴住居は森ノ木Ⅷ期の10軒に相当する（27住・38住・57住・68住・84住・90住・126住・140住・172住・196住）。

次に、22軒の竪穴住居を検出した田佛遺跡が挙げられる。その中で古墳時代中期に当たる14軒のうち7軒が相当する（2住・6住・11住・14住・16住・21住・22住）。

更に、久富鳥居遺跡の1軒が相当する（030住）。合計18軒である。（以下、蔵数森ノ木遺跡を森、田佛遺跡を田、久富鳥居遺跡を久とする。）



1.田佛遺跡　2.蔵数森ノ木遺跡
3.久富鳥居遺跡　4.鶴田西畑遺跡

Fig.95 筑後市における5世紀前半頃の竪穴住居分布図（1/100,000）

ここに挙げた全ての竪穴住居に共通していることは、カマド付設、須恵器を伴わない時期である。
住居形態は正方形・長方形プランの2形態に分かれる。
柱穴は基本的に4本柱である。炉は5軒確認されている。（田6住・田14住・森27住・森126住・森196住）屋内土壙については10軒の竪穴住居に確認されている。（田2住・田6住・田11住・田14住・森27住・森84住・森140住・森196住・久030住）周溝については、田佛遺跡と久富鳥居遺跡で全て確認されているが、蔵数森ノ木遺跡では確認されていない。間仕切り溝については、田佛遺跡の4軒で確認されている。（田2住・田6住・田11住・田14住）出入り口と思われる階段状遺構が久富鳥居遺跡1軒確認されている。また、張り出し部を付設する竪穴住居1軒を（森90住）で確認されている。以上の結果を照らし合わせて鶴田西畑遺跡（A区）と比較してみると、竪穴住居の規模（立て替え含む）は田佛遺跡の6住・11住に次ぐ3番目の規模となる。竪穴住居の構造について見ると、田佛遺跡2住・6住・11住・14住は周溝、間仕切り溝の内側に屋内土壙が設けてある点と大型住居である点が鶴田西畑遺跡（A区）と共通する特徴であると言える。筑後市内における、大型住居の特徴として周溝、間仕切り溝の内側に屋内土壙を設けることがセットになっている。この現象は、筑後市に限ったことではなく普遍的に見られることである。また、柱穴は4本柱、炉は屋内にあり、住居形態は正方形・長方形プランが混在していることが挙げらる。立地に目を向けて考えると、蔵数森ノ木遺跡は標高12mの八女丘陵の南斜面に位置している。田佛遺跡は、八女丘陵から延びる舌状台地にあり標高9.5mに位置している。久富鳥居遺跡は標高11mの低位段丘上に位置している。鶴田西畑遺跡（A区）は標高15mの低位段丘上に位置している。現段階では、八女丘陵に近い場所に集落が展開している様であり、鶴田西畑遺跡（A区）は八女丘陵から離れた位置に存在する。また、近隣の八女市、瀬高町、広川町、三潴町の5世紀前半頃の竪穴住居の状況はついて述べる事にする。

八女市では、5世紀前半頃の竪穴住居の検出例は少なく、古墳前期やカマドが出現し始める5世紀中頃～後半と6世紀中頃～後半に竪穴住居は増加しているようである。広川町でも同じような傾向が指摘出来るが、5世紀前半の竪穴住居の発掘調査例は今のところ報告されていない。瀬高町、三潴町では、5世紀前半からカマドが付設する竪穴住居が報告されている。筑後市、八女市、広川町とは異なっている状況が指摘出来る。今後、八女丘陵周辺ならび低地における発掘調査の増加を待って集落の動向や立地、古墳造営など含めて検討していく必要があろう。

Ｔａｂ.1　筑後市内の5世紀前半頃の竪穴住居一覧表

遺構番号	形　態	南北長(m)	東西長(m)	壁　高(m)	柱	周溝	炉	屋内土壙	間仕切り溝	備　　考
田佛2号住	正方形	6.65	6.90	0.50	4	○	—	○	○	焼失住居(炭化材、灰含む)
田佛6号住	正方形	9.75	9.70	0.35	4	○	○	○	○	建て直し(炭化物含む)
田佛6号住	正方形	8.90	8.70	—	4	○	○	○	○	建て直し前
田佛11号住	長方形	9.30	8.10	0.50	4	○	○	○	○	
田佛14号住	正方形	5.80	6.10	0.55	4	○	○	○	○	炭化材、灰含む
田佛16号住	長方形	4.60	3.80	0.50	2	○	—	○	—	炭化材含む
田佛21号住	長方形	7.65	5.90	0.50	2	○	—	—	—	
田佛22号住	正方形	4.45	4.72	0.45	4	—	—	○	—	
森ノ木27住	長方形	6.10	4.30	0.15	4	—	○	○	—	
森ノ木38住	正方形?	—	—	—	—	—	—	—	—	詳細は不明
森ノ木57住	正方形	—	—	—	—	—	—	—	—	詳細は不明
森ノ木68住	正方形	—	—	—	4	—	—	—	—	詳細は不明
森ノ木84住	正方形	—	—	—	4	—	—	○	—	詳細は不明
森ノ木90住	正方形	5.80	5.90	0.10	4	○	—	—	—	張り出し部有り
森ノ木126住	長方形	5.90	6.60	0.30	4?	—	○	—	—	炉は2箇所有り
森ノ木140住	正方形	6.15	6.50	0.20	4	—	—	○	○	屋内土壙2段掘り
森ノ木172住	正方形	5.30	5.70	0.20	4	○	—	—	—	
森ノ木196住	正方形	5.60	5.90	0.20	4	—	○	○	○	
久鳥030住	正方形	5.30	5.50	0.40	4	○	—	○	○	周溝内に柱穴、階段状の出入口ベッド状遺構有り
西畑1SI10	長方形	6.15	7.16	0.28	4	○	○	○	○	報告書参照
西畑1SI20	長方形	2.65	4.10	0.24	—	○	—	○	—	報告書参照

ここに掲載した数値は報告書に記載されている最大値である。南北長、東西長については一部改変している。○有、—無を示す。

(2) 鶴田西畑遺跡（Ａ区）出土遺物と出土状況について

鶴田西畑遺跡（Ａ区）竪穴住居1ＳＩ10からパンコンテーナ8箱におよぶ多量の土器が出土した。その内訳は、実測可能土器や破片土器を見積もって1個体として加算して見ると、甕25個体以上、小型丸底壺20個体以上、高坏20個体以上、鉢10個体以上、手づくね土器や不明土製品類40個体以上と言った総数に及んでいる。祭祀遺物と日常使われたと考えられる土器と分けた場合の比率は、3対7位の割合でないかと思う。（この数字の比率は、土器選別や実測遺物から得られた感覚的なものであり、正確な数字ではない。）出土状況については、1ＳＩ10出土が多く含まれている。

次に遺物について説明する。

小型丸底壺

口径7.0～8.0cm台と9.0cm台の二種類に分けられ、口径が胴部最大径より小さいもの、口径が胴部最大径より大きいもの、底部は平底に近いもの、尖り気味の2種類に分かれる。口縁部については、長く外反するもの、短く外反するもの、直立気味に立ち上がる3種類に分かれる。その中でも、焼成前に胴部穿孔しているのが含まれている。また、実測出来なかったが、同じく胴部穿孔しているものが1点含まれている。この2点は何れも、甑を模倣したものと思われる。今回の出土した小型丸底壺は祭祀具として使用されたものであると考えられる。

高坏

坏部の口径は、14.0cm台、16.0～17.0cm台、18.0～20.0cm台の3種類に分けられ、坏部は、浅いタイプと深いタイプの2種類があり、屈曲部で明瞭な段があるもの、段をもたないものの2種類がある。口縁部は直線的に開くもの、口縁端部で更に外反するもの、内湾気味に立ち上がる3種類に分かれる。脚部はスカート状に開くもの、ゆるやかに開くもの、裾部で稜があるもの、ないものの4種類に分けられる。これらの遺物も祭祀「まつり」に使用した遺物であろう。また、床面出土遺物については、坏部は伏せられた状態、脚部は床面に接した状態での出土であった。坏部、脚部は接合するものはなく、それぞれ単独である。これらも、祭祀行為の一環としての現象であろうか。

甕

口径11.0～13.0cm台、14.0～16.0cm台、17.0～18.0cm台の3種類に分けられる。特に14.0cm台が多い。口縁部は「く」字状に外反するもの、直立気味に立ち上がるもの、微妙な凹凸を見せながら外反する3種類がある。口縁部と体部の境は、なだらかものなものと稜が入るもの、器壁が厚い、薄い2種類がある。胴部最大径が口縁より大きく、球胴形で丸底のものが占めている。

鉢

口径12.0～14.0cm台、15.0～16.0cm台の2種類に分けられる。口縁部は短く外反するもの、緩やかに外反するもの、内湾する3種類がある。丸味のある胴部で丸底のものが占める。

鉄製方形鋤先

Ｔａｂ.2の一覧表に示した通り、竪穴住居からの出土例に限って言うならば、新しい時期に属する遺物である。方形からＵ字型へ移行する直前の資料である。また、この時期に該当する竪穴住居からの出土例は非常に珍しいと言える。出土状況については、1ＳＩ10としているが、調査作業員から聞きとったり話によると、（Ｆｉｇ.2）の（図ｍ）で示した斜線部分の南東部からの出土であり、南東部でも隅であると言う。この遺物に関して、床面より若干浮いた状況であったようで、床面出土遺物と判断しても良い遺物であると思われる。

不明土製品

不明土製品と称した遺物の共通点として、焼成は良好で堅固であるものが多く、表面に藁状圧痕が認められるものが多く含まれる。形は不定形なものが多い。これらの遺物は、「祭祀」と関連する遺跡からの出土例が多いため、祭祀と関連する遺物と解釈出来る。今回の調査での不明土製品は、祭祀を行うに当たり、お供えものを抽象化したものではなかろうか。

手づくね土器・土製人形

竪穴住居から多数の手づくね土器（ミニチュア土器）が出土している。それらは、祭祀に用いらた祭祀具であると考えられている。その中で最も注目したい遺物は、人の形を模倣したと思われる遺物である。今回の報告では、「土製人形」として報告する。現在、土製人形と称される遺物は、弥生時代から出土例が知られている。出土地点は、溝、古墳の墳丘中、集落、祭祀遺構、包含層、竪穴住居など様々な形で出土している。今回報告する土製人形は、5世紀初頭～5世紀前半に位置付けられる竪穴住居からの出土例である。しかしながら、出土状況については不明であるため、1ＳＩ10覆土中の出土であるとしか言えないが、恐らく（Ｆｉｇ.2）の（図m）に示した斜線部の南東部であろう。県内の出土例の中で類似する資料として、志摩町の御床松原遺跡出土の10体が該当する。比較して見ると、御床松原出土遺跡の土製人形は、目・口・鼻が明らかに表現されているし、性器と思われる部分も表現されている。さらに、高さ、器厚も一回り大きい。また、顔に当たる部分を表とし場合、裏に当たる部分は何も表現されていない。作り方は、各部分を別々に作って接合したものではないのに対して、鶴田西畑遺跡（Ａ区）の場合は、手に当たると思われる部分だけは後から付け加えをしている事が判る。（この部分を手として考えるならばそのように言える。）相違点として、鶴田西畑遺跡（Ａ区）の土製人形は明瞭に目・口・鼻が表現されておらず、指押さえによって鼻に当たる部分を表現しているかのようである。表か裏か判らないが、指押さえによる調整が両方に確認出来るため表裏の区別が付かないし、体の前後も判からない。（今回は、一応鼻と思われる部分を表として報告することにした。）

共通点として、胴下部はどちらも「足」が表現されていない。そのため、裾広がりで安定感がある作りである。また、基底面に剥離した痕跡は認められないため、土器などに取り付けられたものではないことが言える。御床松原遺跡では、祭壇を設けて供えたものと考えられているため、鶴田西畑遺跡（Ａ区）の土製人形にも同様に考えられるのでないかと思われる。何れにしても、この土製人形は祭祀的遺物であることは間違いないものであろう。その他、手づくね土器の出土地点についても同様に（Ｆｉｇ.2）の（図m）に示した斜線部の南東部から集中して出土しており、出土状況も床面出土や北3層に対応するレベルでの出土が多くあったと聞いた。残り部分の調査から検討して見ても、北1～3層に多量の土器が含まれているためこの部分で間違いないと考える。

今回の報告は土製人形として報告するが、人形として良いかどうかと言う問題も今後、検討しなければならないであろう。

最後に鶴田西畑遺跡（Ａ区）1ＳＩ10出土遺物の豊富さ且つ、土製人形を含む祭祀遺物、鉄製鋤先などが出土し、今後、竪穴住居における祭祀と言う新たな問題を考える資料になるであろう。

Ｔａｂ.2 福岡県内における竪穴住居出土の方形鋤先一覧表

遺跡名（市町村）		遺構番号	時期	参考文献	
狐塚遺跡	（筑後市）	1号住	弥生終末	筑後市教育委員会	1970
三雲遺跡Ⅱ	（前原市）	18号住	弥生終末	福岡県文化財調査報告書第60集	1981
小田道遺跡	（甘木市）	46号住	弥生後半	甘木市文化財調査報告書第8集	1981
上々浦遺跡	（甘木市）	4号住	弥生後半～終末	九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告書－1－	1982
西新町遺跡	（福岡市）	住居覆土	弥生終末？	福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集	1982
上椎遺跡	（嘉穂町）	5号住	弥生終末	嘉穂町文化財調査報告書第3集	1984
松木遺跡Ⅰ	（那珂川町）	35号住	弥生終末	那珂川町文化財調査報告書第11集（下巻）	1984
犬竹遺跡	（三輪町）	38号住	弥生後期前～中葉	三輪町文化財調査報告書第4集	1985
三雲遺跡（南小路地区編）	（前原市）	2号住	弥生終末	福岡県文化財調査報告書第69集	1985
乙隈天道遺跡	（筑紫野市）	3号住	弥生終末	福岡県文化財調査報告書第86集　上巻	1989
同上		5号住	弥生後期	同　上	
同上		7号住	弥生終末	同　上	
同上		52号住	弥生終末	同　上	
同上		86号住	弥生終末	同　上	
同上		92号住	弥生終末	同　上	
同上		93号住	弥生後葉～終末	同　上	
同上		103号住	弥生終末	同　上	
上清水遺跡Ⅱ区	（北九州市）	16号住	弥生終末	北九州埋蔵文化財調査報告書第100集	1991
室岡工業団地遺跡Ⅰ	（八女市）	56号住	弥生終末？	八女市文化財調査報告書第27集	1993
仮塚南遺跡	（筑紫野市）	66号住	弥生終末	筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集	1995
飯倉D遺跡	（福岡市）	SC－246	弥生後期～終末	福岡市埋蔵文化財調査報告書第440集	1995
平塚山の上遺跡Ⅰ	（甘木市）	SH084	弥生後期～終末	甘木市文化財調査報告書第36集	1996
切杭遺跡	（夜須町）	5号住	弥生終末	夜須町文化財調査報告書第36集	1997
以来尺遺跡Ⅰ 上巻	（筑紫野市）	17号住	弥生終末	筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集	1997
森山西遺跡Ⅳ区	（北九州市）	18号住	弥生後期～終末	北九州埋蔵文化財調査報告書第218集	1998
上津・藤光遺跡群Ⅱ	（久留米市）	SI101	弥生終末	久留米市文化財調査報告書第145集	1998

尚、筑後市所蔵の文化財報告書に限っているため、漏れもあると思われるがご了承願いたい。

(3) 鶴田西畑遺跡（A区）1SI10・1SI20竪穴住居及び屋内施設について

鶴田西畑遺跡（A区）の竪穴住居1SI10は、調査区を拡張した結果、初めて竪穴住居が切り合っている事が判った。

まず、1SI10から説明する。南北（短軸）6.00～6.15m、東西（長軸）7.00～7.16m、壁高0.15～0.28m、周溝の幅0.07～0.18m、深さ0.02～0.15mを測る。住居形態は、長方形である。また、北東隅の一部は1SI20に切られるため確認出来なかったが、テラスが4周巡っている。柱穴は4本柱で、竪穴住居の4隅を結ぶ対角線状にほぼ沿う位置に柱穴が配置されている。柱穴間は東西3.05～3.30m、南北3.05～3.25m、深さ0.43～0.54m、底径0.14～0.15mを測る。

次に、1SI20について説明する。1SI10に切られる竪穴住居である。規模を復原してみると、南北（短軸）2.21～2.65m、東西（長軸）3.75～4.10m、壁高0.13～0.24m、周溝の幅0.01～0.21m、深さ0.01～0.09mを測る。住居形態は、長方形である。また、北にベッドを付設する。ベッドは地山削り出しではなく、暗茶土と明茶土を約10.0cm程積んでいる事が確認出来た。Pitは確認出来なかったが、屋内土壙と考えられるPitを確認した。この2軒の竪穴住居を遺物から判断した場合、時間差は認められなかった。そのため、竪穴住居廃絶から土器廃棄までの時間差はないと考える。

次に竪穴住居の屋内施設について検討する。

間仕切り溝について

何らかの目的によって掘られたものであり、竪穴住居内を狭く仕っていたものであると考えられるが、溝の内側に屋内土壙を設けてある場合は、木蓋を固定するために掘られたものかもしれない。しかし、今回の調査では、それらの状況を検証出来なかった。

炉について

遺構検出時は、赤色化を呈していて床面から僅かに掘り窪めているのが確認出来た。そのため、「炉跡」とした。焼土は、埋土中のみに認められたにすぎず、地山面までは及んでいない。炉は竪穴住居に対しては、非常に小さく、日常の生活で頻繁に使用したとは思えず、一時的に使用したのではないかと思われる。遺物の甕に注目して見ると、煮炊きに使用したと考えられる甕は、外面全面に煤が付着するもの、胴部中位～下半に煤が付着するもの、底部付近のみに煤が付着するものがある。また、煤の付着を観察すると、厚く付着するものと、あまり付着していないものに分かれる。そのため、炉に直接おいて火を受けたものと、支脚などを使用したものがあると思われる。出土遺物から支脚は出土しているが、火を受けている様子は見られない。他の土器を代用した様子も出土遺物から認められない。また、炉の周辺には炭や灰が散らばっている状況は確認されていない。炉と甕とでは様相が異なっているため、甕は竪穴住居廃絶に伴って廃棄した遺物であると考えられる。

屋内土壙について

屋内土壙についての解釈は、色々な考え方がある。1SI10竪穴住居から3基、ISI20竪穴住居から1基の屋内土壙を確認した。1つは、間仕切り溝内にある土壙（Pit7）とその反対側にある土壙（Pit5）、間仕切り溝のすぐ北にある土壙（Pit6）である。間仕切り溝と切り合いがあるため3基同時期にあったのでなく、おそらくPit5・Pit7とPit6と分かれる。出土遺物について、Pit5は高坏の坏部、Pit6は不明土製品、甕、Pit6・6層は手づくね土器の椀が出土した。この椀は焼成後、胴部から穿孔が打たれている。Pit7からは出土遺物はなかった。出土遺物は、何も住居廃棄に伴って流れ込んだ遺物と思われる。また、それぞれの屋内土壙の深さについて、Pit5は0.73m、Pit6は0.68m、Pit7は0.43m、Pit12は0.69mを測る。以上、検出した4基の屋内土壙についての性格判らなかったが、Pit7以外の屋内土壙の深さが、ほぼ同じである事が指摘出来るだろう。

今後、自然科学分析や出土遺物状況等を考えることで、屋内土壙の機能や性格について新たな解釈も生まれて来ると思われる。

床（硬化面）について

床面は全面に硬く、特にテカテカとした光沢が見らる範囲を確認した。この部分は他の床面より非常に硬い部分で硬化面とした部分である。人がどのように行動したかを示す範囲であり、重要であると考えられる。1ＳＩ10竪穴住居では、右半分に集中している。

小柱穴（杭痕跡）について

鶴田西畑遺跡（Ａ区）1ＳＩ10の竪穴住居からは、周溝内に小柱穴が部分的に確認された。これは、杭痕跡と思われる。しかし、断ち割りを行ったわけでもなく埋土状況のみで判断した。杭痕状況を見てみると、北側で2個、南側で3個確認した。東側は周溝内にはなく、周溝の内側に規則的に並ぶ。西側には2個小柱穴が認められる（Ｆｉｇ.2）。このような状況から、周溝内の小柱穴は壁体保護のため打ち込まれたと考えても良いのではなかろうか。周溝の内側の小柱穴も同様のことが言えるのではなかろうか。西側に関しては、出入り口と推定している位置に楕円形を呈する遺構があり、そこの位置には小柱穴（杭痕跡）は認められない。検出した杭痕跡の深さもばらつきがあるため検討が必要であろう。

しかし、堆積状況を見る限り、自然堆積であるため壁体の存在は考えにくし、大型の竪穴住居を構築する際の排土の問題を考ると、周堤の存在を考えなければならないであろう。周堤が確認される状況は、火山の灰や軽石などの自然災害によって一気に埋まるような奇跡的な例外を除いて、検出が困難な遺構の一つであろう。今回の調査からは、周堤の存在はわからなかった。

出入り口について

出入り口と思われる遺構を検出した。床面から僅かに掘り込んでいて、明らかにロームブロック（明黄色土）を使って埋めた楕円形を呈する遺構である。先述した通り、小柱穴（杭痕跡）が偶然にも認められない。その楕円形を呈する遺構は、床面の部分や硬化面とは違って、さらに強い強度（踏み締められたものか）があったため、この部分を出入り口と推定した。そのため、慎重な調査を行った結果、蛇紋岩製の勾玉1点出土した。勾玉は、祭祀具であり、神を奉るための祭器である。そのため、竪穴住居建築時に伴う「地鎮祭祀」的な意味があると思われ、建築儀礼での祭祀として出入り口に埋納したと考えらるだろう。

(4) 鶴田西畑遺跡（A区）1ＳＩ10竪穴住居の復原と位置付けについて

鶴田西畑遺跡（A区）竪穴住居1ＳＩ10は遺物の出土状況が不明であるが、豊富な遺物量と伴に、祭祀遺物と言った非常に重要な遺物を含んだ竪穴住居であることは疑いない。そのため、竪穴住居復原と位置付けについて試みたい。

まず、集落から離れた微高地に大型竪穴住居を建てる。それにあたり、床面を形成するために貼床を行う。その後、出入り口に当たる場所に勾玉を埋納した。これは、建築時に伴う地鎮祭的な意味があったと推測され、建築儀礼的意味があるものと思われる。

そして、竪穴住居内に祭壇を設け土製人形をはじめとする、手づくね土器（ミニチュア）を中心に住居内で何らかの「まつり」を行う場所として、人々が頻繁に竪穴住居内に出入りしていたと思われる。そのため、床面は全体に硬く、特にテカテカした硬化面が観察出来たのであろう。出土遺物を見ると、人形は土地に取り付く悪霊を人形に移したと考えられる遺物であり、人の形代（代用品）として使用した可能性がある。また、鉄製方形鋤先については、開墾や掘削等で使用される土木用具であるため生活基盤である農耕に関係する遺物である。この事から、農耕に関する祭祀的行為があったのであろうと推測される。そうして、時間の経過と伴に、竪穴住居で行っていた「まつり」が徐々に行われなくなり、ついに廃絶状態となる。

それに伴って、「まつり」として使用された道具（土器）と日常の生活用具（土器）を代用し祭祀具として、廃絶に伴い「まつり」が行われたと推測される。破片土器が多く出土しているのは、この段階での祭祀の結果であろう。

このことは、竪穴住居建築時、竪穴使用時、竪穴廃絶時の3段階でそれぞれ「まつり」が行われたことを示しているのではなかろうか。

このような事から、古墳時代の人々の心の中には、どのような神が存在し、神に対してどのような観念を持っていたのか判らないが、祭祀「まつり」と言う行為が日常生活の一部として重要な行事であると伴に、それを行う場所も必要で且つ重要な位置付けとして存在していたのであろう。周辺で同時期の竪穴住居は存在せず、単独で存在する。立地に眼を向けると、微高地に存在しているため周辺の集落から見える場所であったと思われる。

つまり、祭祀「まつり」を行うために築かれた竪穴住居であると判断しても良いのではなかろうか。竪穴住居の覆土中（上層）から焼土や炭化物も若干認められるのは、祭祀の終焉で火を使った祭祀行為ではなかろうか。祭祀「まつり」を行うことで、「神」をなだめ、鎮める場所も必要であったろう。それは、古墳時代の人々も豊かで安定した生活を望み、願うことは、今も昔も変わらないことを表しているものと解釈できよう。

今回の発掘調査の結果、鶴田西畑遺跡（A区）竪穴住居1ＳＩ10がそれらに該当するものではなかったろうか。しかし、あくまでも推測した文章であるため、今後、周辺の調査の資料増加を期待し、この竪穴住居との比較を行い集落での位置付けを更に追求していかなければならないだろう。現時点では、農耕儀礼を中心とした祭祀場として、集落から離れた場所に存在していた竪穴住居ではないかと考える。

(5) 鶴田東大坪遺跡1次調査（A区）の1ＳＴ35について

筑後市において当遺跡とほぼ同じ時期に該当する遺跡は、蔵数森ノ木遺跡3号土壙墓（木蓋木棺墓）と高江遺跡ＳＴ50（木棺墓或いは、木蓋木棺墓）の2基が確認されている。今回調査区の関係上、全掘出来なかったが鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）から1基土壙墓（木蓋木棺墓）が確認された。合計3基である。

3基の共通する点は、何れも単独で存在する点と、埋葬施設が木蓋木棺墓であると言う点である。

副葬品および供献品の遺物を見ると、蔵数森ノ木遺跡からは白磁碗1点（Ⅳ類）、土師器小皿1点、短刀1点が出土している。

高江遺跡からは、湖州鏡1面、同安窯系青磁皿1点（Ⅰ-2類）、白磁皿1点（Ⅷ-1類）が出土している。

また、「筑後将士軍談」には、同地区から湖州鏡1面、同安窯系青磁皿1点が出土している事が紹介されている。

そして、鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）から土師器坏1点、土師器小皿3点が出土している。

比較してみると明らかな副葬品、供献品の差がある。

これが、当時の社会背景（物流）による差なのか、埋葬された人物の差なのか、葬送儀礼の差なのかは検討していく必要がある。

鶴田地区では「元屋敷」、新溝地区には「南屋敷」「東屋敷」の字名が残っており中世の屋敷の存在を窺わせる。

また、鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）の約600ｍ南に鶴田楢原遺跡が所在する。

1.蔵数森ノ木遺跡　2.高江遺跡
3.鶴田東大坪遺跡1次調査

Ｆｉｇ.96 筑後市における13世紀頃の墳墓分布図（1/100.000）

この遺跡は、中世を主体としており（13世紀後半～14世紀前半頃）、溝、掘立柱建物や土壙などの遺構が検出されている。

中でも、溝は土地を区画する性格があると解釈している。

遺物を見ると、輸入陶磁器も若干出土しているため、この地に居住した集団の階層が窺われる遺跡である。

筑後市内から検出した墳墓も少ないため、資料増加及び周辺の調査状況と合わせて遺跡・遺物から探る必要があろう。

(6) まとめ

今回の発掘調査の成果として、筑後市で2例目となる旧石器時代のナイフ形石器1点、土壙7基、溝14条、墳墓1基、竪穴住居2軒、不明遺構1基、多数のＰｉｔなどの遺物、遺構を確認する事が出来、当地域での歴史に新たな1ページを加えることが出来た。

特に鶴田西畑遺跡（Ａ区）の竪穴住居1ＳＩ10から出土した土製人形は、特記すべき重要な資料である。また、平成5年度から始まった筑後東部圃場整備事業に伴う発掘調査が平成10年度でようやく終了し、その結果、発掘調査地点は、延べ28遺跡57地点に達した（Ｆｉｇ.1）。発掘調査を対象とした箇所は、支線排水路や面の削平を受けるために遺跡の保存が出来ない部分のみであるため多くの地点を調査したが、全貌を把握するまでには至っていない。現在、報告書作成のため整理作業中の全遺跡を含め、現段階での筑後東部地区遺跡群において時代ごとの概観を試みたいと思う。

旧石器時代

旧石器時代の遺構は確認されていないが、今回報告する鶴田東大坪遺跡1次調査（Ａ区）からナイフ形石器が確認された。そのため、周辺に該当する遺構、遺物の存在をうかがわせる資料となった。平成10年度調査した、鶴田牛ヶ池遺跡1次調査から数点旧石器が確認されたことを付け加えてたい。今後、整理作業が終了と伴に増加すると思われる。

縄文時代

縄文時代の遺構、遺物についても同様に増加傾向にある。遺構では、早期の石組み炉（集石遺構）、落し穴状遺構が多く確認されている。遺物も押型紋土器をはじめとし、山形紋、条痕紋、格子目紋土器が出土している。石器類は敲石、磨石などが出土している。筑後市での分布状況を見てみると、落し穴状遺構は、筑後東部地区を中心に八女丘陵の西端部付近に多く存在する。石組み炉（集石遺構）は筑後市の東部と南西部に分布し、押型紋土器の分布状況と非常に類似している事が言える。両地区とも圃場整備事業で発掘調査の件数が多い場所である。また、平成10年度調査した鶴田地区から、多くの押型紋土器が出土している。

弥生時代

弥生時代に入ると、遺跡数は増大する。前期末頃の土壙を新溝松原遺跡から数基確認している。中期に入ると、鶴田牛ヶ池遺跡4次調査から甕棺1基を確認した。後期入ると、鶴田岸添遺跡2次調査から竪穴住居群を検出している。また、平成10年度調査の鶴田西牛ヶ池遺跡からも竪穴住居群や掘立柱建物群、周溝状遺構を検出している。いずれも後期から終末にかけての時期にあたる。弥生時代前期末～終末にかけての遺跡は、筑後東部地区に限らず全域に分布している。

古墳時代

弥生時代に比べて古墳時代に入ると、遺跡数は減少する。前期では、久恵中野遺跡、久恵上川原遺跡からそれぞれ単独の竪穴住居を1軒ずつ確認している。中期に入ると、今回報告した鶴田西畑遺跡（Ａ区）と新溝丸田遺跡から竪穴住居を同様に1軒ずつ確認した。今の所、前期、中期の竪穴住居は単独で存在するようである。何れも須恵器、カマド付設されてはいない。現在までカマド付設した竪穴住居の調査例はないが、新溝丸田遺跡で検出されていた。しかし、圃場整備事業工事関係者の勘違いにより調査される前に、掘削されたために詳細は不明である。また、新溝松原遺跡から溝2条を検出しているが、溝の性格は不明である。古墳時代の集落がどのように展開しているか、今後の課題であろう。

歴史時代

奈良・平安時代に該当する遺構、遺物に関しては、あまり確認されていない。奈良時代に該当する流路を鶴田前畠遺跡で確認している。平成10年度に調査を実地した鶴田木屋の角遺跡では、古代の官道「西海道」の側溝らしい遺構が確認されたと聞いている。それ以外の遺構は未だ確認されていない。

中世では、新溝丸田遺跡から2×2間の掘立柱建物が確認されている。久恵川ノ上遺跡から東面に庇が付く2×2間の掘立柱建物と2×2間の総柱の掘立柱建物を検出している。また、鶴田楢原遺跡から掘立柱建物や区画溝、輸入陶磁器も出土している。そのため、この地に居住した集団の階層を窺う事が出来る資料である。久恵岸ノ下遺跡からは、室町時代に組まれたと思われる石垣が検出されている。調査担当者は、構造からみて水路の護岸とは考えるより、屋敷の周辺護岸だった可能性があると述べている。

近世になると、新溝犬丸遺跡や鶴田溝代遺跡等で溝が確認されている。最後に、現在整理作業中のため詳しい時期は不明であるが、鶴田武津恵遺跡から漁労施設のやなと思われる木杭列も確認されている。

このように、旧石器時代から近世までの遺跡が数多く存在することが判った。小さな積み重ねではあるが、筑後東部地区遺跡群の歴史の大きさを改めて感じる結果となった。また、筑後東部地区遺跡群の発掘調査を平成8年度、平成10年度の2年間、調査を担当して感じたことは、茶畑、ブドウ畑、竹林や造成等の要因で多くの遺跡が発掘調査をする以前に破壊や破損を受けていると言う事実である。このため、遺構検出作業、掘削に多くの時間を費やしたにも関わらず、遺構の性格等を決定するに至らなかったり、遺物が皆無なため時期決定が困難である場合があった。そして、今回の発掘調査では、現場の途中で担当者が代わったため、現場の運営等（調査期間の延長）で関係者の方々に多大なるご迷惑をかけてしまうと言う事態を引き起こしたことについて、どのような理由があるにせよ調査担当者の責は免れないものであろう。

最後に、鶴田西畑遺跡（Ａ区）の竪穴住居1ＳＩ10に関して付け加えるならば、遺跡そのものは消滅してしまったが、課題が多く残っており当該期の研究に新しい資料を提供する事が出来たと言えよう。

しかし、竪穴住居の調査、遺物出土状況などに不十分な点があったため、推測が多い文章になってしまった。途中から現場を担当したにせよ不十分な調査になってしまった事は否めない。今後のこのような調査にならないように反省し、この経験を生かしていきたいと考える次第である。

今回の報告で筑後東部圃場整備事業に伴う報告書は3冊目にあたる。整理作業中の遺跡も多くあるため、細部に至る検証が出来ていないが、最終年度に新ためて総括を行うつもりである。

おわりに

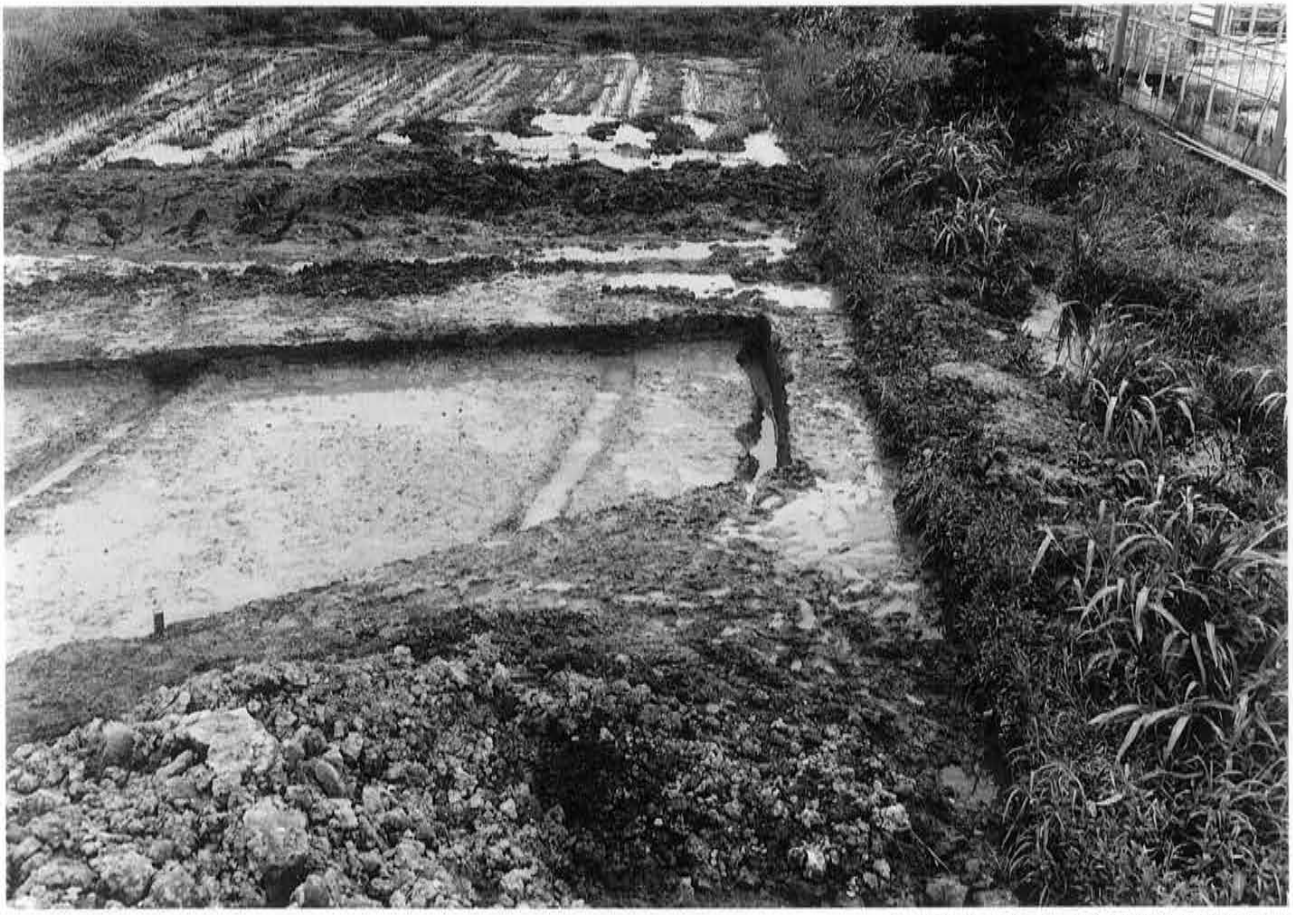
嘱託職員として筑後市に来ることになり、平成8年度の筑後東部地区圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査の担当者になった。また、本来の担当者がいないと言う状況に陥ったことによって数多くの問題が発生してしまった。そのため、水系、土地改良区を初めとする協議を何度も繰り返すはめになり、忙しい中、同僚の小林勇作氏に同席をお願いしたり、数々のアドバイスを受けるなど格段の協力を得た。また、（当時）社会教育課係長であった本村正晴氏にも格段の御配慮を頂いた。両氏の力強い後押しがあったお陰で、無事調査を終える事が出来た。末筆ではあるが、記して感謝の意を表したい。

写真図版

凡　例

遺物の写真図版右下の番号は、
以下の要領である。

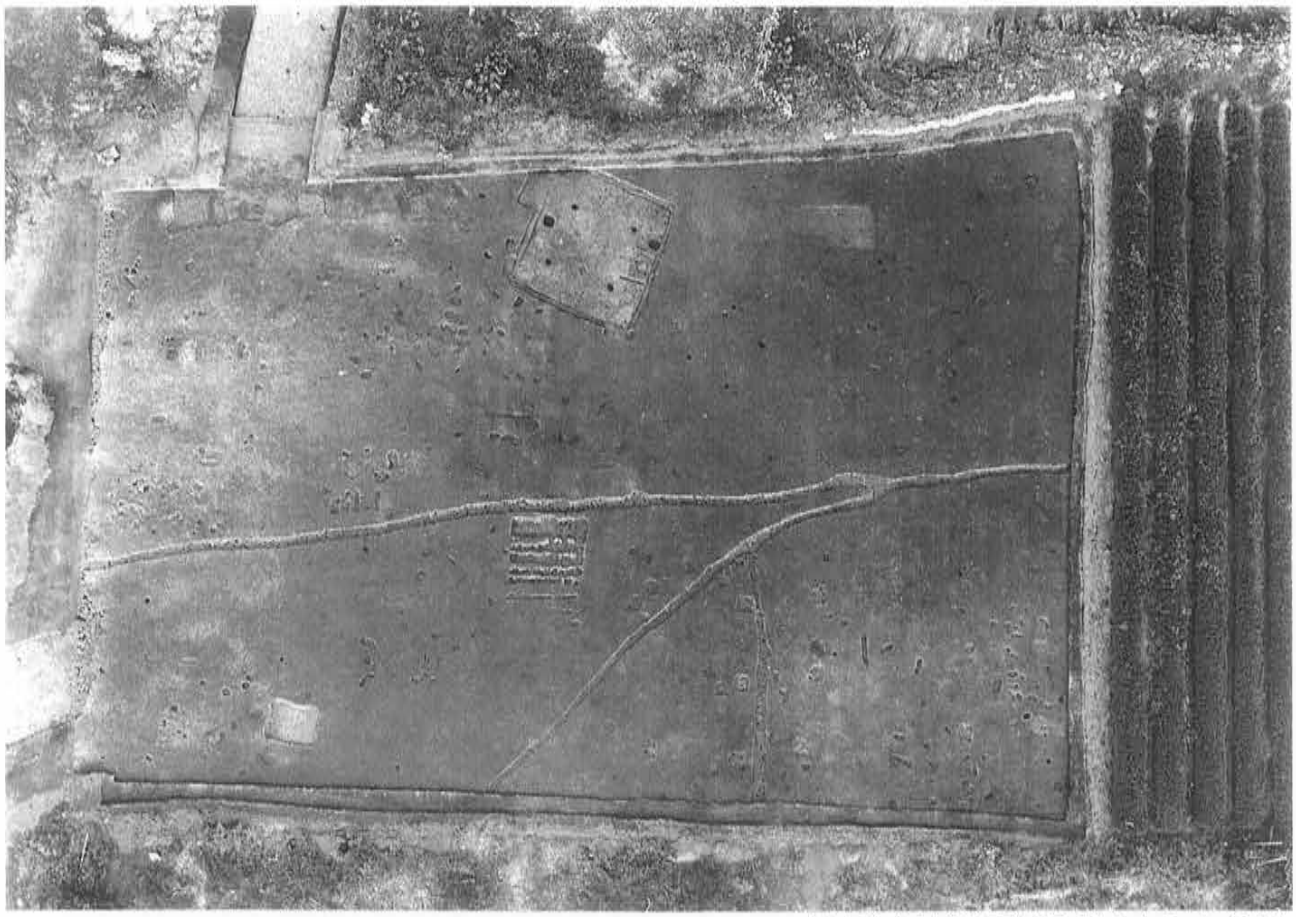
鶴田西田遺跡全景（西から）



1SD10・1SD20完掘状況（南から）

1SD30完掘状況（南から）

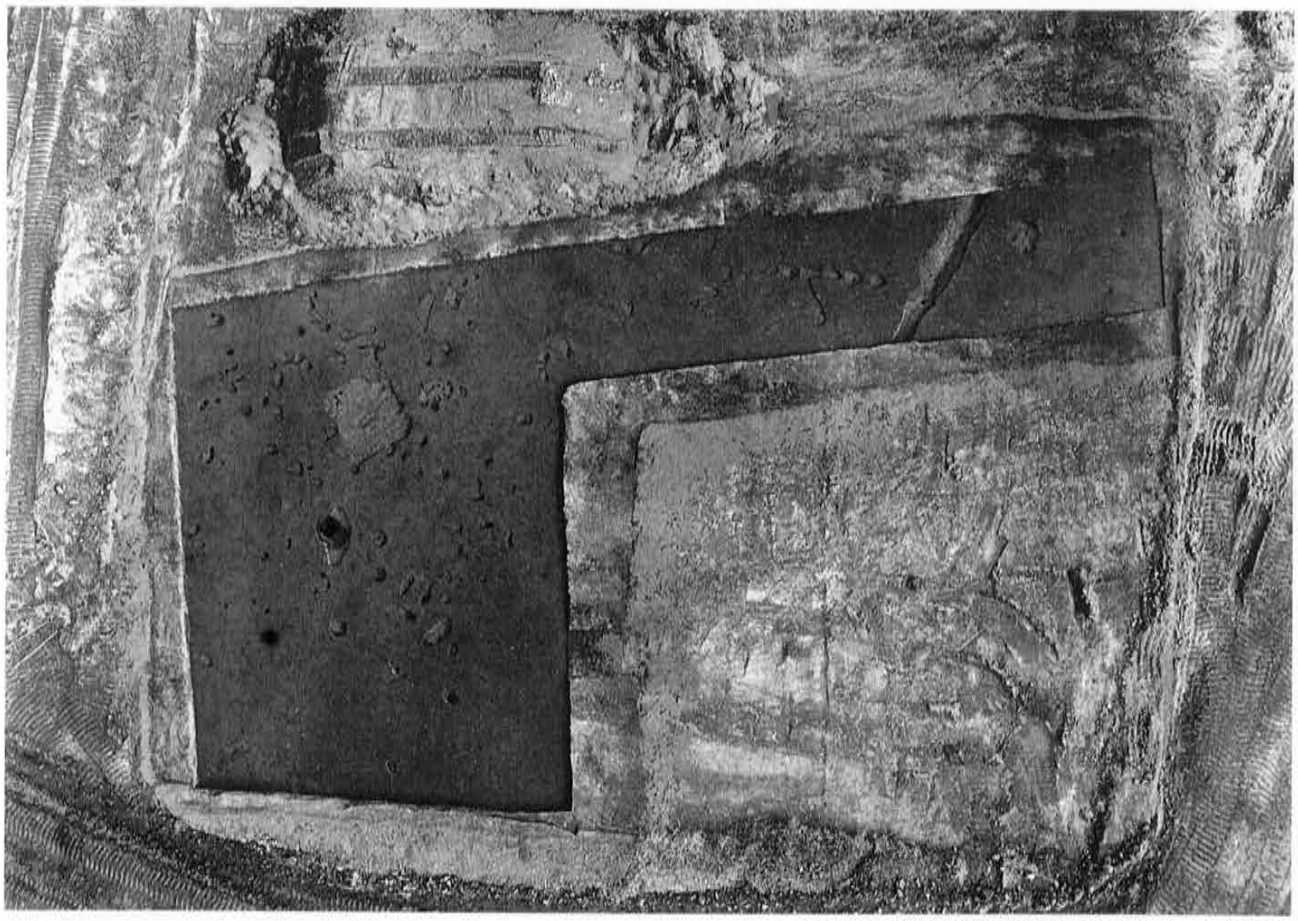
鶴田西畑遺跡（A区・B区・C区・D区）全景（空中写真・北西から）



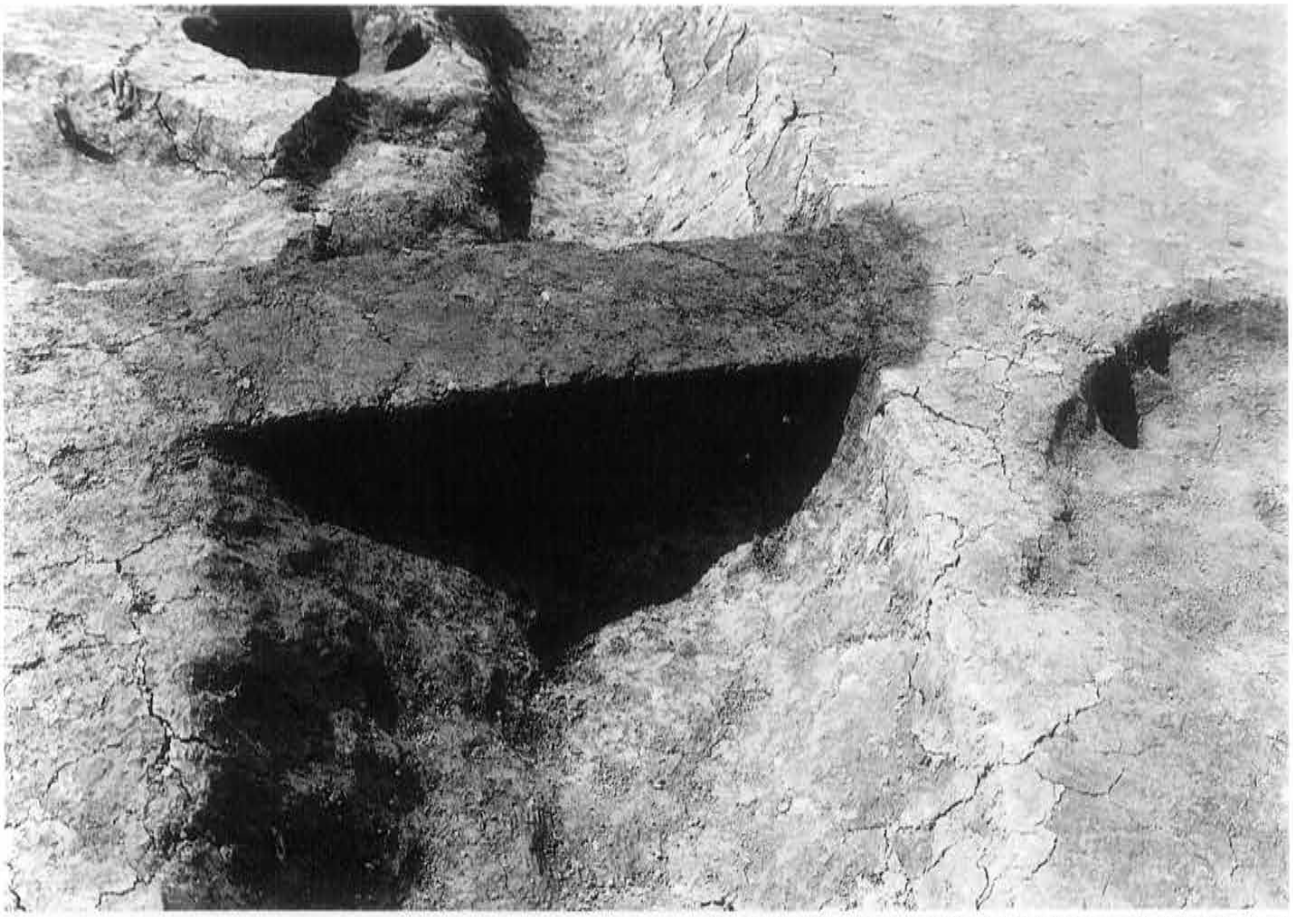
（A区）全景（空中写真・真上から・上が北）

（B区）全景（空中写真・真上から・上が北）

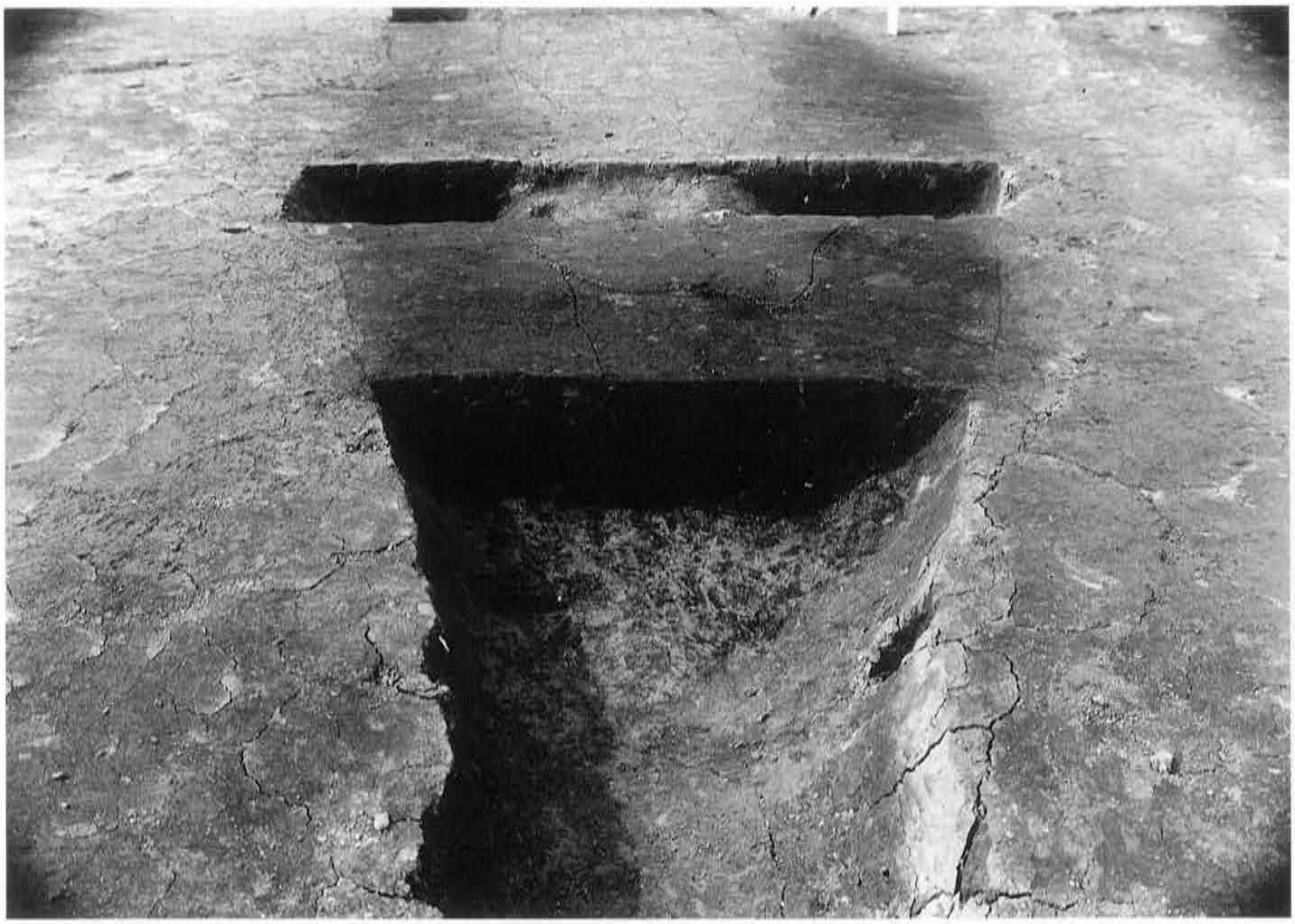
（C区）全景（空中写真・真上から・上が東）



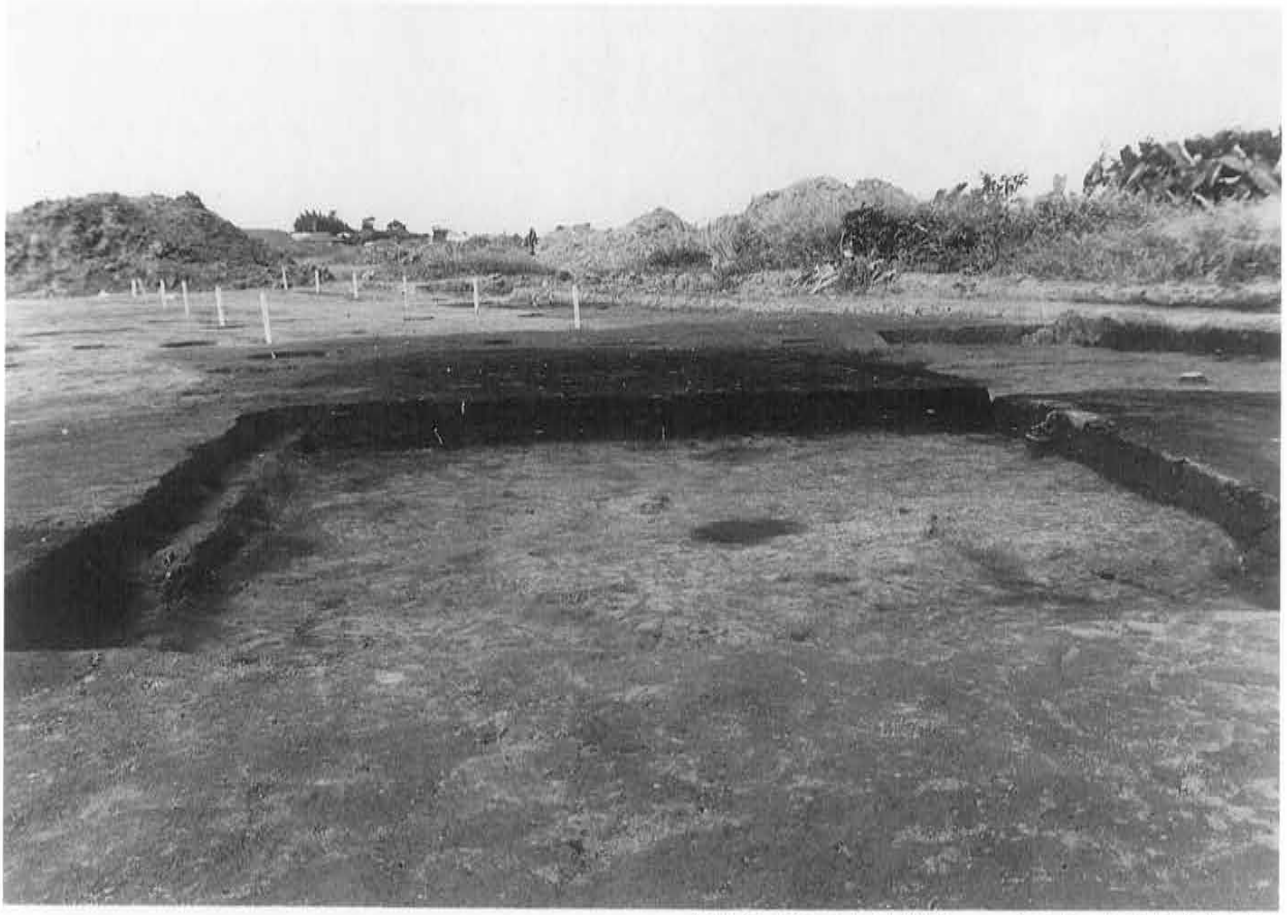
（D区）全景（空中写真・真上から・上が東）



(A区)1SD01・1SD05土層観察n--n'(北東から)



(A区)1SD05・1SD15土層観察o--o'(東から)



(A区)1SI10土層観察a---a'ライン南半部(東から)

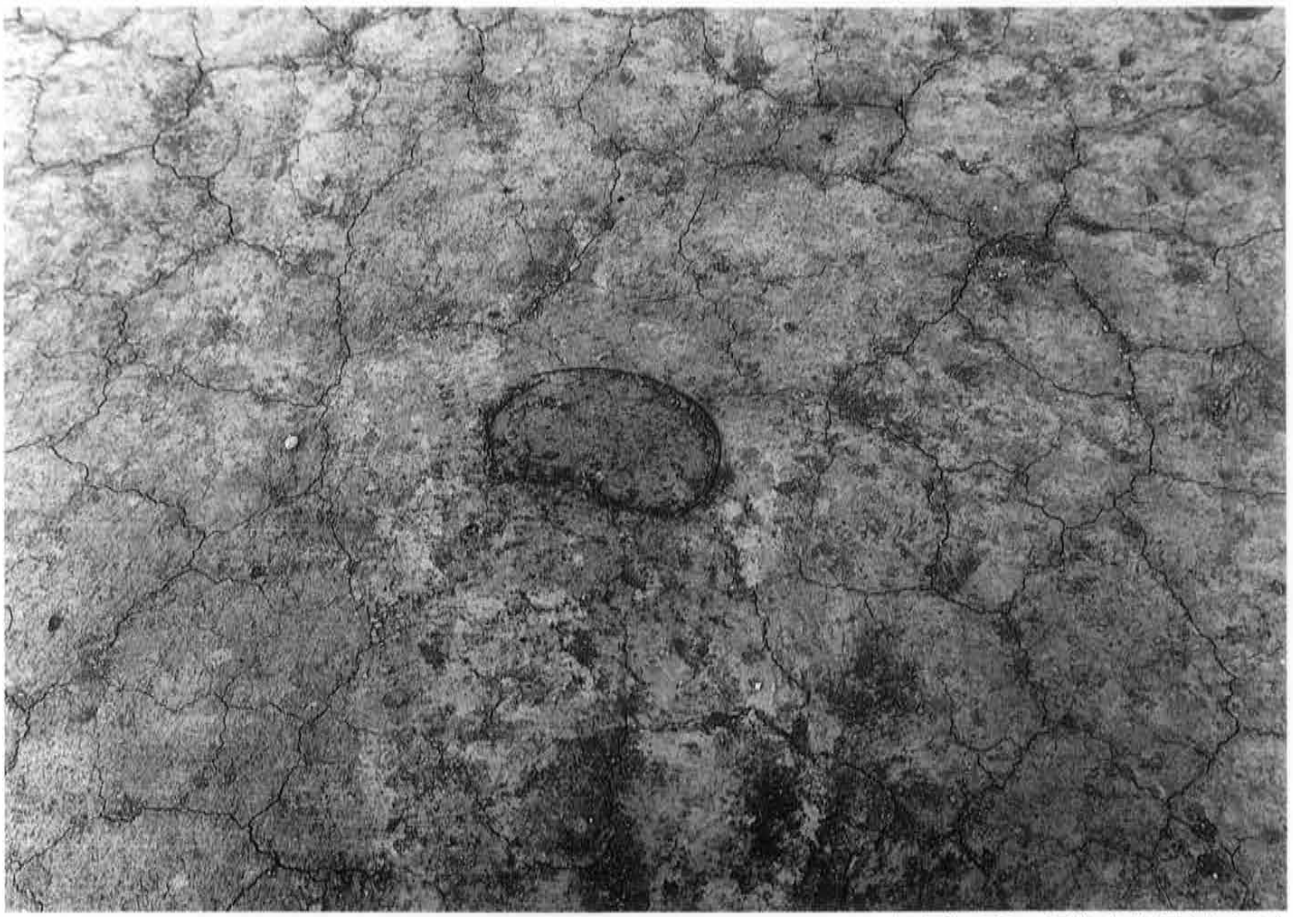
(A区)1SI10土層観察b---b'ライン東半部(南から)

（A区）1SI10遺物出土状況（南から）

（A区）1SI10遺物出土状況（北から）

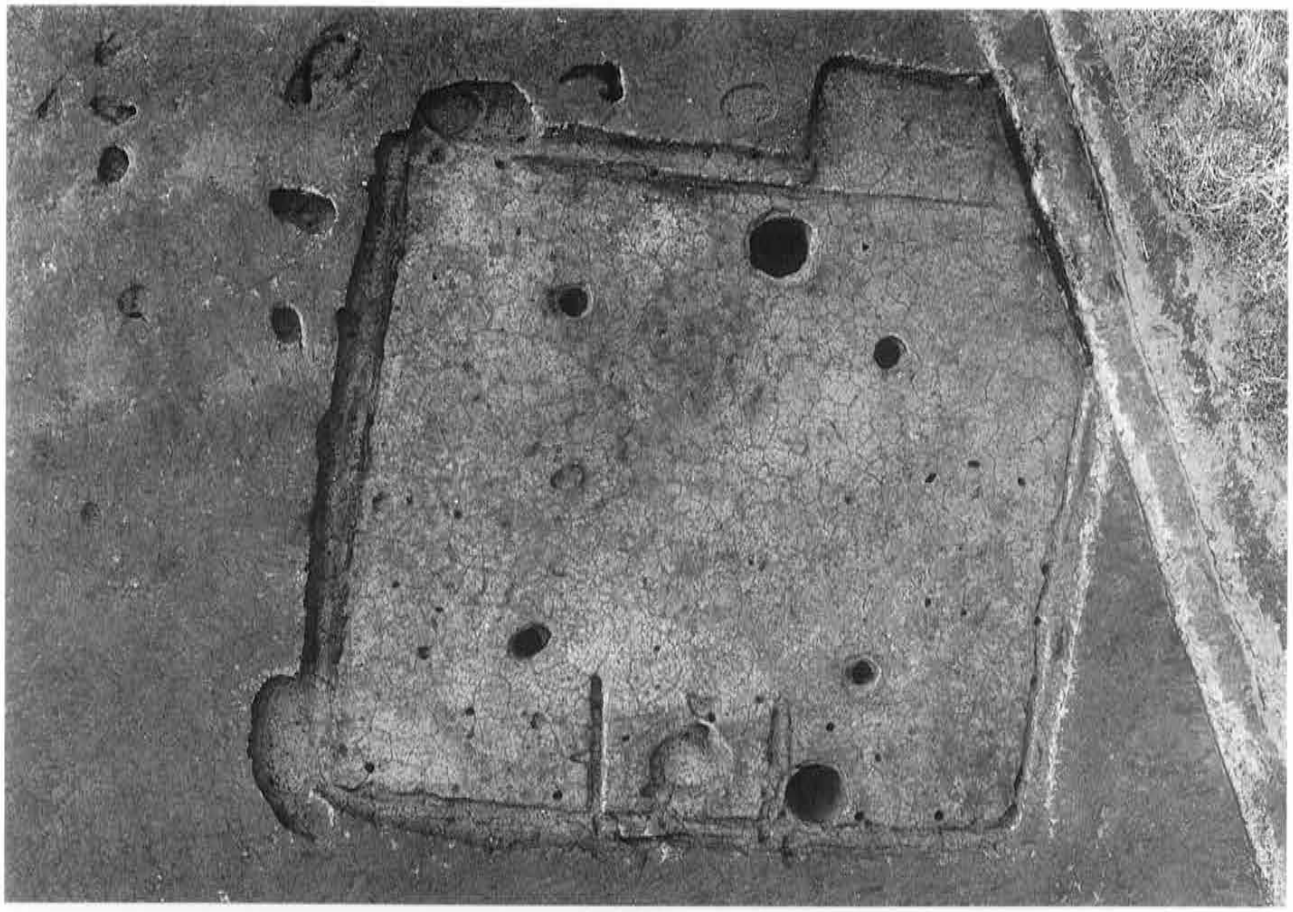
（A区）1SI10Pit13ロームブロック検出状況（南から）

（A区）1SI10Pit13勾玉出土状況（東から）

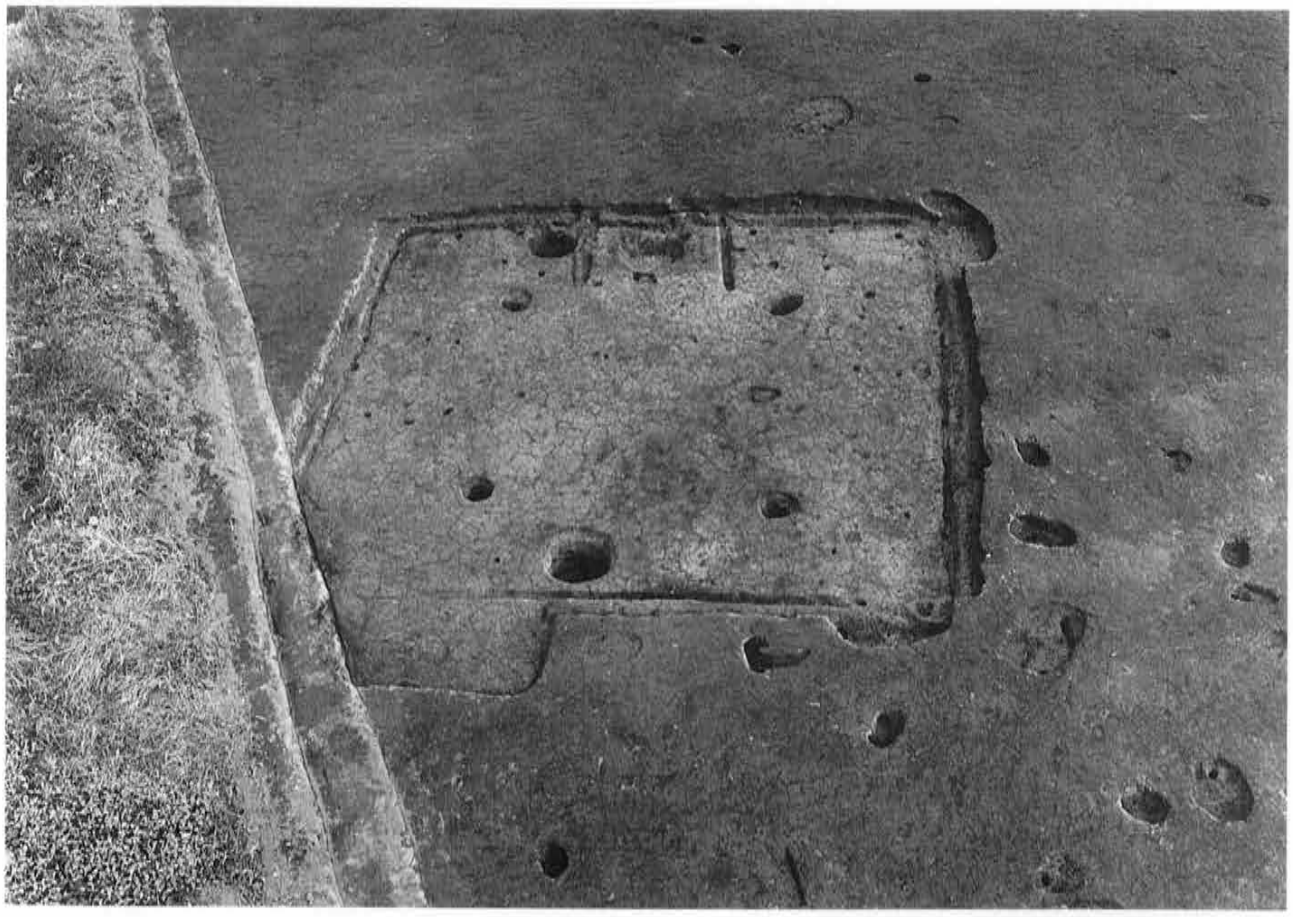


（A区）1SI10炉検出状況（南から）

（A区）1SI10間仕切り溝検出状況（西から）



（A区）1SI10完掘状況（拡張前・空中写真・真上から・上が西）



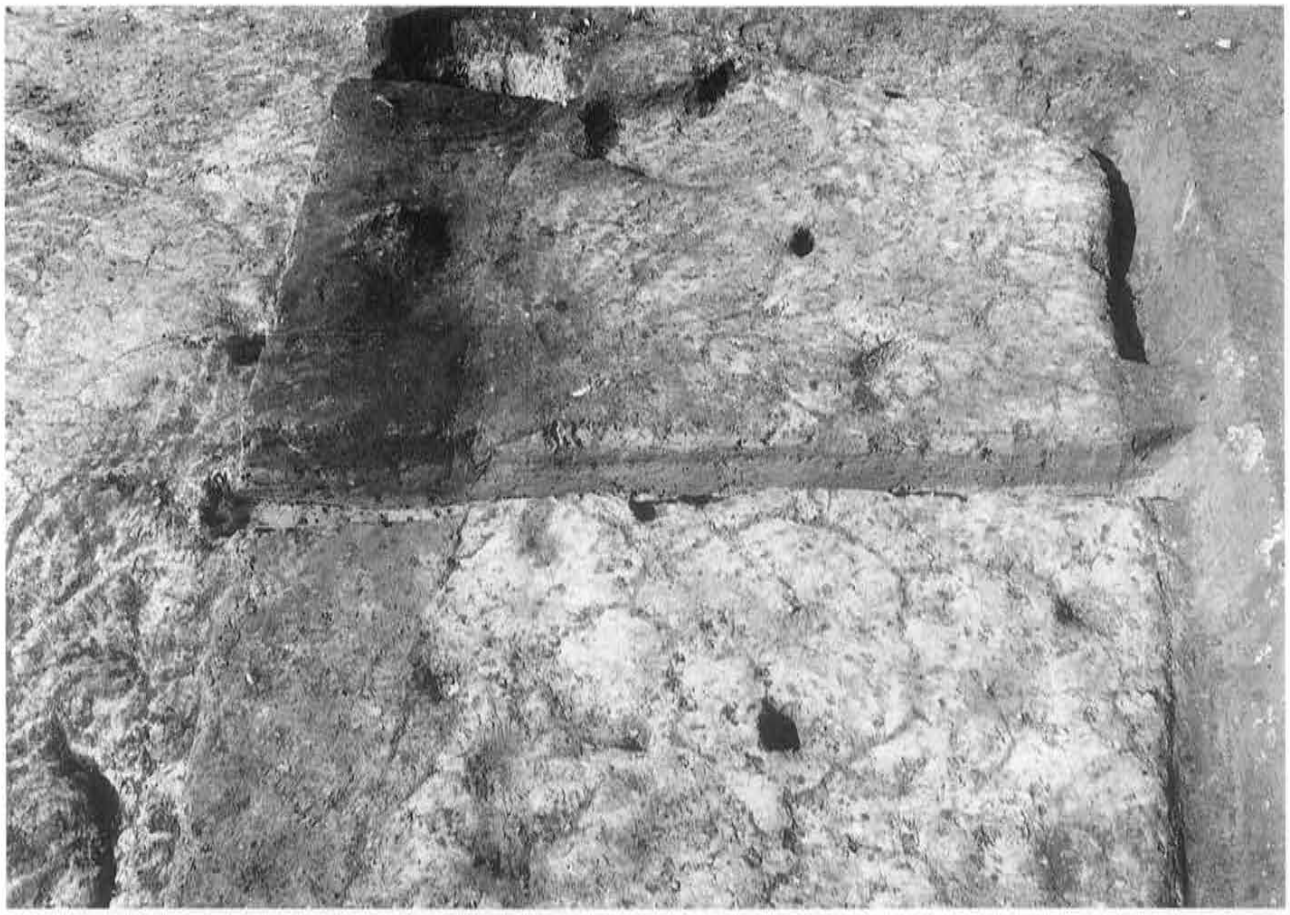
（A区）1SI10完掘状況（拡張前・北西から）

（A区）調査区北壁土層観察k--k'（南から）

（A区）北拡張部検出状況・調査区北壁土層観察近景k--k'（南から）

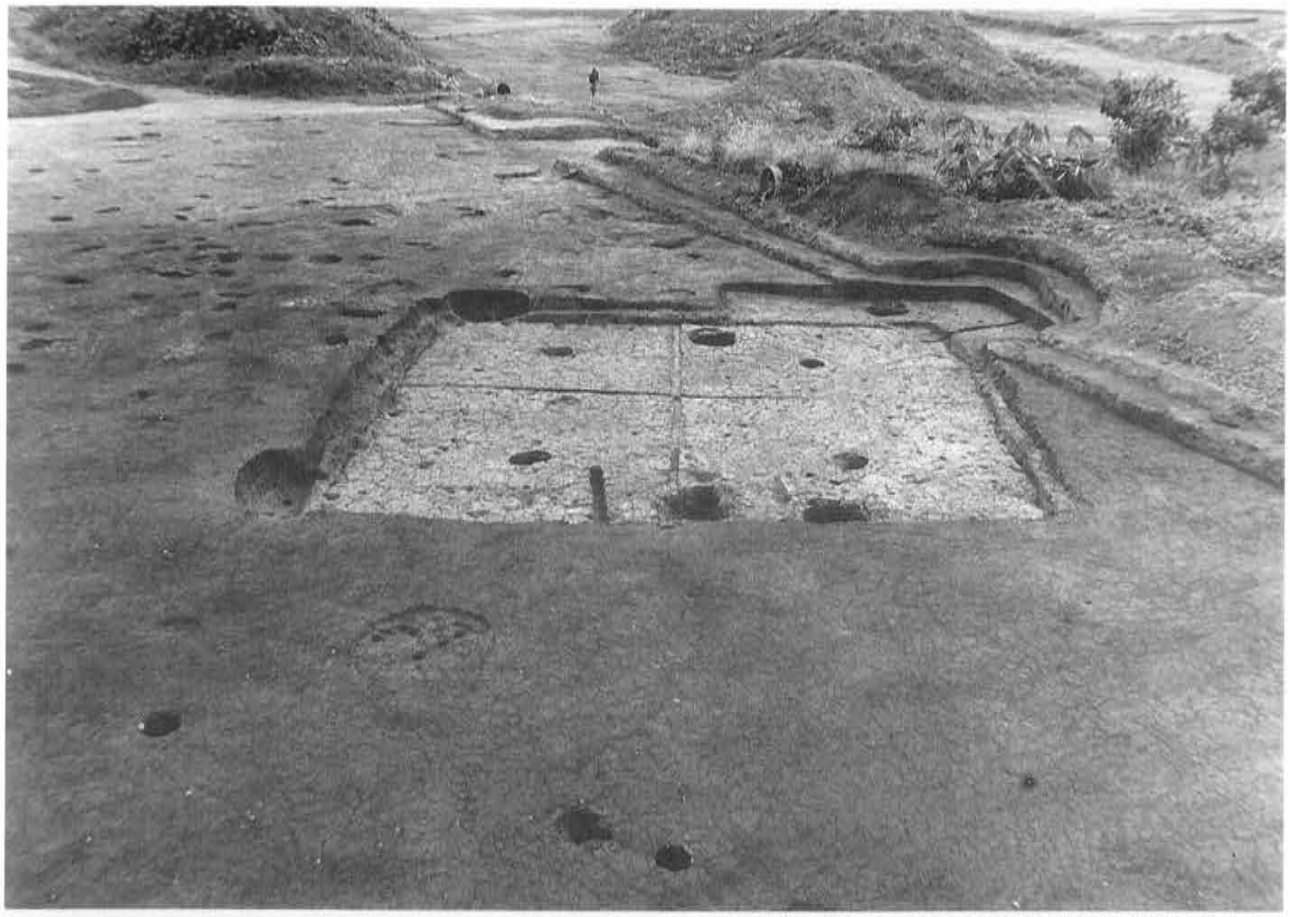
（A区）北拡張部遺構・遺物検出状況（南西から）

（A区）北拡張部土層観察 I--I'（東から）

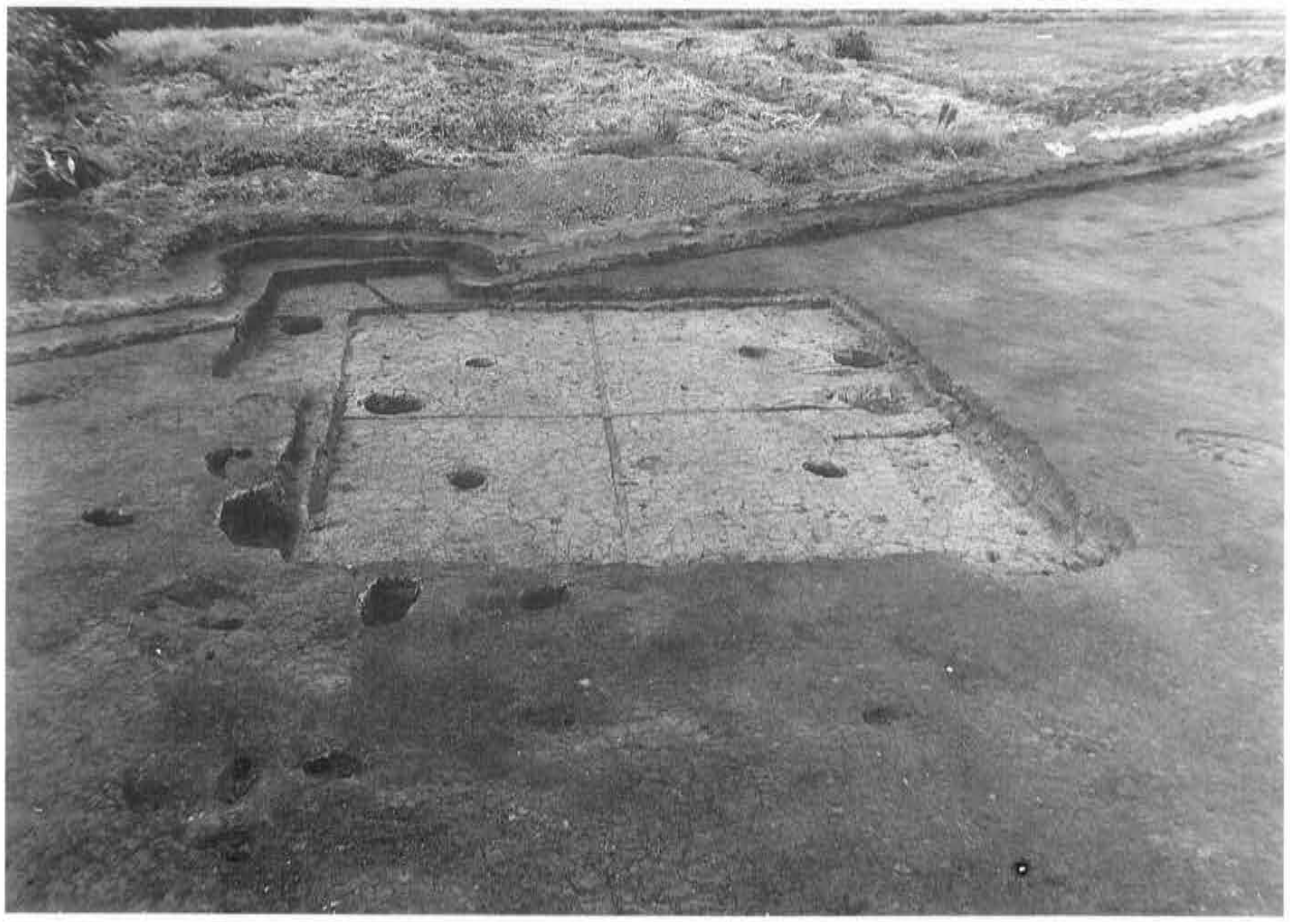


（A区）北拡張部断ち割り状況 I--I'（東から）

（A区）北拡張部完掘状況（北東から）



(A区)1SI10・1SI20完掘状況(拡張後・東から)



(A区)1SI10・1SI20完掘状況(拡張後・南から)

15-1

15-7

15-2

16-10

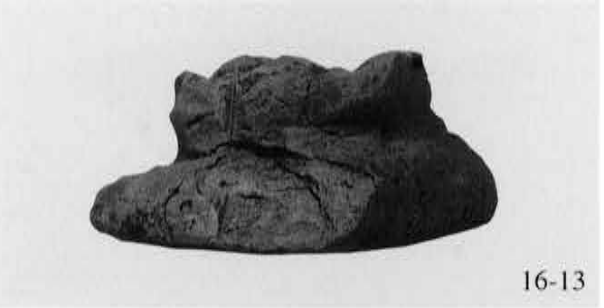
15-3

16-11

15-4

16-12

15-5


16-13

15-6

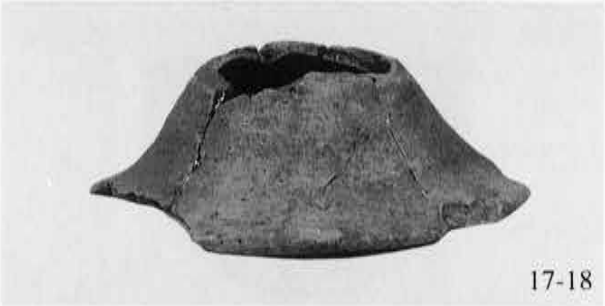
17-14

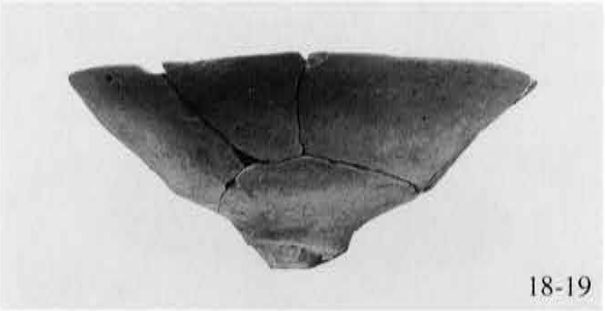
（A区）出土土器（1）

17-15

17-16

17-17


17-18


18-19

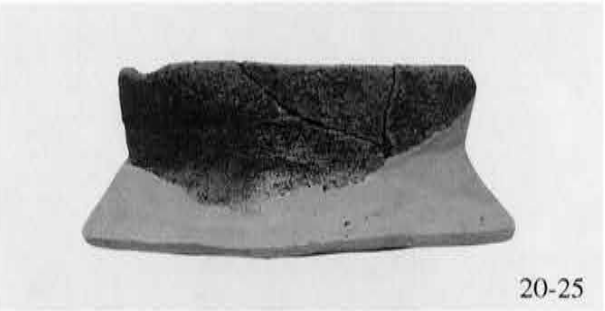
18-20

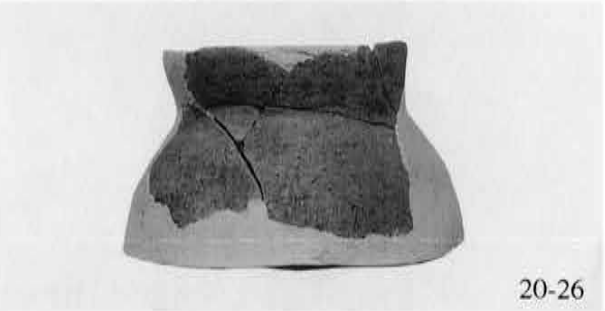
18-21

18-22

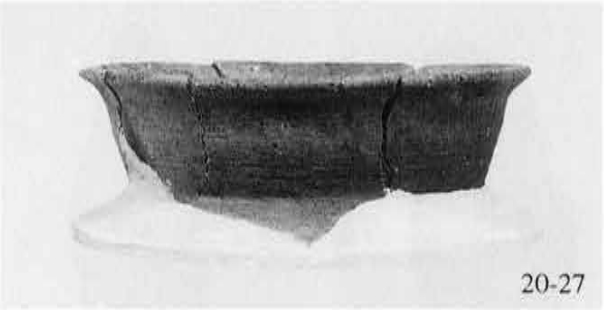
19-23

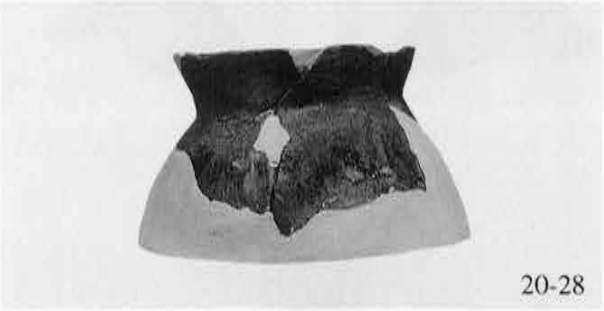
19-24

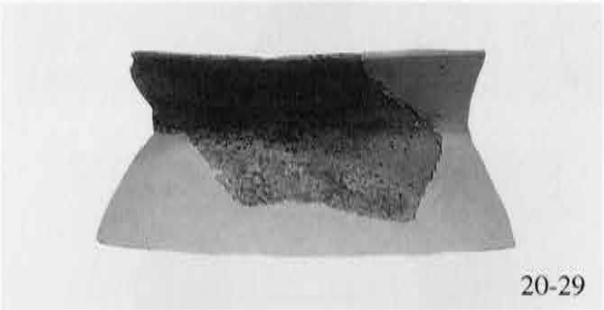

20-25

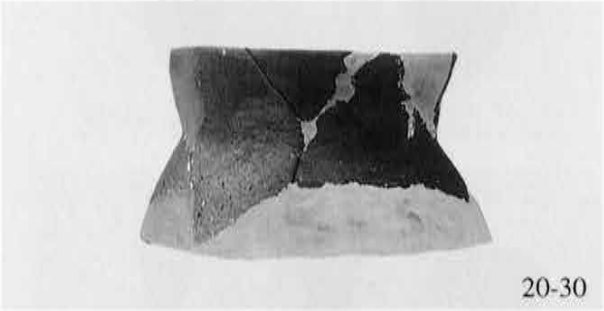

20-26

（A区）出土土器（2）


20-27


20-28


20-29


20-30

21-31

21-32

22-33

22-34

22-35

22-36

23-38

（A区）出土土器（3）

24-39

24-40

24-41

24-42

24-43

24-46

裏 24-44

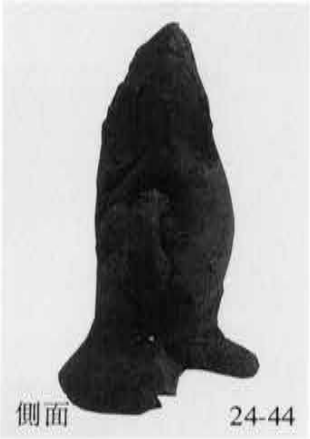
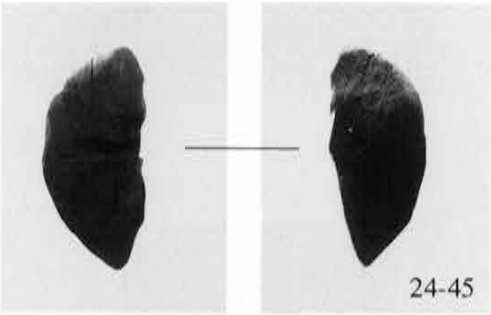
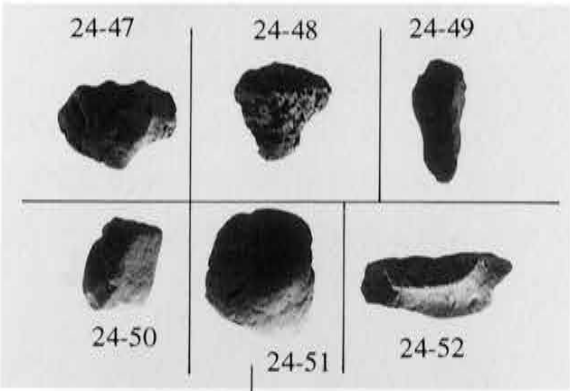

側面 24-44

表 24-44


24-45



（A区）出土土器（4）

26-57

26-64

26-58

26-65

26-59

26-66

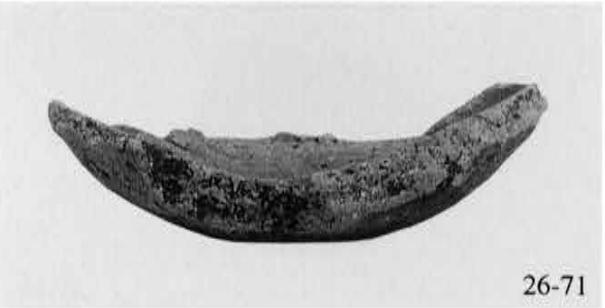
26-60

26-67

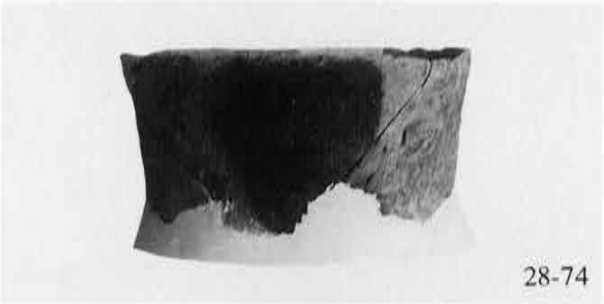
26-61

26-68

26-63

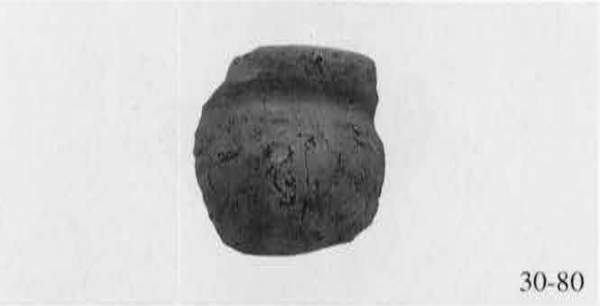

26-71

（A区）出土土器（5）


28-74

28-75

30-79


30-80

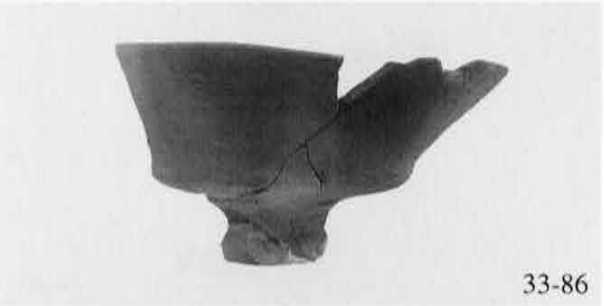
30-81

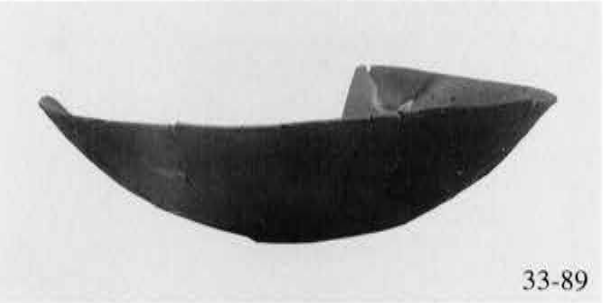
31-82

31-83

32-84

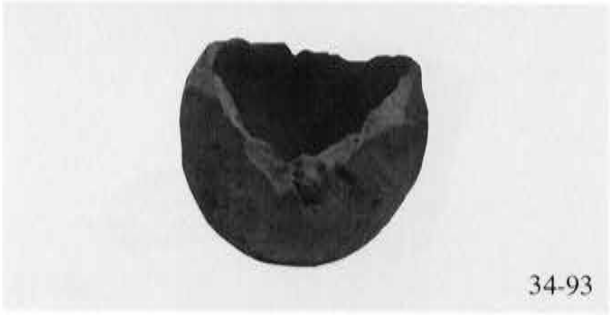
33-85


33-86


33-89

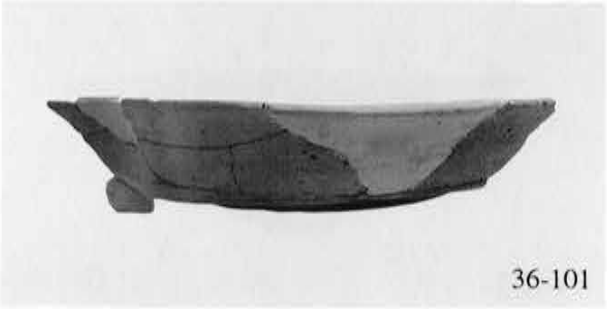
33-90

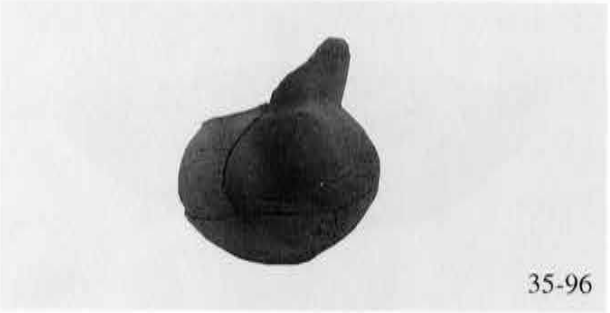
（A区）出土土器（6）

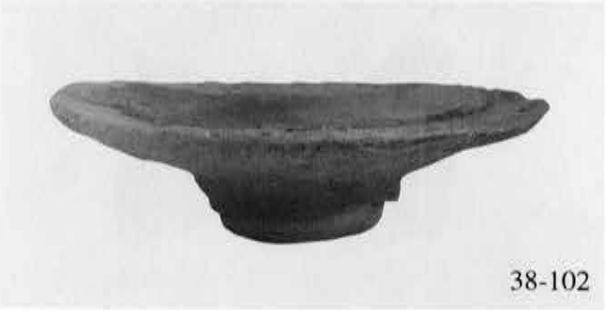

34-93

36-100

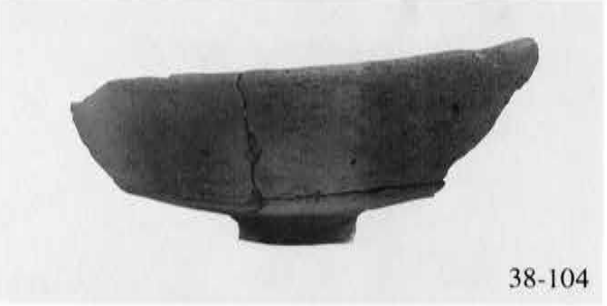
34-95


36-101

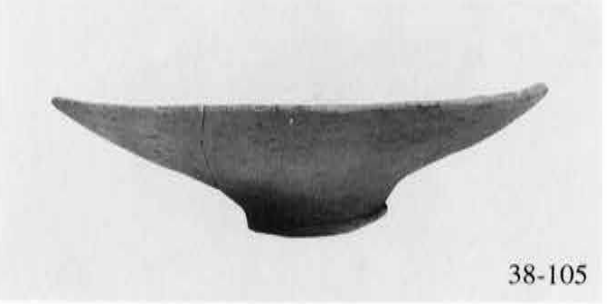

35-96


38-102

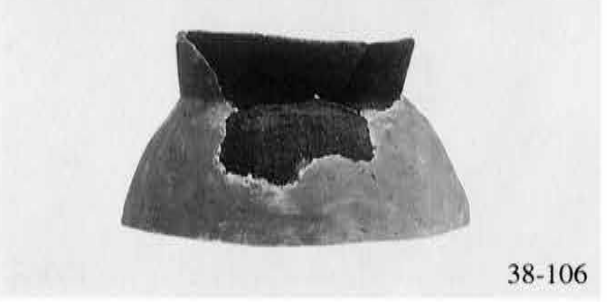
35-97


38-104

35-98

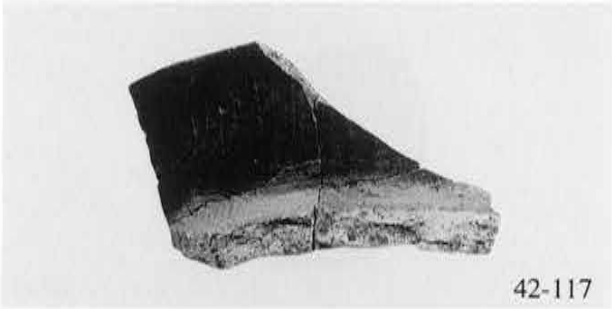

38-105

35-99


38-106

（A区）出土土器（7）

39-109


42-117

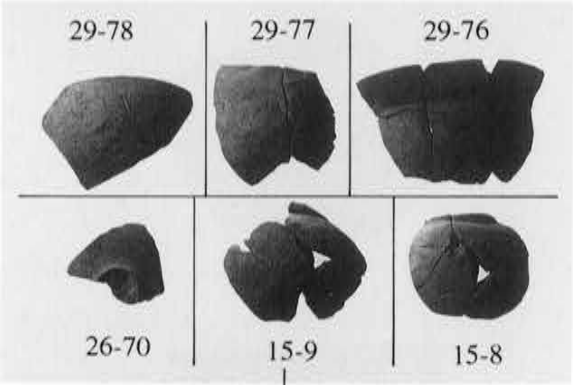
39-110

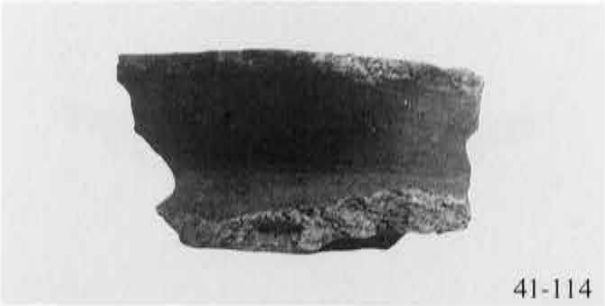
45-121

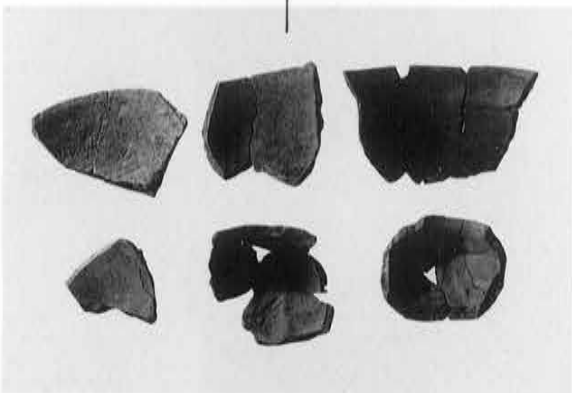
40-112

47-123

41-113

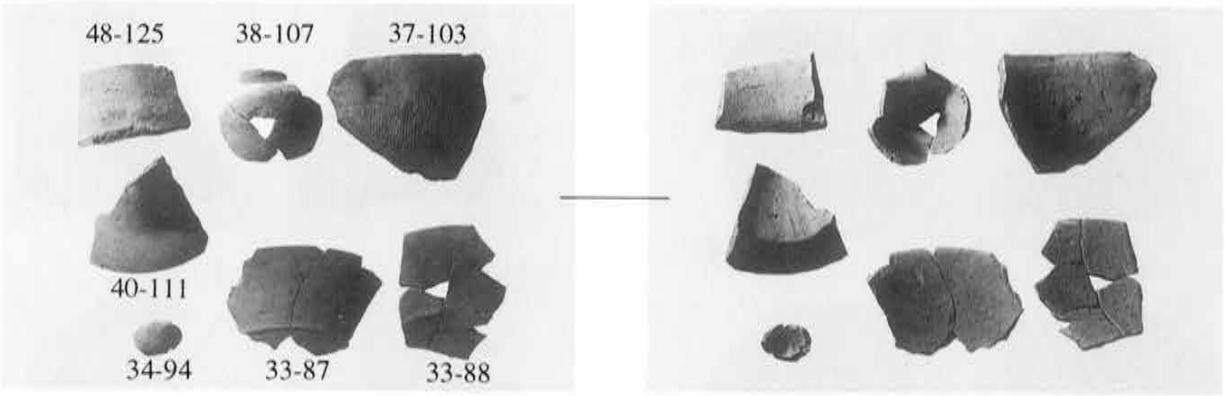


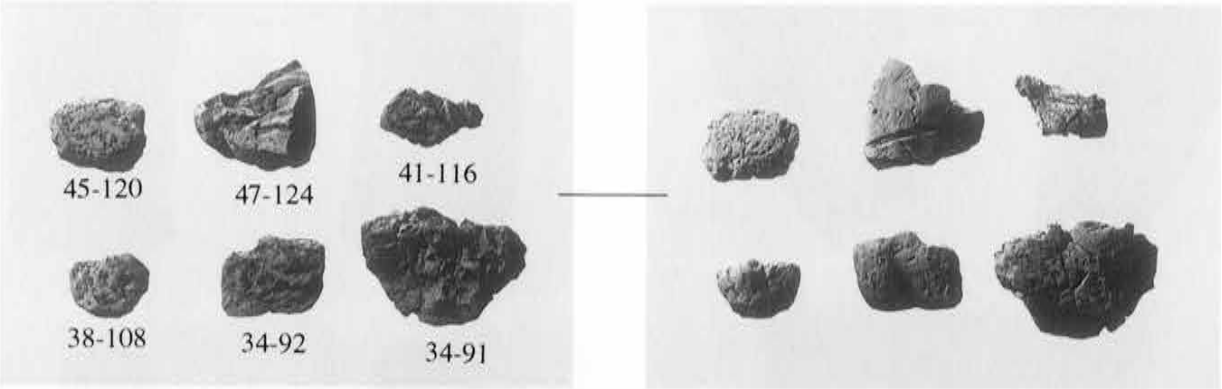

41-114

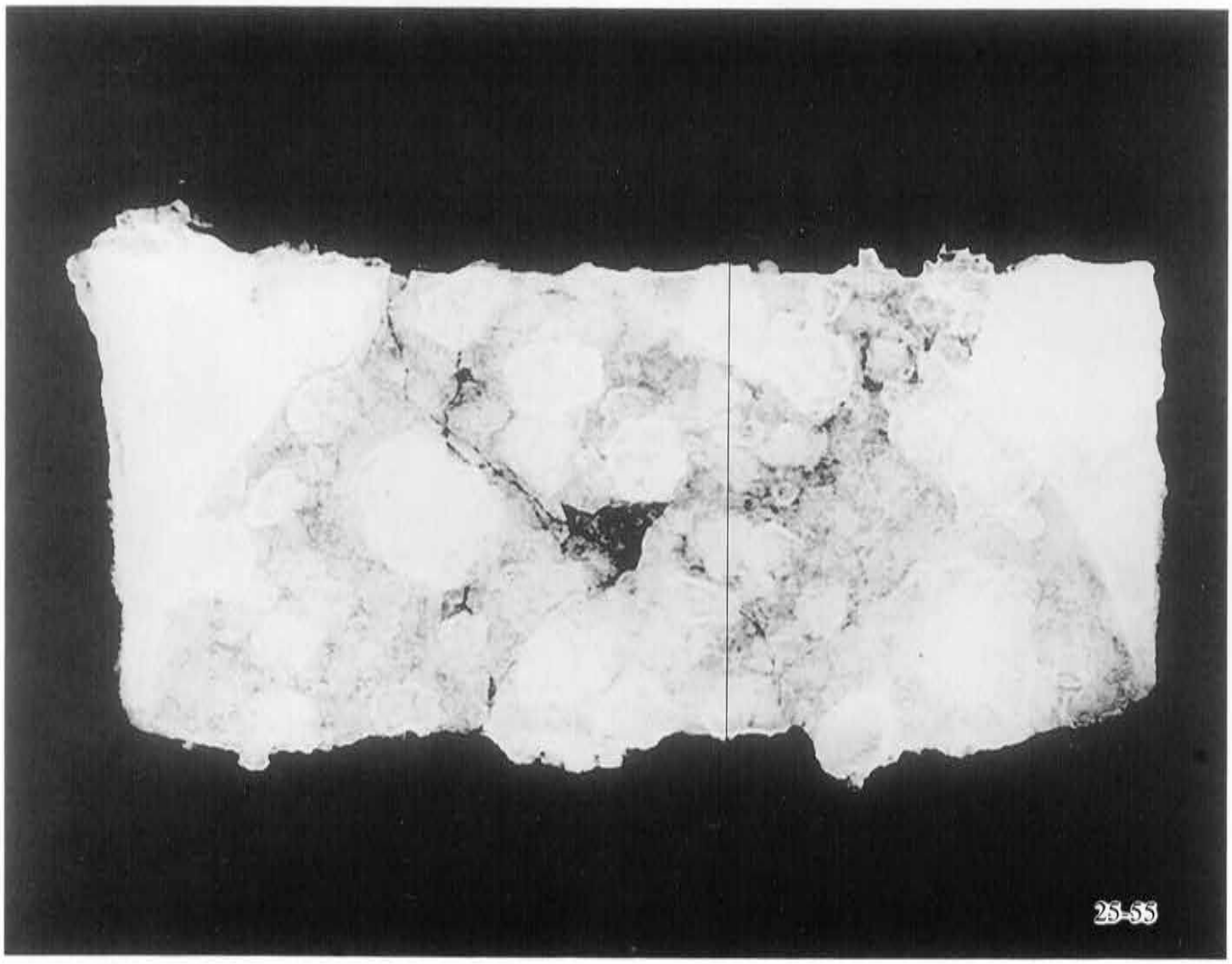


41-115

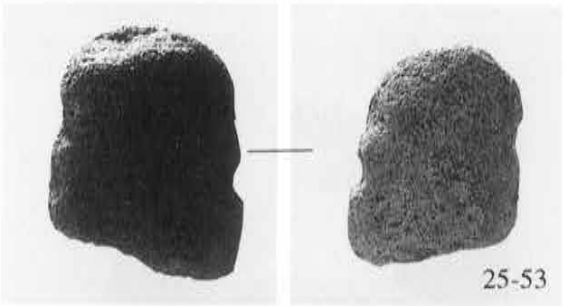
（A区）出土土器（8）

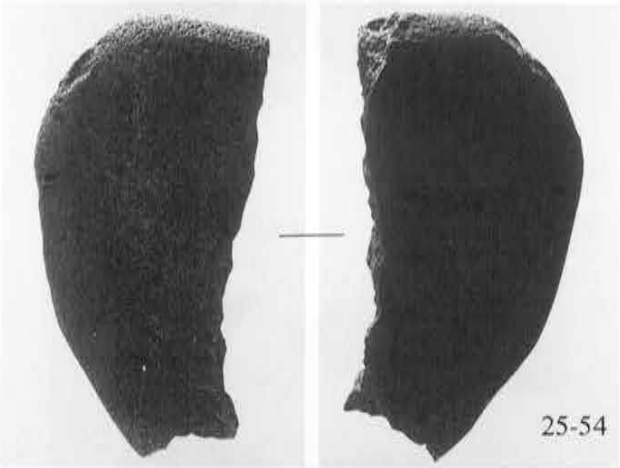

48-125
38-107
37-103
40-111
34-94
33-87
33-88


45-120
47-124
41-116
38-108
34-92
34-91

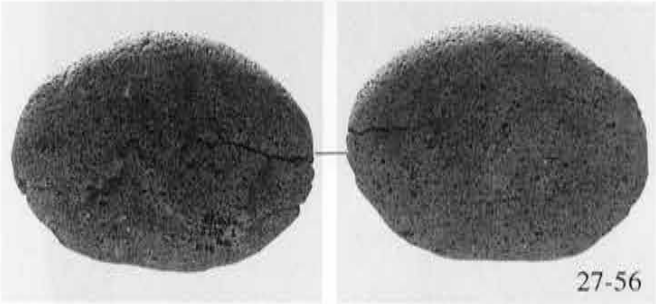

25-55

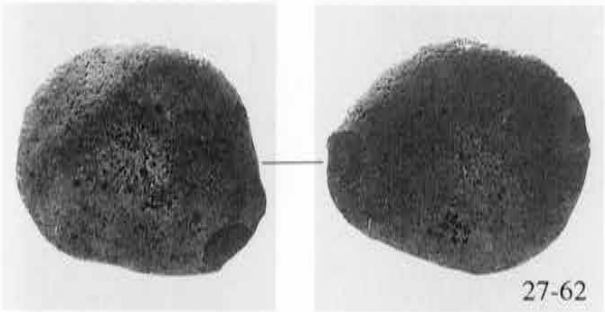
（A区）出土土器・鉄器（9）

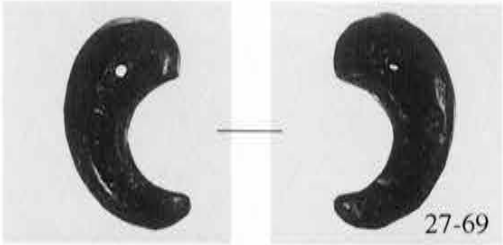

25-53

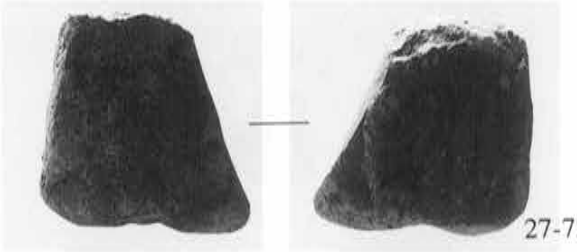

25-54

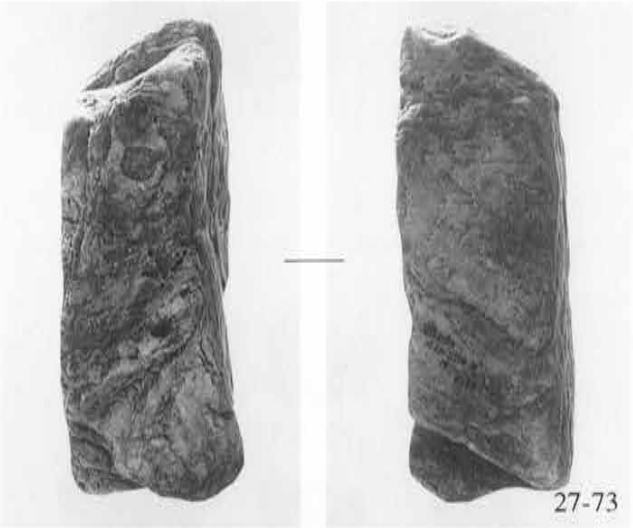
25-55

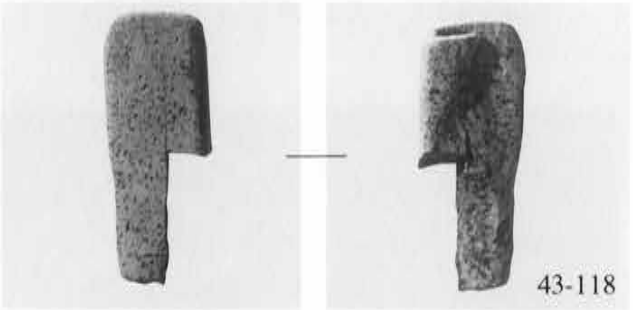

27-56

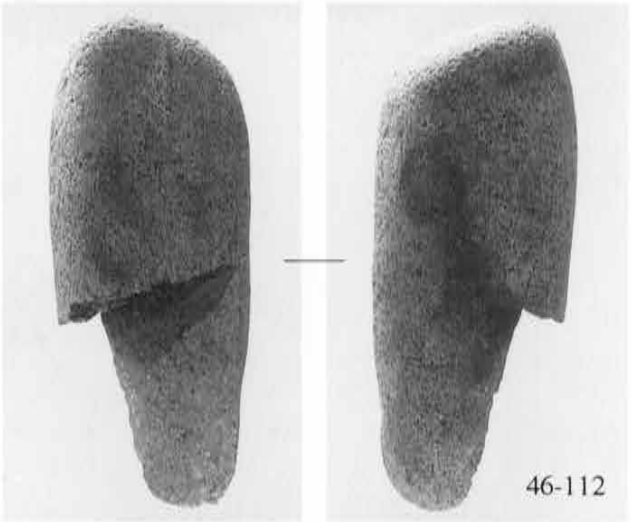

27-62

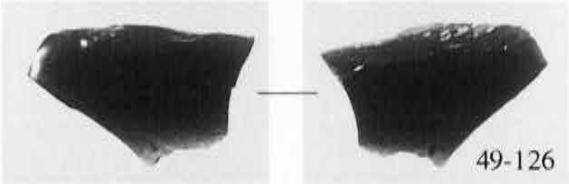

27-69


27-72


27-73


43-118


46-112


49-126

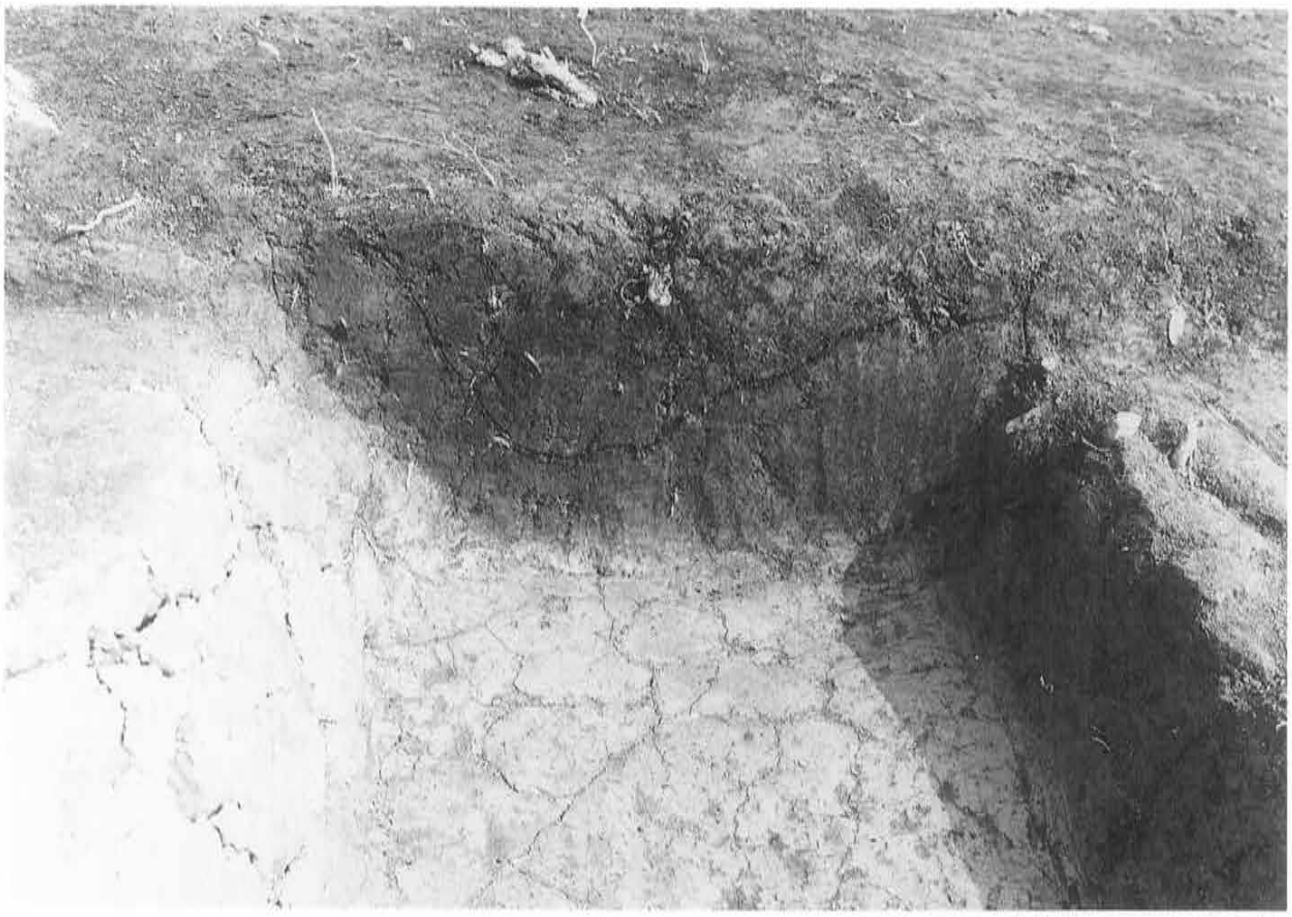
（A区）出土石器・鉄器（１０）

鶴田東大坪遺跡1次調査（A区・B区）全景（空中写真・北から）

（A区）全景（空中写真・真上から・上が北）

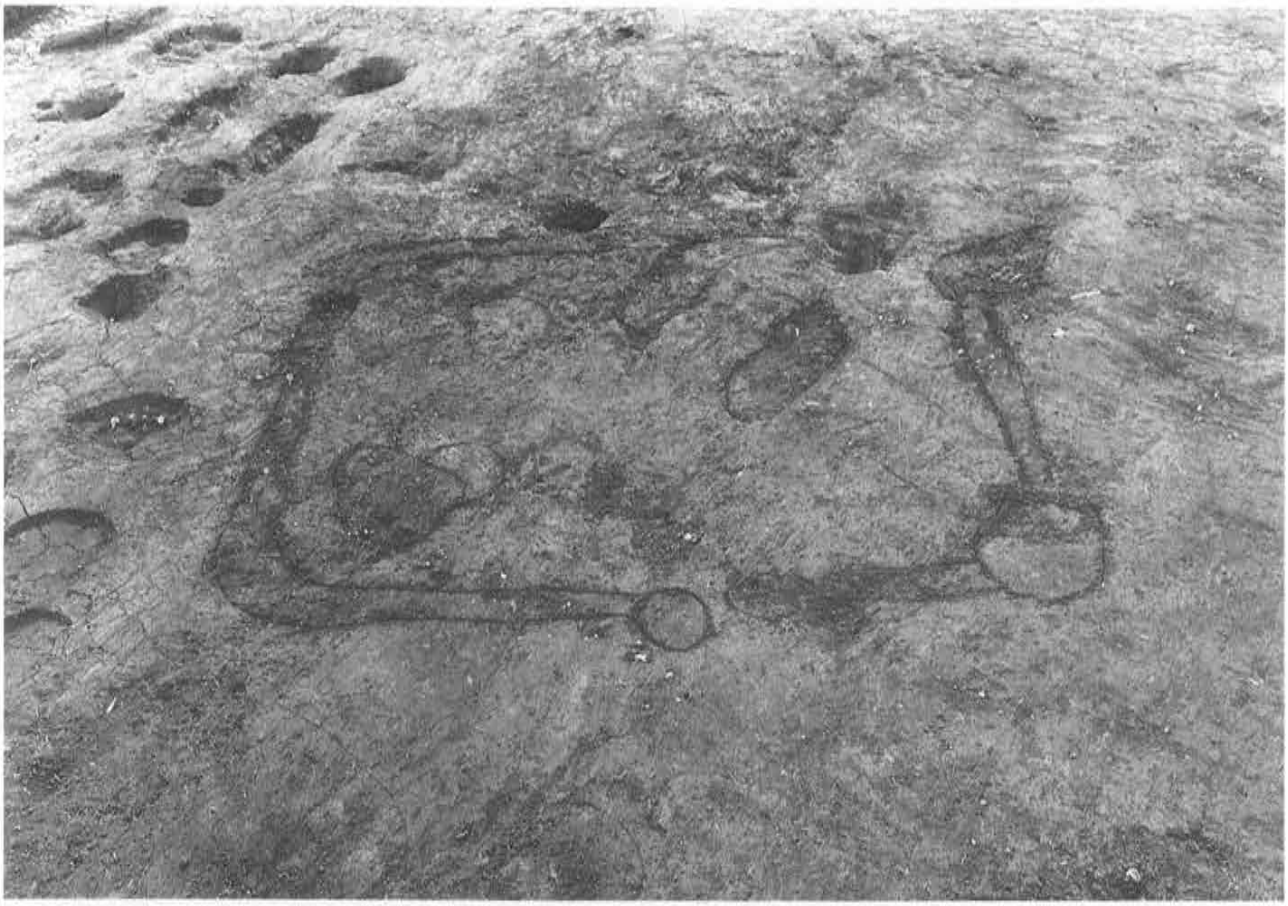
(B区)全景(空中写真・真上から・上が南)

(A区)1SD01・1SX05完掘状況(空中写真・真上から・上が北)

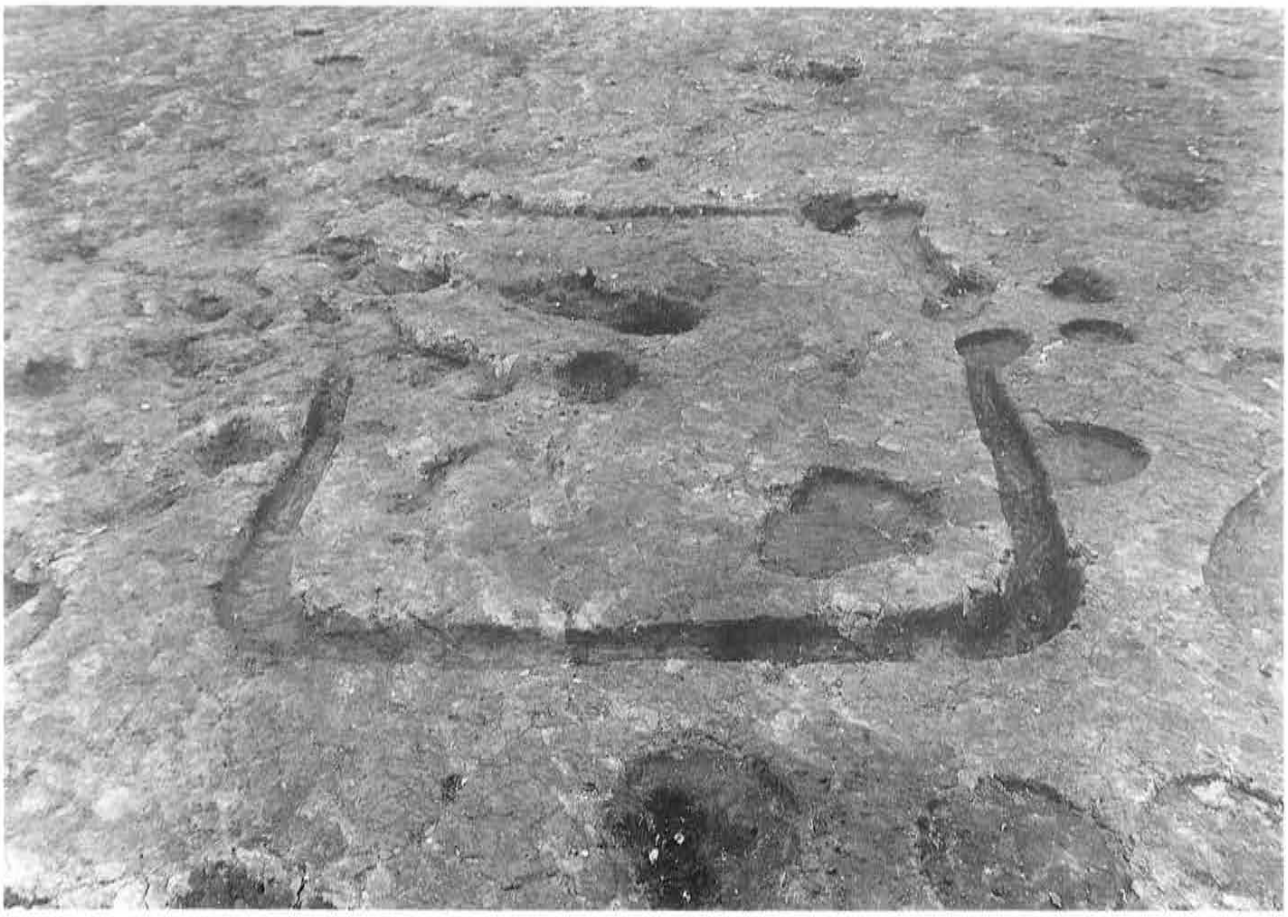


（A区）1SD01土層観察a--a'（西から）

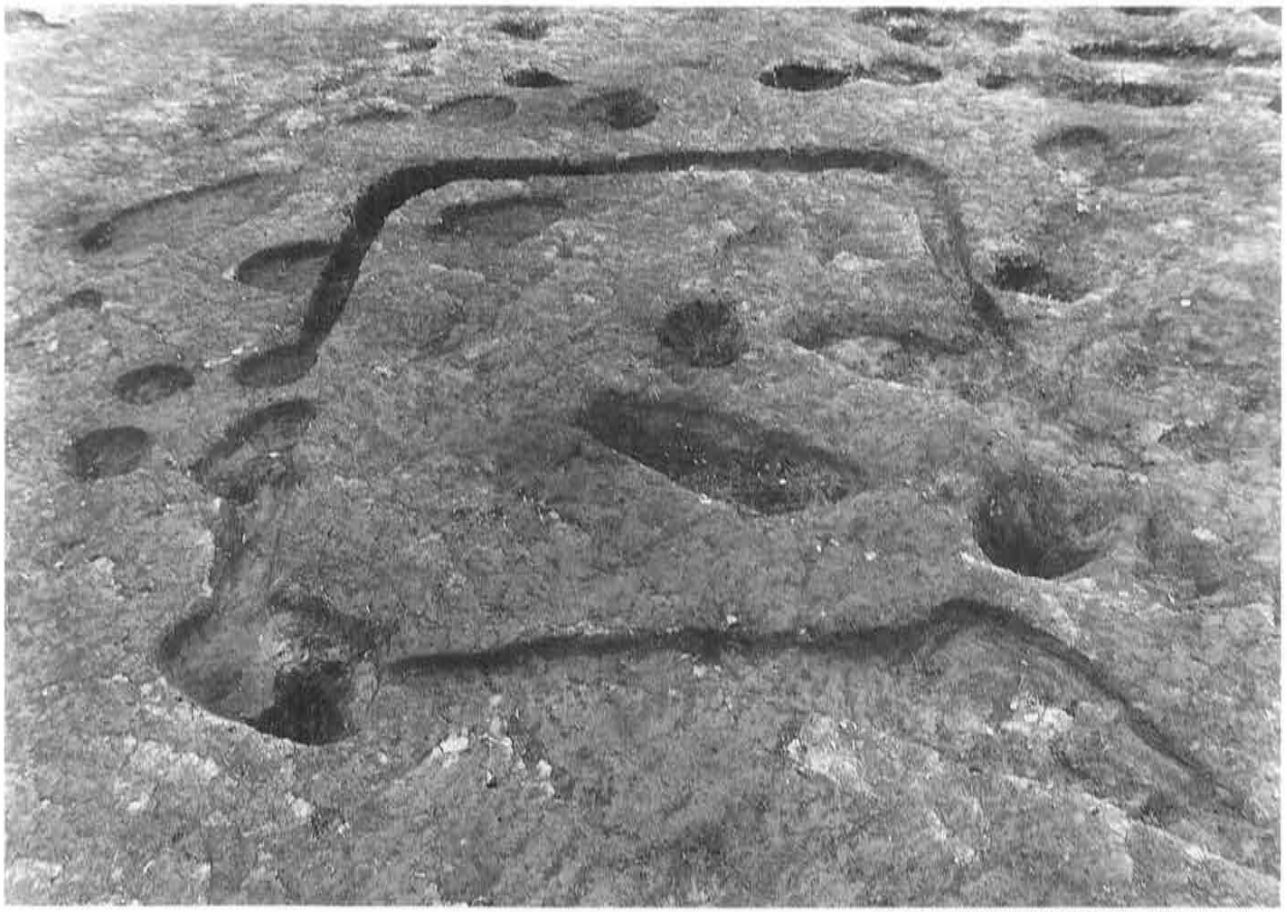
（A区）1SD01土層観察b--b'（西から）



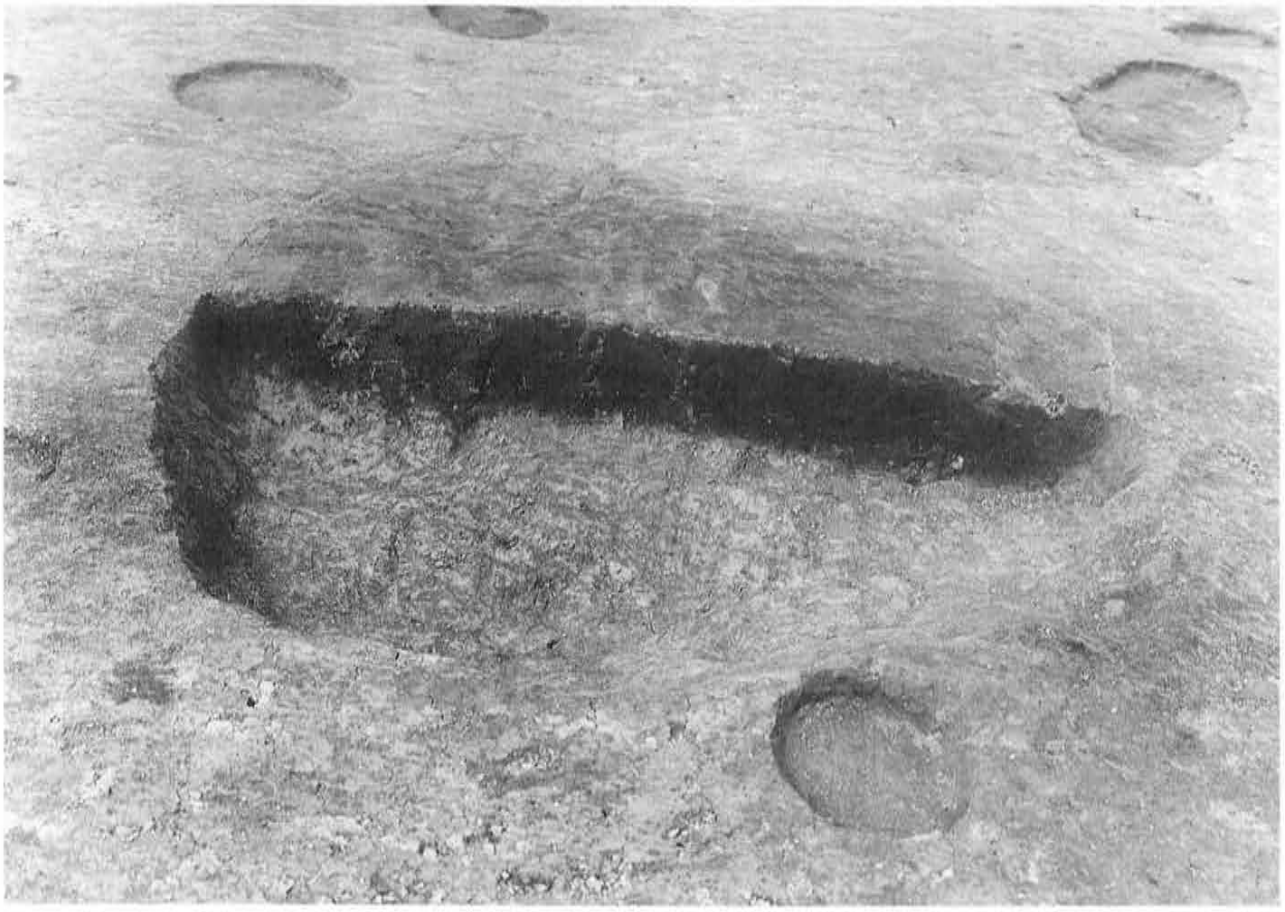
（A区）1SX05完掘状況（東から）



（A区）1SX05完掘状況（南西から）



（A区）1SX05完掘状況（北西から）



（A区）1SK10土層観察e--e'（南から）

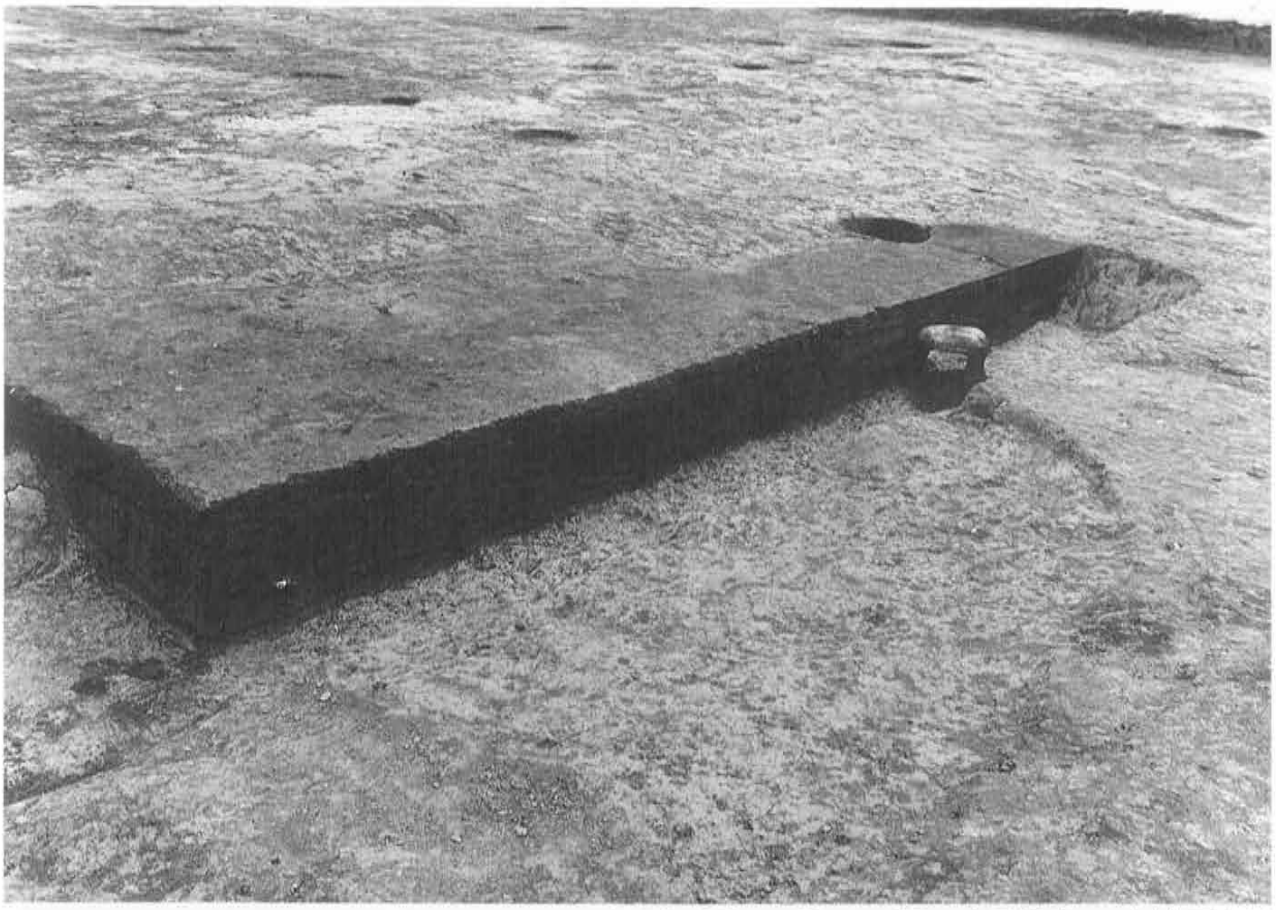
（A区）1SK10完掘状況（南から）

（A区）1SK14・1SK15検出状況（南東から）

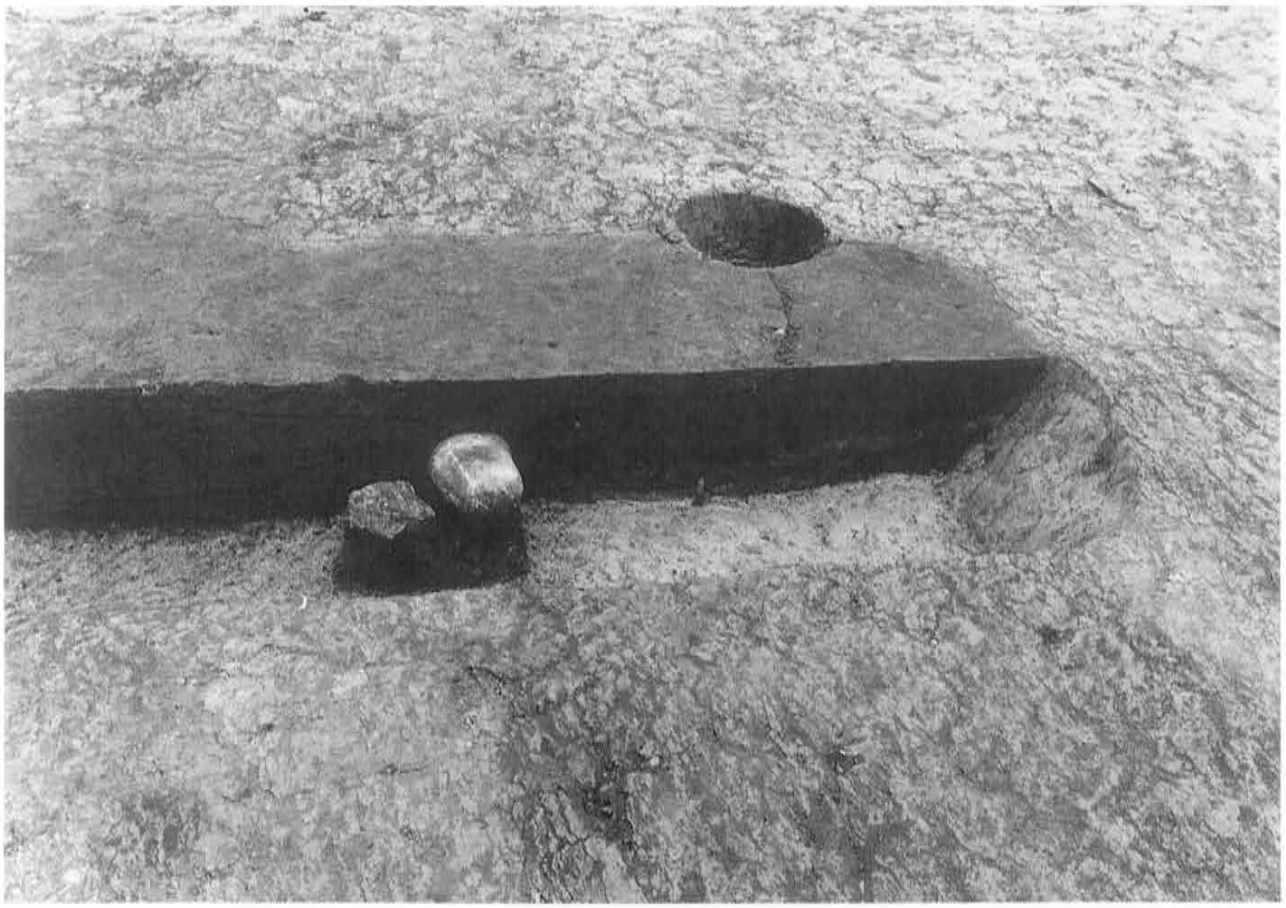
（A区）1SK14･1SK15土層観察f--f'（南東から）

（A区）1SK14･1SK15完掘状況（南東から）

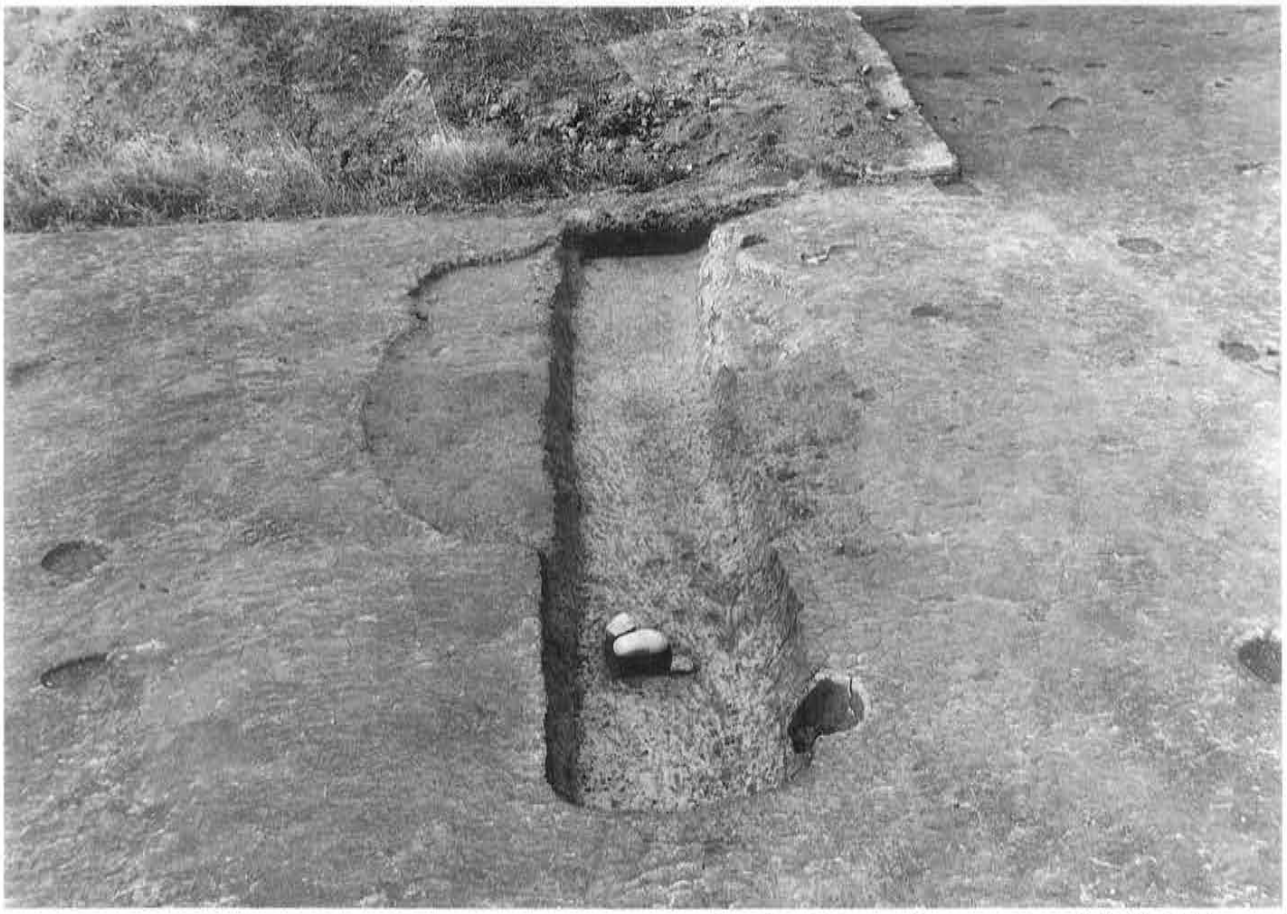
（A区）1SK20・1SD25・1SD50土層観察h--h'（西から）



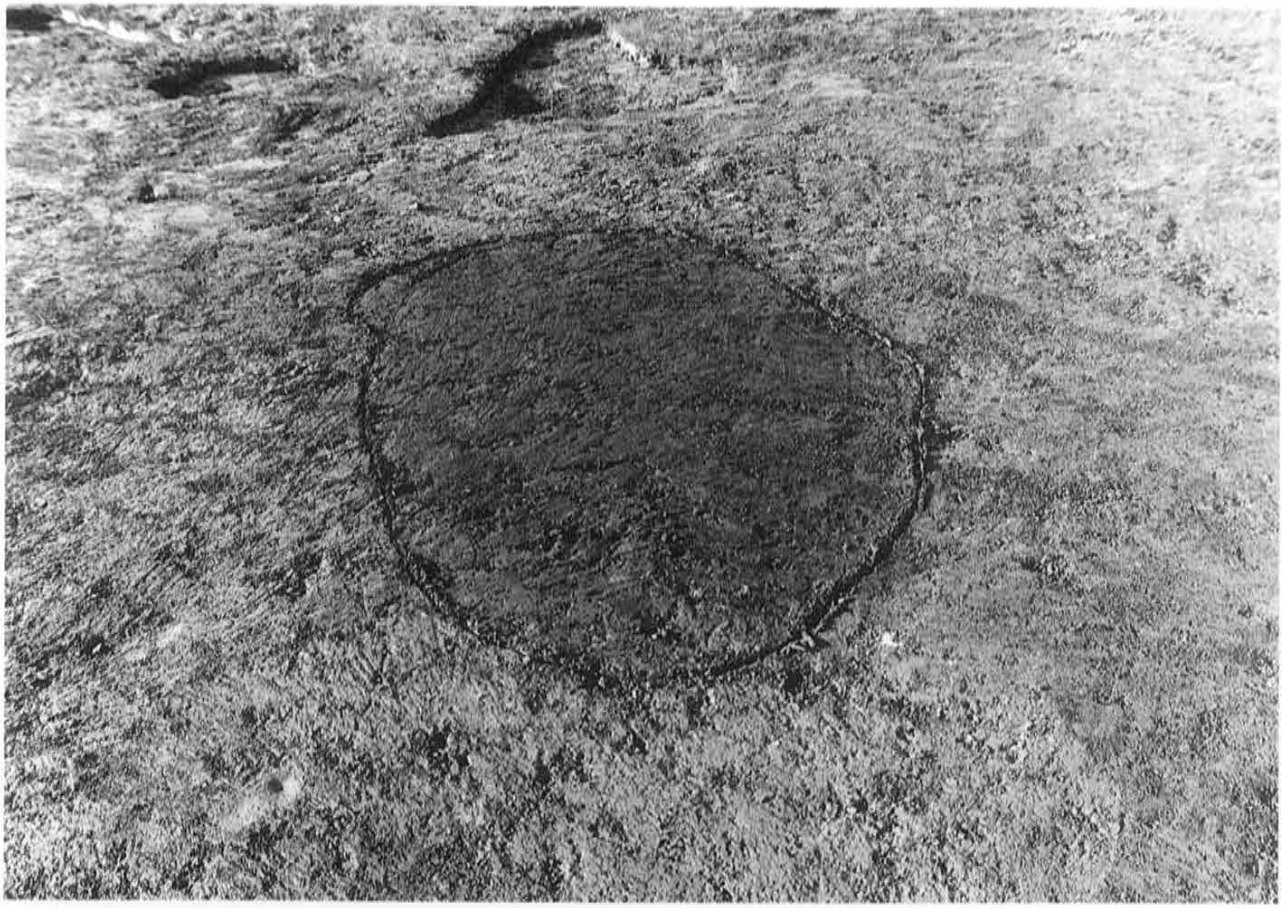
（A区）1SK20・1SD25・1SD50土層観察g--g'（南西から）



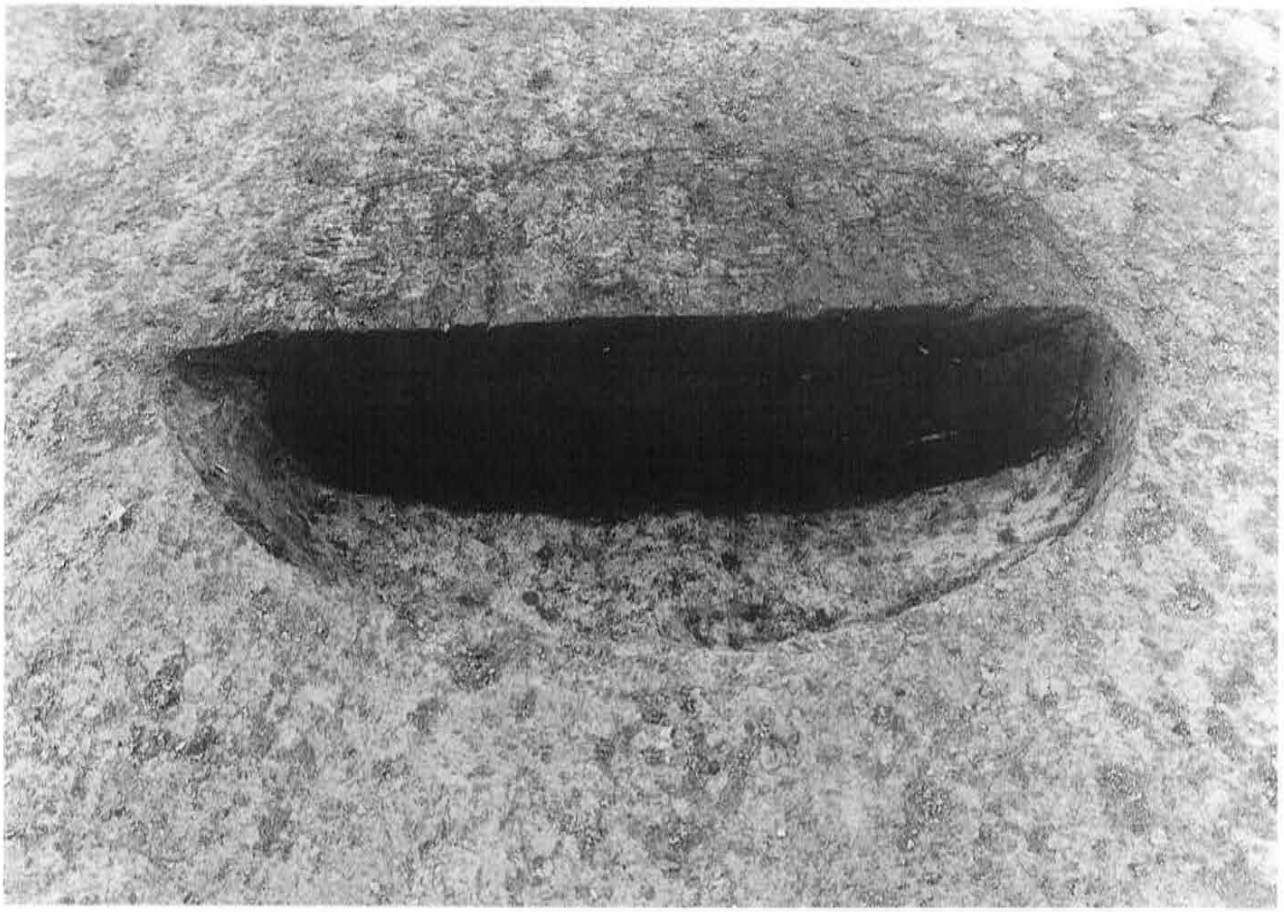
（A区）1SK20・1SD25・1SD50土層観察近景（南から）



（A区）1SK20・1SD25・1SD50完掘状況（南から）

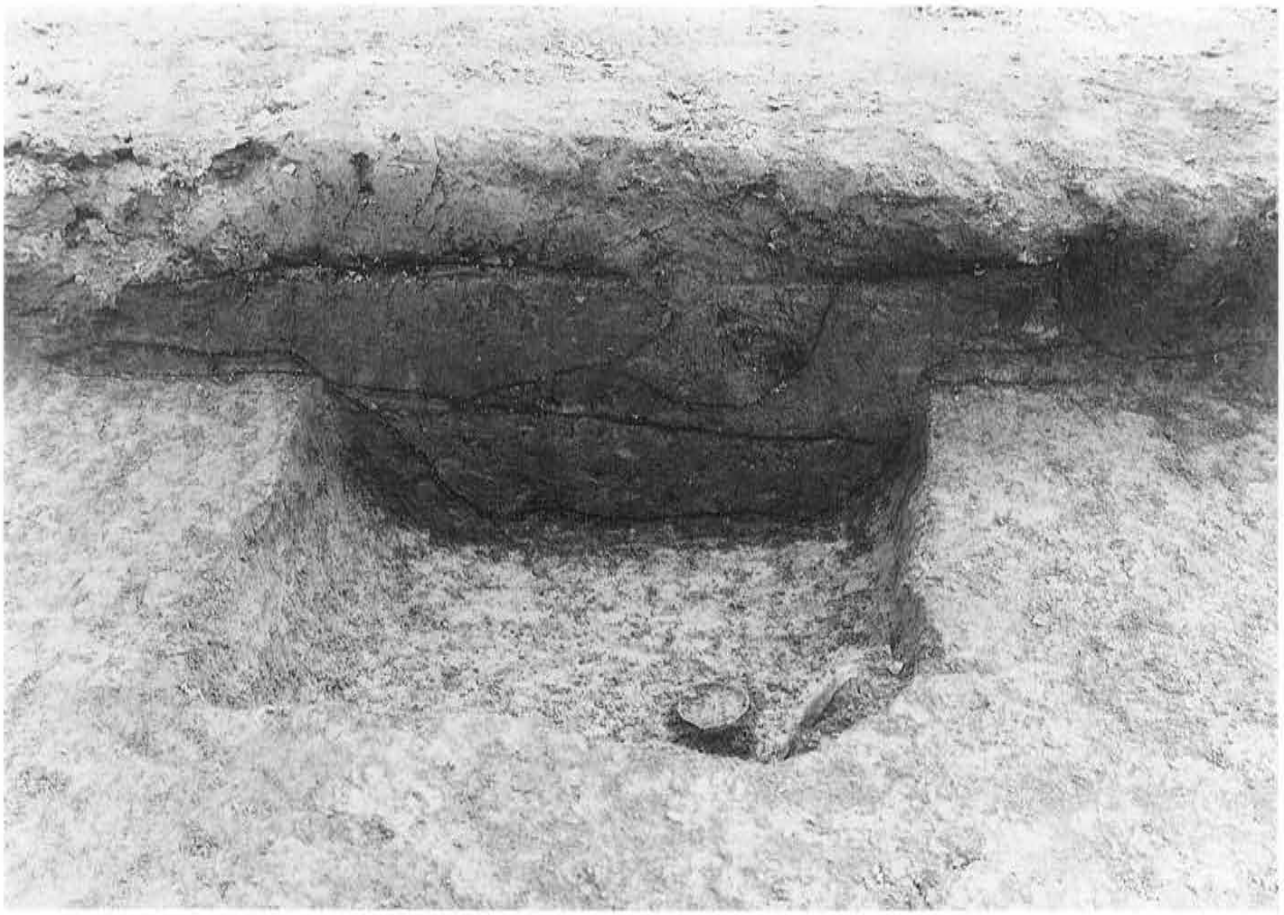


（A区）1SK30検出状況（北東から）



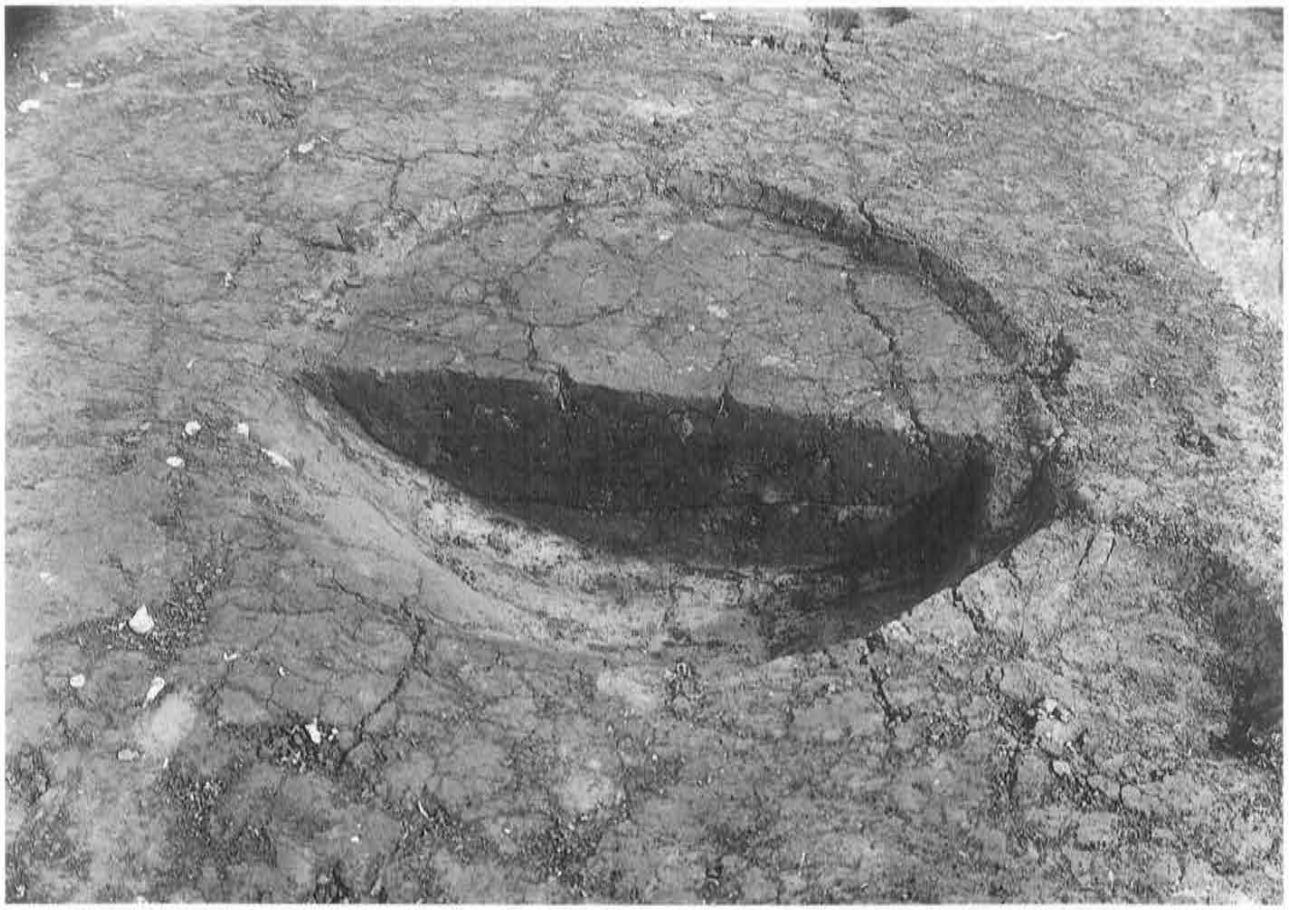
（A区）1SK30土層観察i--i'（北から）

(A区)1SK30完掘状況(南東から)

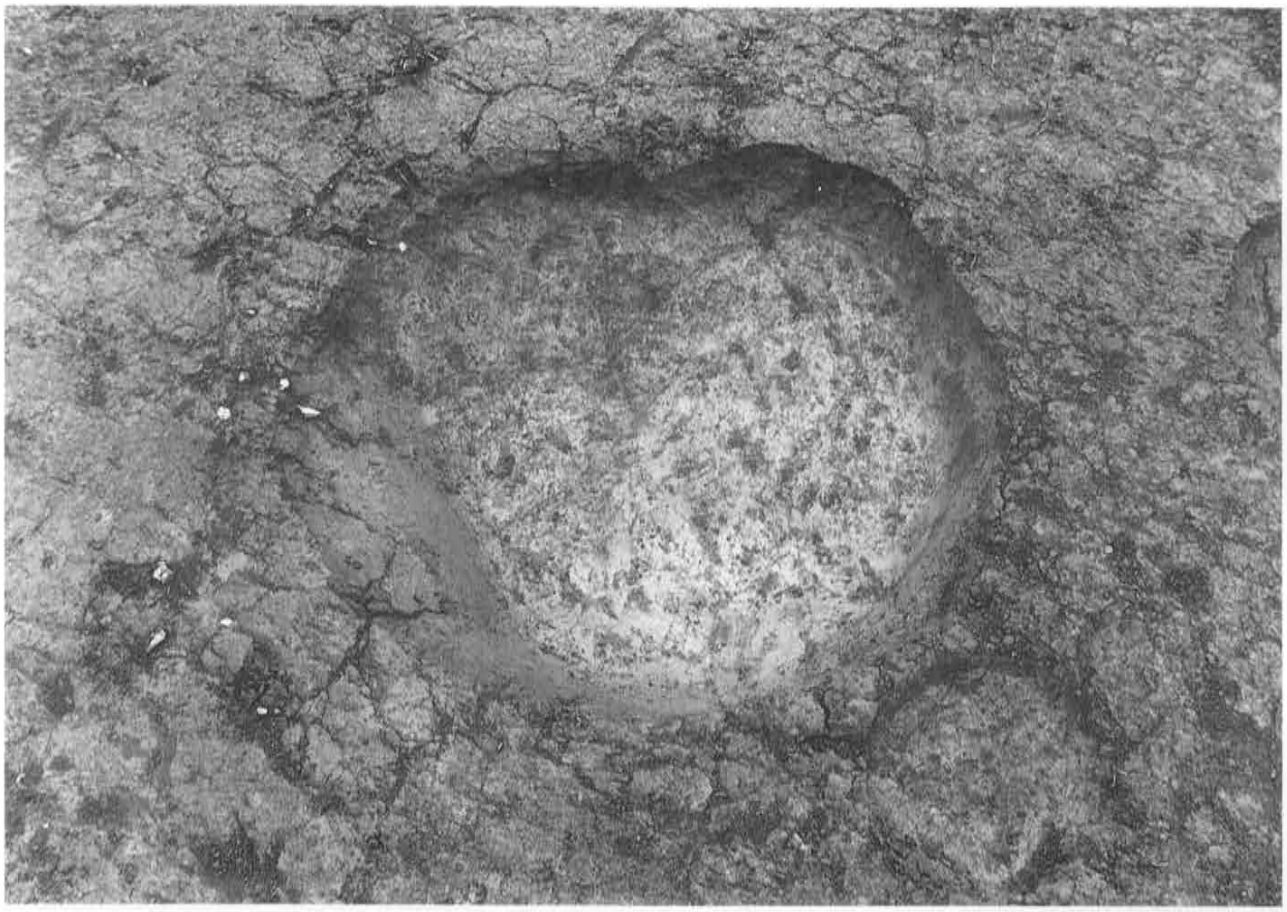


(A区)1ST35土層観察j--j'(北から)

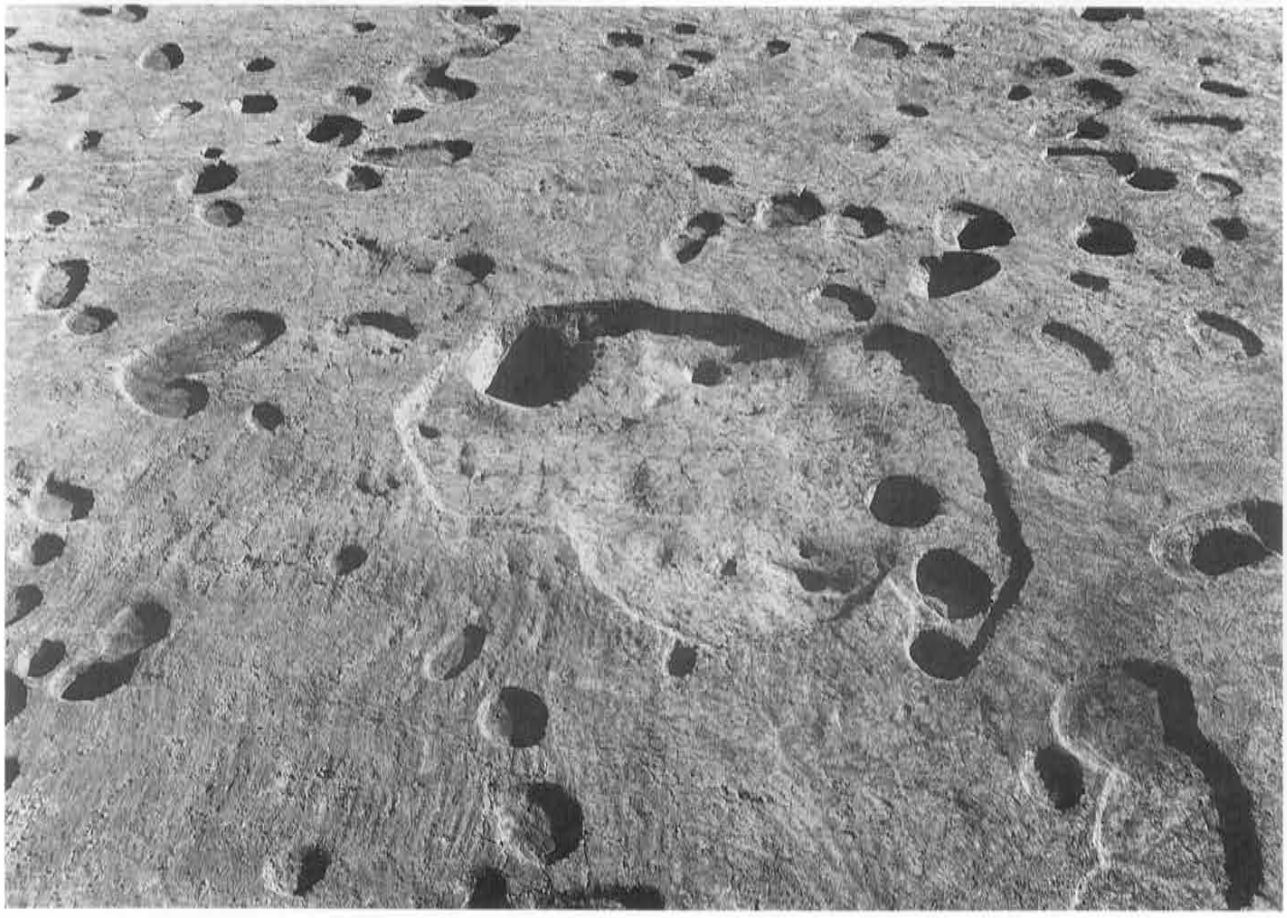
（A区）1ST35遺物出土状況（北東から）



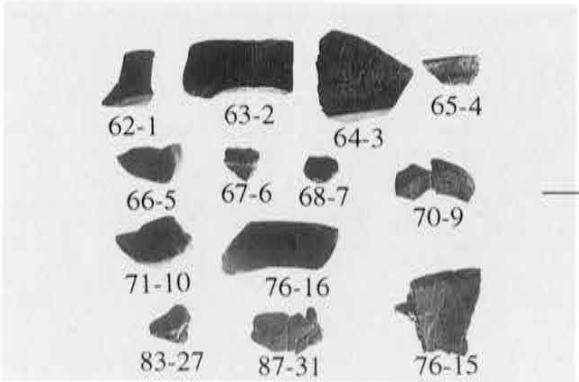
（A区）1SK40土層観察k--k'（南から）

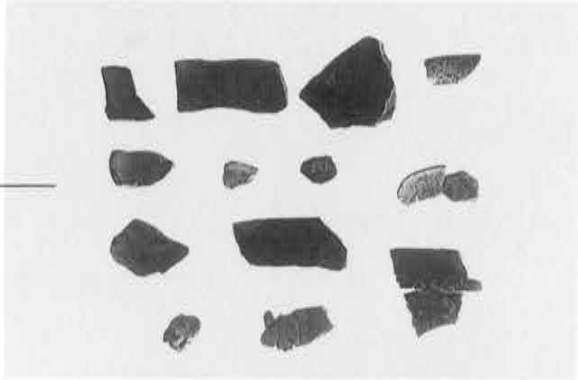


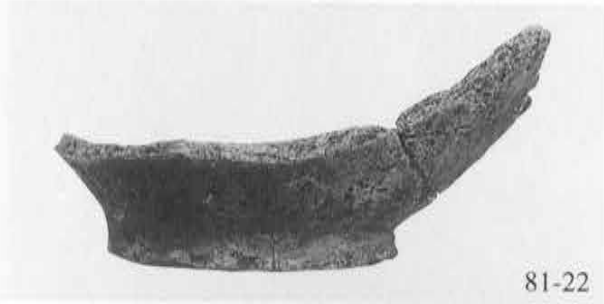
（A区）1SK40完掘状況（南から）

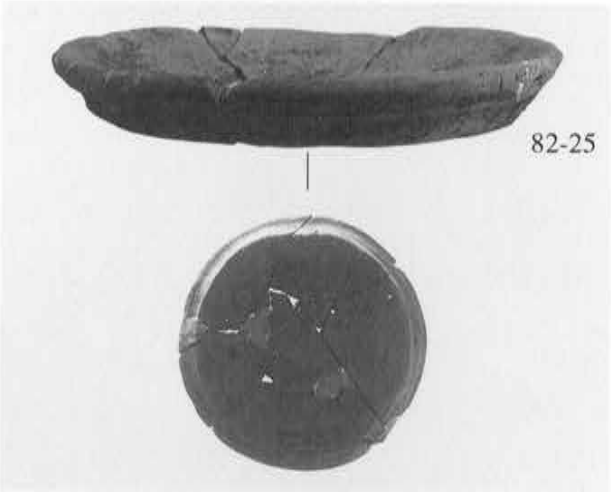


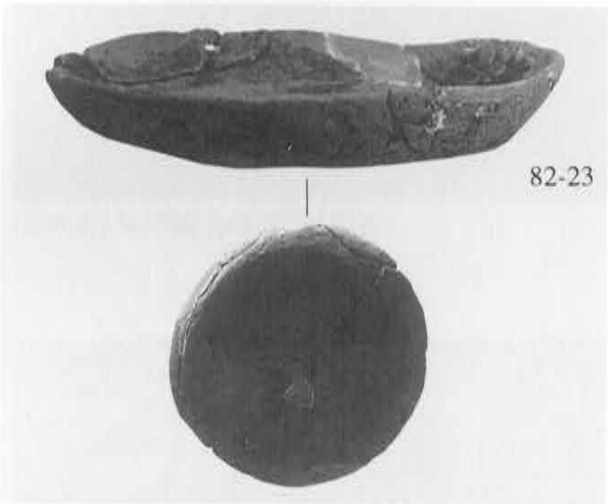
（A区）1SK45完掘状況（北から）

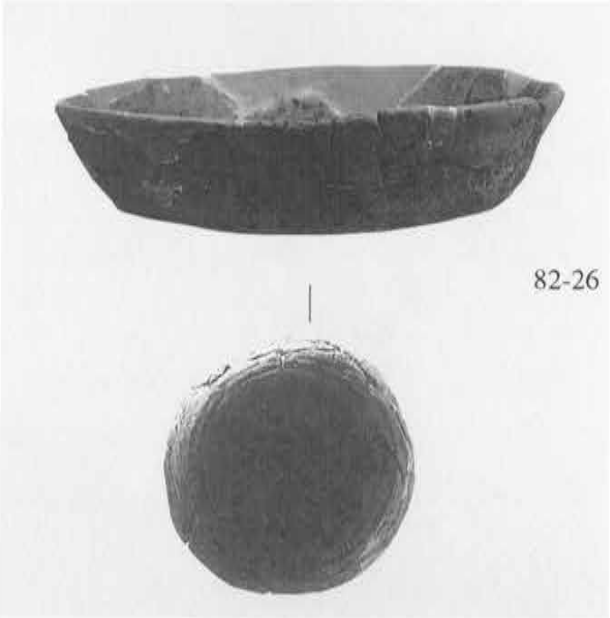

62-1
63-2
64-3
65-4
66-5
67-6
68-7
70-9
71-10
76-16
83-27
87-31
76-15

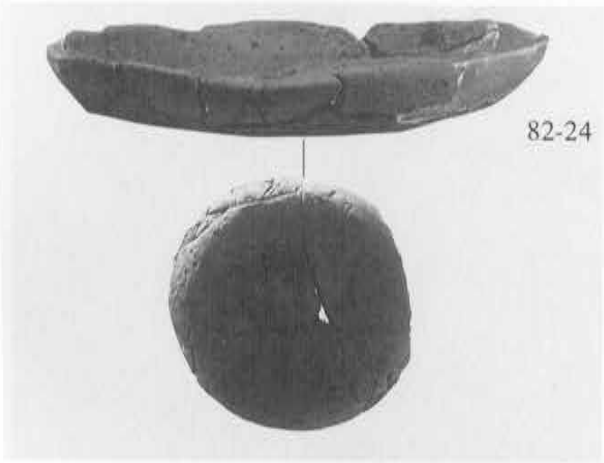



81-22


82-25


82-23

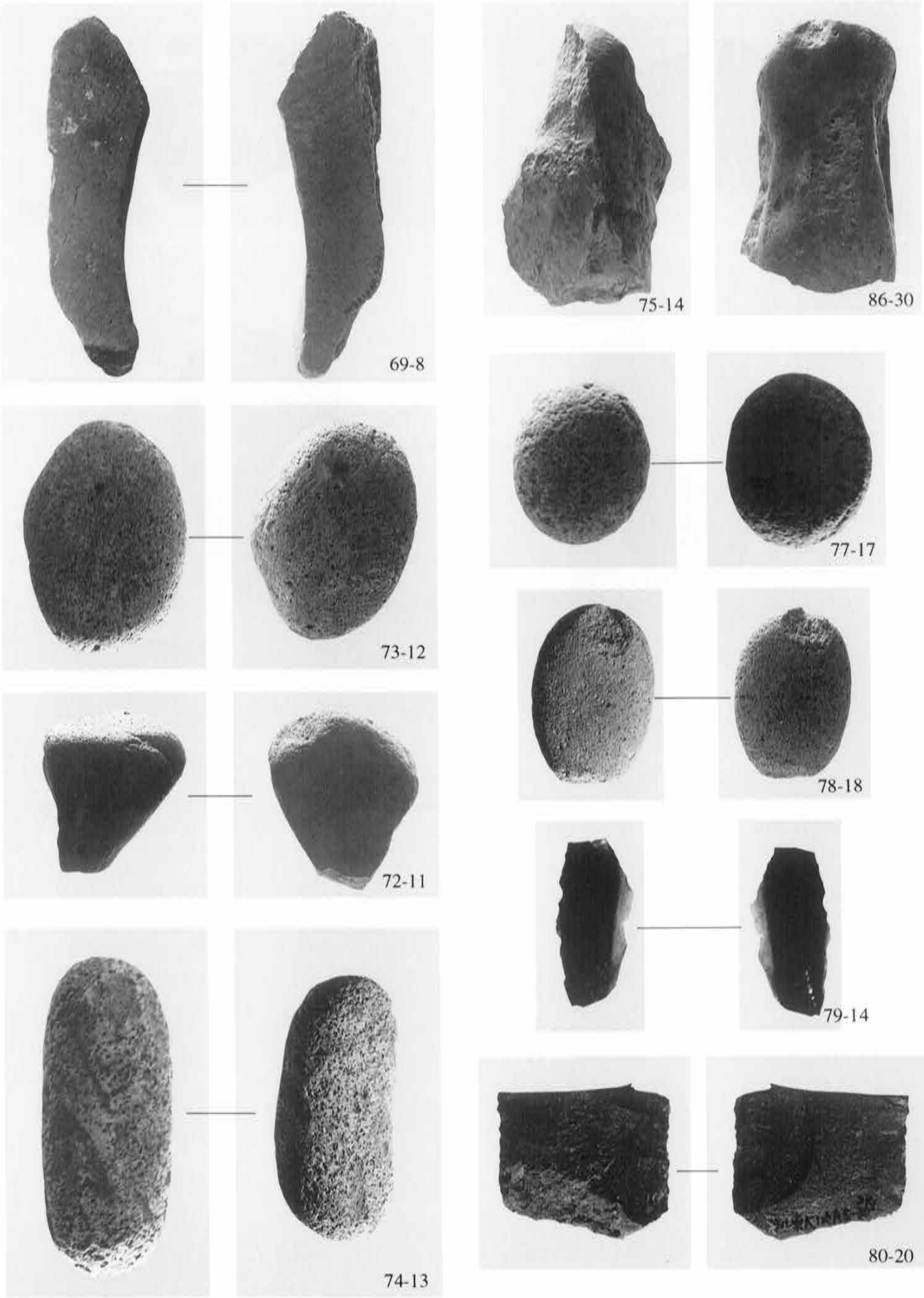

82-26


82-24

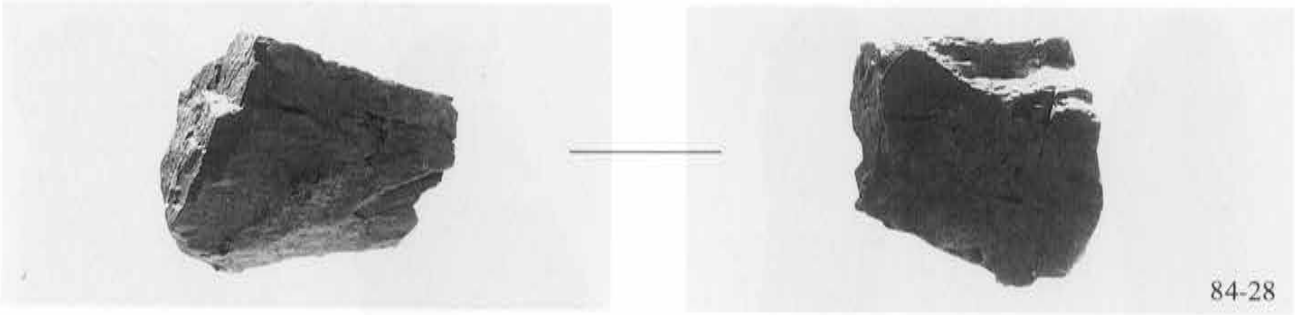
88-32

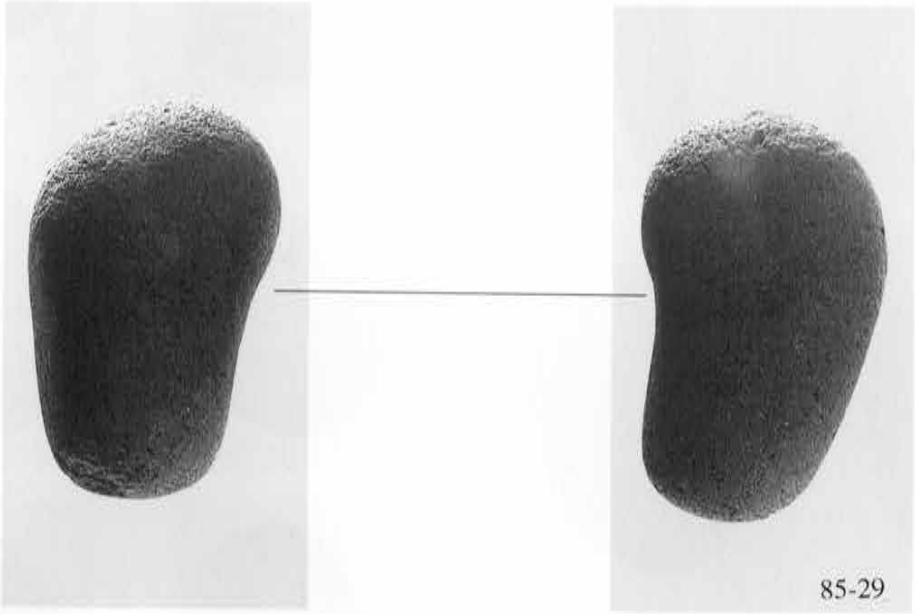
89-33

（A区・B区）出土土器（1）



（A区）出土石器（2）

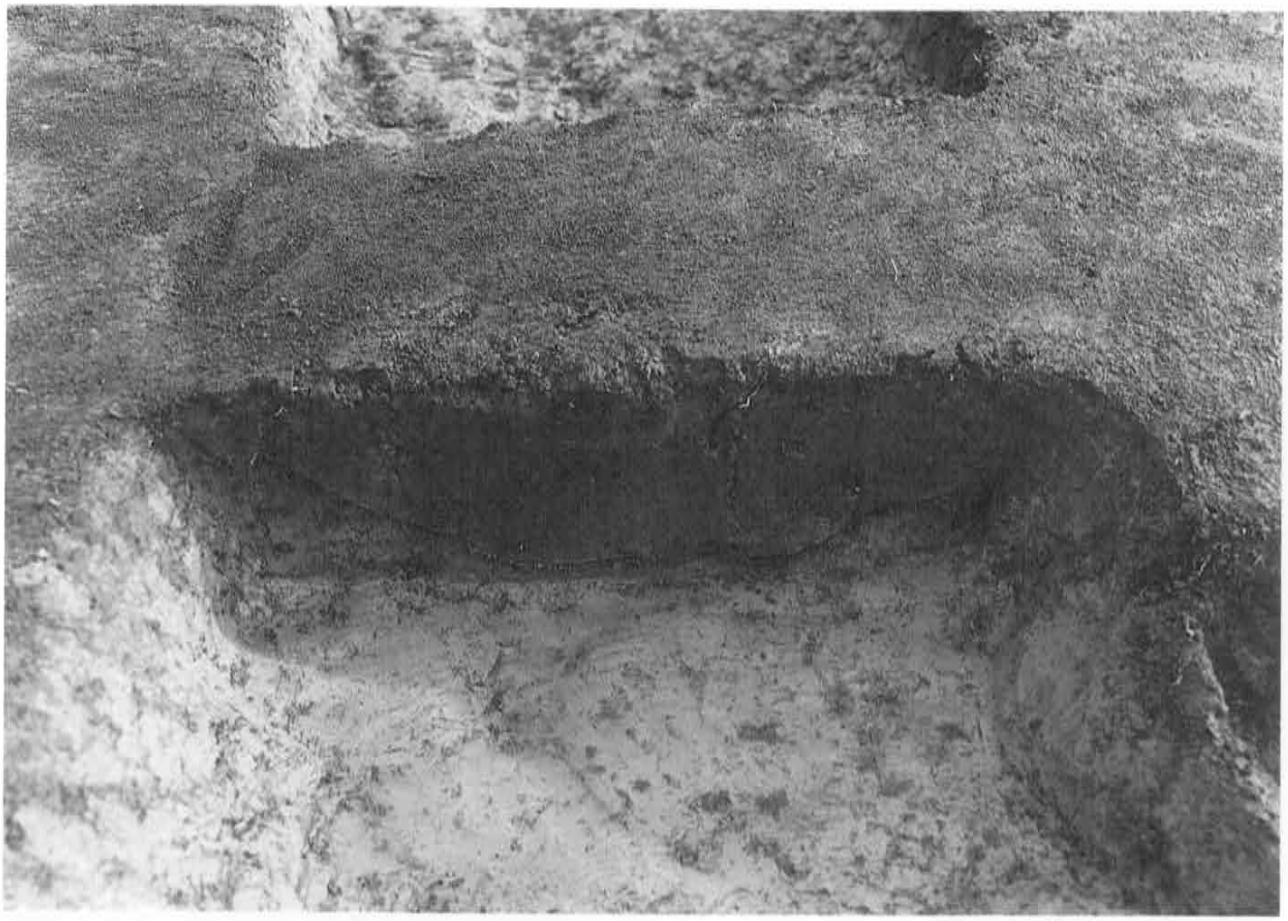




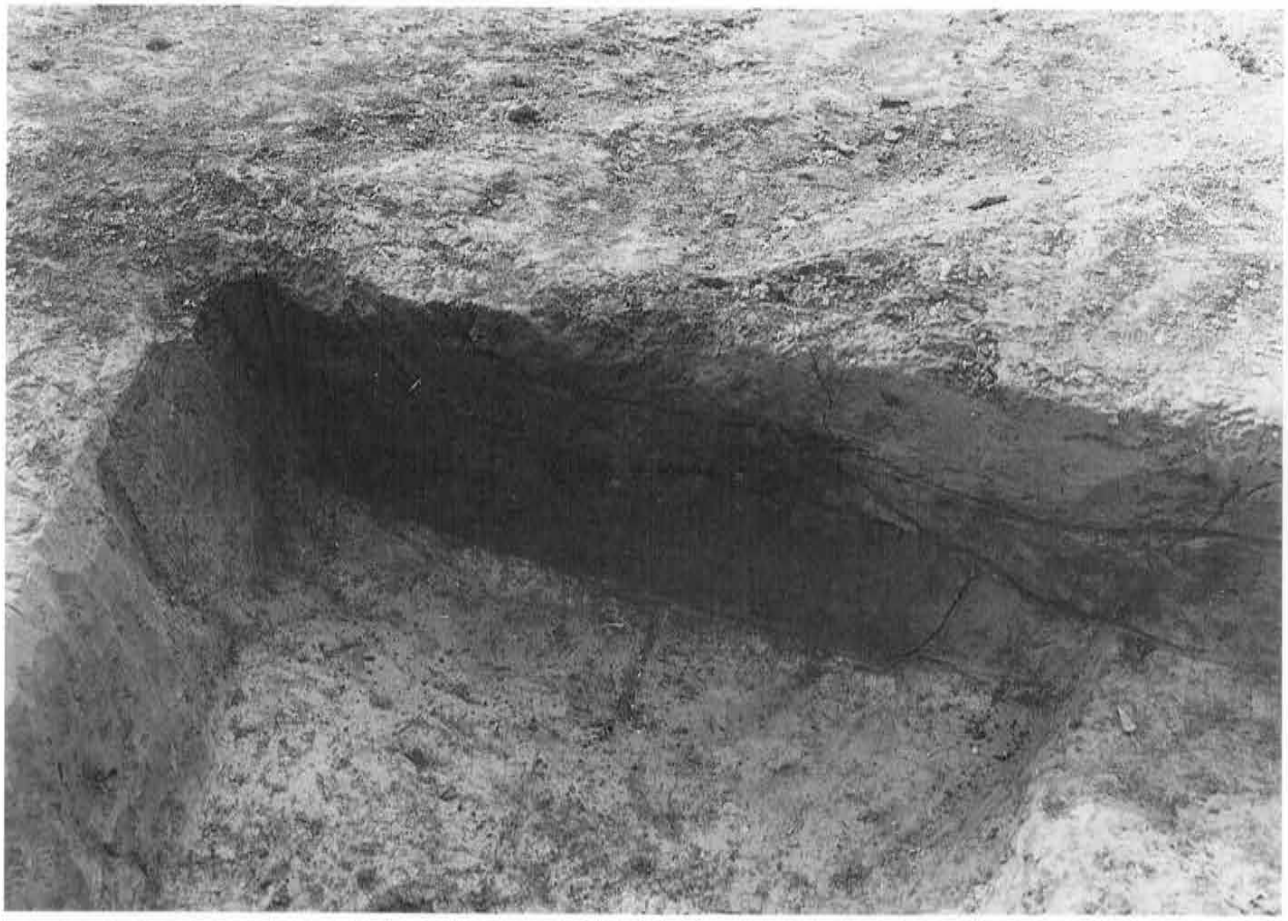
（A区）出土石器（3）

鶴田野田遺跡全景（空中写真・真上から・上が南）

全景（空中写真・北から）

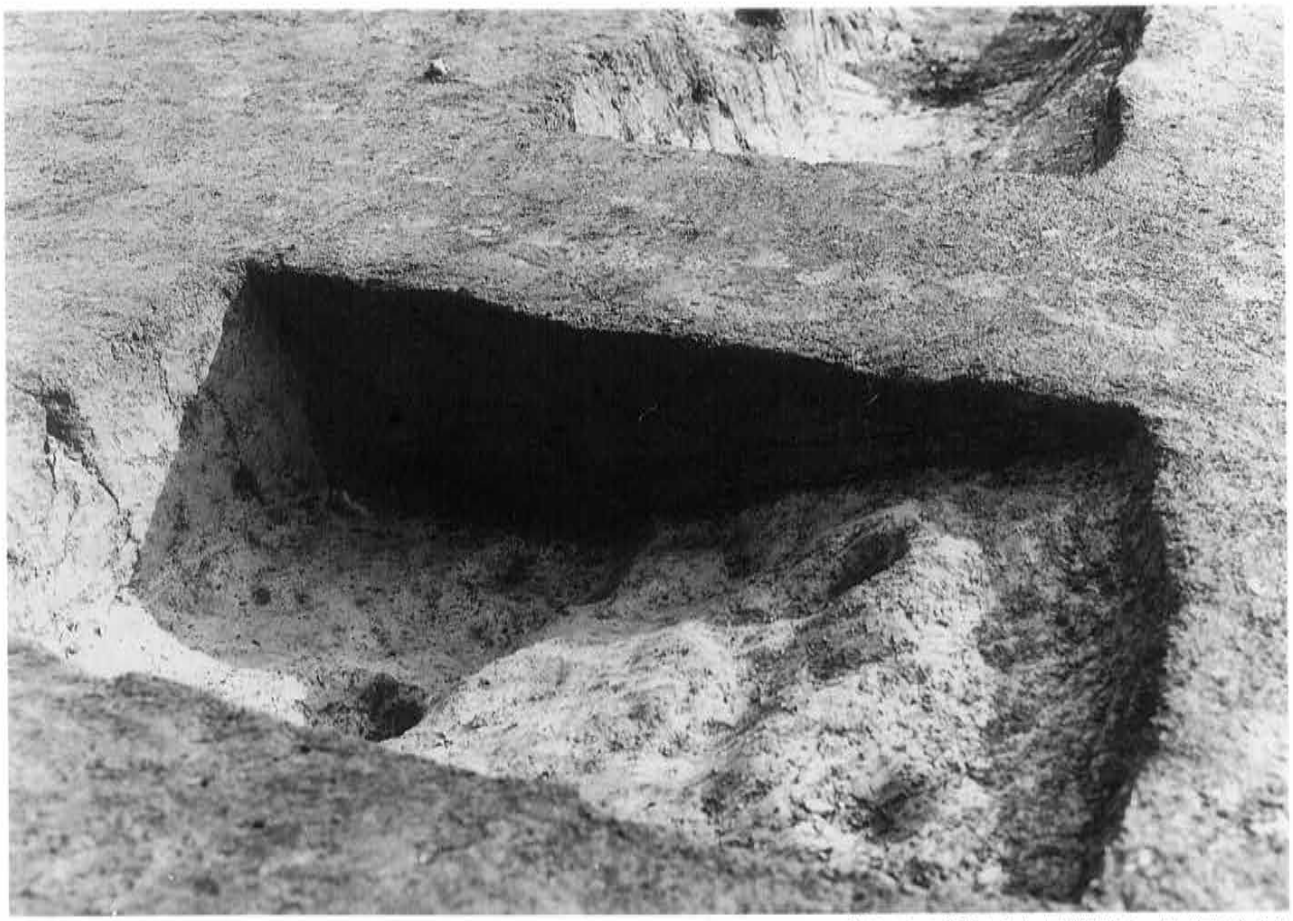


1SD05土層観察b--b'（西から）



1SD05土層観察d--d'（北東から）

1SD07·1SD08土層観察e--e'（北東から）



1SD10·1SD15土層観察f--f'（西から）

編集後記

「報告書の刊行をもって初めて発掘調査が終了する」と言う大原則があるが、ようやく4年後に報告書を刊行する事にたどりつける事が出来ました。

また、今回の報告にあたり多くの先学諸賢からご指導・ご教示・ご協力を賜った事を感謝致します。筆者の力量不足ゆえ誤解や行き過ぎた解釈で失礼があった折りには寛慮の程お願いして閣筆することにします。

最後に、報告書作成中の平成11年（1999）6月20日に東部土地改良区局長の内田信氏が亡くなったと言う悲報を受けました。氏は文化財側と工事関係者、土地の所有者との調整等で奮闘され、多忙な日々を過ごされており、文化財の発掘調査の良き理解者でもありました。この報告書を氏に捧げるとともに、ご冥福をお祈りします。

筑後市教育委員会が平成10年度までに刊行した文化財調査報告書、調査概報は次の通りである。

裏山遺跡調査概報		1966
狐塚遺跡		1970
瑞王寺古墳	第３集	1984
前津中の玉遺跡	第４集	1987
田佛遺跡	第５集	1988
蔵数遺跡群（蔵数森ノ木遺跡）	第６集	1990
高江遺跡	第７集	1991
欠塚古墳	第８集	1993
榎崎遺跡	第９集	1993
四ヶ所古四ヶ所遺跡	第10集	1994
梅島遺跡1次調査		1992
筑後東部地区遺跡群Ⅰ	第11集	1994
筑後東部地区遺跡群Ⅱ	第12集	1995
久富鳥居遺跡	第13集	1994
蔵数赤坂遺跡	第14集	1995
筑後西部地区遺跡群	第15集	1995
筑後北部第二地区遺跡群	第16集	1995
羽犬塚射場ノ本遺跡	第17集	1995
久富大門口遺跡	第18集	1998
徳久中牟田遺跡	第19集	1999
長崎坊田遺跡	第20集	1999
西部第２地区遺跡群Ⅰ	第21集	1999
前津中ノ玉遺跡Ⅱ	第22集	1999
市内遺跡群	第23集	1999

筑後東部地区遺跡群Ⅲ

筑後市文化財調査報告書　第25集
平成12年3月31日
編集発行　筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
印　　刷　山下プリント
福岡県筑後市大字熊野1848の6